
世界は無常に満ちている

花井

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

世界は無常に満ちている

【Nコード】

N5802J

【作者名】

花井

【あらすじ】

帰り道に車に轢かれそうになった友人を助けて、死亡。助けた筈の友人も無事では済まず昏睡状態……そんな状態が「手違いでした」とか、どう言うこと！？私は思いつきり、巻き込まれですかっ！異世界で仮初めの身体で期限付きで生きるそんな話。「一応主人公チート設定（の筈） 正し、それらしい表記は出る様なそうでない様な」 現在は、恋愛要素？ナニソレ美味しいの？状態です。見方によれば何処かに転がってるかも知れません。

00 人生は儚く無常である（前書き）

お初にお目にかかります花井「ケイ」と申します。

他作品ともども自己満足で書きたいものを書かせて頂いております。
誤字脱字部分は見つけ次第、修正を行っていききたいと思っております
が、見かけられましたら

ご連絡いただけるとありがたいと思います。

00 人生は儚く無常である

その日もその日とて、相も変わらず無常だった。

「で、どーすんの 返事」

大学からの帰り、最寄り駅までの道中で隣を歩く彼女に問いかける。歩きたびに優雅に靡く、高く結われた艶やかな漆黒の髪が日の光を反射し眩しい。

その間にも、すれ違う人々が惚けたような表情をして彼女を見ている。

や、見惚れるのも惚けるのもわかるが……今しがたの青年よ その表情は締めまり無さ過ぎだ

まあ、主旨を戻そう。

問いかけた内容が如何いった内容かと言えば、所謂惚れた腫れたの恋愛話である。

ついでに言うなれば、主に隣をすらりとした美しく長い御御足おみあしで闊歩する長身の美人に纏わるモノにつきる。

基本的に私には何等関係は、ない……………筈のものである ええ、関係ないですとも

「どーするも何も、お断りするよ?」

「当たり前じゃない」とか言いながら小首を傾げるその仕草が、

彼女の大人びた雰囲気可愛さを追加する。コレに落とされる男も多いが、実は女も多い。

キリッとしたド美女が多少天然入った仕草をするのが良いらしい。

（他人談）

保護欲を？き立てられるんだとか、誰かがほざいていた気もする。しかし、別に私に向かってソレはいらん、とかそんな事を思いながら口を開く。

「…………… どんだけ、贅沢者だ」

本日、お前に格好つけて告白してきたのは一応うちの大学の「Mr」だぞ

因みに、ソイツの前に声をかけてきたのは隣の大学の美形で有名な講師だぞ

そいつら以外に告白してきたのも何人かいただろうが、其処は放置だ。何故ならそいつらは私が隣に居るにも関わらず、彼女に愛を告げに来た者達だったからだ。

そうではないヤツ…私の知らない部分の事情なんぞ、知らん

そんな事が脳内をよぎるが何を言っても無駄だと思い、軽く溜息を零し呆れた口調でそう呟く。その言葉に彼女は、拗ねた様な剥れた様な口調で言葉を返してくる。

一々、無意識で行う仕草や声音も可愛らしい……………とは思う、思うが、だ

天然でやっているのもわかるし、本人無自覚だと言うのも重々承知ではあるのだ……………それが一番性質が悪いがな

私は言っても治らないモノに無駄な努力と気力は使いたくない主

義である

正しくは、根性無しとも言っ

ああ、そこら中から嫉妬の視線を感じる……グッサグッサと刺さるのを感じる。これが実質物質だったなら私もう即座に死亡ナンデスガ。………きっと、鈍器とか刃物で滅多刺しに違いない。

因みに私はこいつとは同性だ、男から嫉妬の視線を受けても嬉しくねえよ　こんちくしょう

いや、女性からの嫉妬も受けたくは無いですがね…場合に寄っては受けますが

「だって、今まで話したことも無かった人だよ？トーコさんは違うの？」

——　　いつぺん、張り倒そうか

そんな思考が脳裏をよぎるが、即座にその考えを取り下げる。ソレを実行に移した日にはきっとその日が私の命日だ。

出来れば、私は長生きしたい。　齡１９で闇討ちで死亡なんて、親に申し訳なさ過ぎるので遠慮しておきたい。

それに、お隣の美人…お人好し天然ドジッコトラブルメーカー属性にしては運動神経がよろしく居合いに合気道を嗜んでいる猛者でもあるので多少の打撃ではびくともしないだろう。

痛がるだろうが

「あ、そう…じゃあどうやって好きな人見つけないのよ　百合さんの場合、友人になったら恋愛対象じゃないんでしょ？」

それで、友人になって影で男泣きしているヤツらにどれだけ私が妬まれてるなんて、これっぽっちも気付いてないんだろっ、こいつはこいつの隣に居ることで、妬まれるのには慣れた…嫉妬されるのにも慣れた

が、これ以上面倒……というか、恋愛感情に伴う嫉妬とか崇拜感情に付属する妬みだとか良く解らないが（わかりたくもないが）そんなややこしく厄介な感情をぶつけられるのも面倒なんでホントに如何にかして欲しい

しかも、何故か周りにはこいつと二人セットで認識されているのだから困ったもんだ

「うー…、それはソレ」
「へいへい」

そんな会話をしながら駅前横断歩道が青になるのを待っていると、彼女の向こうから来る車に違和感を感じた。歩行者の多い駅近くなのに減速する気配が無い。

しかも、やたら歩道近くに寄ってきているのは気のせいだろうか。

違和感を感じた瞬間に、既に車は私達の方に……否、彼女の方に突っ込んできていた。

「あぶないっ」
「ひゃっ」

咄嗟に目の前の彼女を突き飛ばす。

ただ、私の腕力は他の女子より多少強いと言われているのだが、自分より身長の高い人間を如何にかできる程の腕力は無いので、彼女の無事は保障しかねる。

自分の無事は……諦めた。

彼女を突き飛ばした（多分）次の瞬間には、
膨大な痛みともつかぬ衝撃に意識は暗転していた。

00 人生は儚く無常である（後書き）

トリップに分類していいのか悪いのか…

余談までに一つ

作中、亨子^{りょうこ}さんは友人間ではトーコさんと呼ばれています。

作者もトーコさんで呼んでいますの後書きではその表記が多いかと思われます。

それでは、楽しんでいただけると嬉しいです。

修正履歴

H22・7・20・ 感情部読点削除、改行追加＋文頭空白追加

01 終りと始まり・死せる者と蘇える者・「前」(前書き)

文章を分割しました。

01 終りと始まり - 死せる者と蘇える者 - 「前」

目を覚ませば其処は闇。

首を捻って左右を見ても其処は黒い墨で塗り潰された様に闇一色で埋め尽くされており、この場所が何処だかすらわからない。
一応平地の様な場所に横たわっている状態であるらしい。

病……院？いやいや、此処まで暗いつて事は霊安室？
というか、あの状況で生きてるってことの方が奇跡なんじゃ……

「そうそうそんな奇跡は起きませんよ お嬢さん」
「あーやっぱり、そうですかー」

不意に聞こえた声に暢気に返事を返してから、はたと気付く。
ガバリと勢い良く「人！？」と声を上げながら起き上がり声の方向を振り向く。

其処には、真っ黒いフードを身に付け目深に被っている為、不振人物以外の何者にも見えない「者」が居た。フードから覗く口元や体つきからは男性にも女性にも見える。

判別するにこいつ美形だ……だって、骨格とか凄く綺麗だよ
因みに骨格が綺麗な人は美人が多いと私は思ってる、本気で

「貴方は珍しい方ですね、骨格をお褒めになる方なんて初めてお会いしましたよ お褒め頂きありがとうございます」

そう言って、目の前の黒フードは優雅にお辞儀をした。

所作が日々綺麗だ…って、私 骨格綺麗だって口に出した!?

「いいえ、お口には出されていませんが 私共の職には貴方の様な魂の意志はある程度、聞こえてきますから 強い意志は特に良く聞こえます」

口元だけで察するにこの黒フードは微笑みながらそんな事を言っている。

結構、口に出してないことを勝手に理解されたらびびる人間は多いんじゃないだろうか

いやまあ、骨格フェチとしては其処は強く思うところですからね
……致し方無いんでしょうけれども

「……そういうことね、その姿からだともそういう職って死神を連想するわね」

「まあ、詰まる所そんなものです」

「……ソウナンド」

「他には、天使とか言われていますね」

真つ黒なのに天使なんだ……というか、死神と天使一緒くたってある意味凄い

んん、いや逆なのか人が唯単に二つにわけて考えてるだけ?

つか、実際に天使やら死神にあった人がいたのか、いや、私は今現在進行形で会ってるけど死んでる筈だしなあ

死んでるなら誰かに伝えることも出来まいて

………まあ、いいか めんどくさくなってきた

「お考えは終わられましたか？」

思う所あつて思考の沼地にズブズブと片脚を突っ込んで、引き抜いた所に声を掛けられた。

すっかりさっぱり死神さんがいらっしやるのを忘れてました、すいません

「あ、はい 一応 結局やっぱり私の死亡は確定つて事でいいんですよ、ね？」

「ええ……そうなんです、……死亡された事に驚きは無いんですね」

何故か申し訳なさそうに死亡確定を肯定する死神さん。

いや、別に貴方が悪いわけじゃないから其処まで気にしなくても

……

自分から突っ込んでいったんだからしゃーないですよ

まあ、引きずられて体がミンチになって、目も当てられない惨状になっていないことだけを祈りますが

至つて心境的には平静なんだよね……… まあ、未練がないと言つたら嘘ではないけれど想いを残す程に強い想いはもともと持っていないし、とそんな事を思いながら苦笑を浮かべつつ言う。

「まあ、あの状態で生きてることの方がどっちかっていうと驚きですから」

「そう、ですか……その件に付いて少しお話が御座いまして足を運ばせて頂いたのです 申し遅れました、私、わたくし魂を導く者サイコパンプ統括のミューケーリウスと申します」

死神ミューケーリウスさんの言葉に、死神の役職にも上とか下とかあるのね等と思いながら向けられる深い礼に礼を返す。

しかし、何故に自己紹介？

名前がわかるはわかるで嬉しいけど……

まあ、死神に名前知ってるヒトが居るってのも面白いのみゆけーりうさん、ね……………ミューケーさんで

「ええっと、私は水江^{みづえ} 亨子^{りょうこ}です……………お話、ですか？」

「はい、まずは死者の魂の行く先について簡単に説明させて下さい」

そう言つてミューケーさんは死者の循環システムを説明してくれた。適当に纏めると、死者の魂は本来ならこの場所で留まることなく近場に居た死神に回収され、長期間掛けて色々な精査をされて輪廻の環に戻される、と。

色々な精査というのは、生きてきた人生がどんなものだったか、ソレが何度目の転生なのかとかそう言つた内容らしい。

まあ、生きてた人生で悪いこととしてたら次回の転生時にはソレに付随した「業」をつけるとか、転生回数が多くなれば高位ランク？に格上げするとかそういう話らしい。

他にも懇切丁寧に色々と教えてくれたのだが私の脳が理解できる範疇が上記までだったので色々その他の内容は右から左へと流れ去って行きました。

ああ、色んな意味で賢い頭脳が欲しい……………

「では、そちらも手配しておきますね」
「へ？」

ミユケーさんの言葉の意味を理解出来ずに間の抜けた声を上げる。ただ、私の第六感がヒシヒシと面倒事という自体を伝えてくる。

ええ、私の直感をよくよく当たりますともさ

ただし、今回の場合は逃げ場はない、何せミユケーさん達死神さん達の領域である。

如何逃げろと

「亨子さん、貴方は何故ご自分が此処に留まってらっしゃるか解りますか？」

「全く持って、解りません」

ミユケーさんの問いかけに即答で返した私に目の前のお方は「そうですね」と困った様な申し訳ない様な雰囲気醸し出しながら呟く。

だが、その言葉をかんがみるに先程の循環システムが適応されるなら私はとくに死神の精査を受けていなければいけないはずなのである。

それが、此処に留まっていると言っことは……

「何か……あるんですね？」

そう問いかければ、ミユケーさんは先程から入りたかったであるう話の本題を話し始めたのだった。

01 終りと始り・死せる者と蘇える者・「前」（後書き）

00との文字数の加減で二つに分けました。

修正履歴

H22・7・20・ 感情部読点削除、改行追加＋文頭空白追加

01 終りと始まり・死せる者と蘇える者・「後」(前書き)

あらずじ関与部分は以下の「後」で出てきています。

01 終りと始まり・死せる者と蘇える者・「後」

「ぶつちゃけ、私は手違いで死亡した、と」

「はい」と神妙にそして申し訳なさそうに頷くミユケーさん。

いや、別に過ぎたことをどうこうでキレル気は毛頭無いので気にしないで下さい

それに怒るのもキレルのも……疲れるから好きじゃ無いんだよねえ

内容整頓の為に適当に纏めてみる。

「本当なら百合さんを軽い事故に合わせて昏睡状態にし、その間に聖女として別世界を救わせるつもりだった、と そういうことではないんですよね」

確認を取りながらも自分の紡ぐ内容に「……ありえない、どんだけふあんだじー……」そんなコトを言えば、ミユケーさんが「本来なら軽く当てるだけの死者がでるような事故になるはずではありませんでした」と軽く補足を入れる。

「でも、あの車轢き殺す勢いで突っ込んできましたが」

「はい、ソレが手違いなんです 本来なら御巫^{みかなぎ} 百合さん^{ゆり}にのみの影響で留まる筈のものでしたのです……」

「ソレがあつた為に百合さんを車の軌道から逸らした私は死亡し、百合さんは重症を負って 生きてはいるが死に掛け一歩手前だと」「そうなります」

ミユケーさんが頷き肯定する。

まあ、百合さんが生きてるなら私が死んだ意味はあるのか、なとも思うのだが、本来の予定で、こんなことになれば私超無駄死にだったね等とそんなコトを思えばミユケーさんがふいに「ああああ」と嘆きの声を上げている。

……ああ、そういえば考えたことある種筒抜けでしたっけ

「まあ、私が死亡したことは置いておき　百合さんは今、昏睡状態なんですよね」

「ええ、彼女の魂は眠っているのです　そのまま予定通り異世界に渡って頂く手筈になっています」

「……………ちゃんと、私達の世界で蘇生されます？　というか、そのまま目覚める、とかではないんですね」

紡がれた言葉に今は眠っている彼女に思う。

百合さん……………アンタただけトラブル招来属性なんですか

「はい、ちゃんと蘇生されますよ……………聖女としての役割をこなせる魂と言うのは、中々いらっしやらないんですよ」

困った雰囲気を出しながらミユケーさんがイイワケを述べる。

他に代わりがないからって……………

「……………どれだけ時間が掛かるかも解らないんですよね」

「いえ、貴方方の世界では3日目には目覚める様になっています」

「時間については問題は生じませんのでご安心を」そうミューケーさんが続けるがその後が続いた言葉に一瞬固まった。

「ただ、役目を終えるまでは戻ってこれませんが」

それは体感時間では偉く途方も無いような気がするのにはキノセイデショウカ？

魂と体のタイムラグって言うのは存在しえるのだろうか

「ええっと、百合さんにしてみれば蘇える条件は「世界を救うこと」ってことデショウカ」

「そういうことになりますね」

このヒトサリと言った

いや、まあ死神だし時間の感覚って人間よりはないだろうしなしょうがない、はしょうがないんだろっけどっ

「そして、本来死ぬ筈の無かった貴方の処置なんですが 肉体が蘇生できない程に損傷しており、貴方の世界では生きていくことが出来ません」

「確かに、そらそうだ」

「なので、精査無しに転生して頂けるようになっていきますし、自分で生まれない世界などを決めて頂けます」

「……………ソレ、いいの？」

「今回ばかりは上のミスですからね、許可は取っております」

「そうなんだ……………」

上って神様の事だろうか、そんなことを思いながら言葉を紡いでミューケーさんの説明に聞き入る。

「ただ、ソレにも条件がありました」

「条件つきナンド」

「聖女と共に異なる世界に行って頂いた後、ということになります」

「……………私、精査も選べなくてもいいから遠慮し、マ」

そう言うってお断り申し上げしようとした私の言葉をミユケーさんがぶった切った。

「既に決定事項となっています」

「…………私なんざつれつてつても意味無いと思うのですが、というか私も救わないといけないのデショウカ」

「いいえ、貴方は聖女と共に行って頂くだけです。「救う」のは聖女の役目ですから」

「？　ということ？」

「向こうに行かれた後の行動は貴方が選び取って頂いて構いませんまあ上はあわよくば、聖女のサポートをと思われているでしょうが…………命を摘み取って置いて、ソレを強要を私共はできませんから…………百合さんがその世界を「救う」手伝いをするもよし、好きに生きるも良しってこと？」

「はい、期限は彼女が世界を「救う」までとなります」

「結局は百合さんの期限に合わせると」

「そうなりますね、ただ先程の転生の話以外に貴方に希望があれば、出来るだけ添うことが出来ます」

「何か希望がありますか？」とミユケーさんは私に訪ねる。

希望つつたつて、ねえ……………ってさっきの手配しておきますはそういうことっ！？

「はい」と頷くミユケーさん。

「私が居た世界の事でも……私に影響が無いことでもOK？」
「内容を聞かないことには何ともですが、出来るのであれば」
「……………私の存在の痕跡全部消して欲しいってのは」

その言葉にミユケーさんから戸惑うような気配がした。

こういう望みは少ないのだろうか？

でもそれは残してきた最愛の人達に送る、孝行

「全て消す……ですか？ 出来ませんが……よろしいのですか？」
「うん……出来れば、両親の元に私じゃない子供も……それも出来る？」

「え、ええ可能です」

「ならそれで……私さ、遅くに出来た一人娘なのね？それなのに……先に死んじゃったじゃない？ 親を悲しませるのは嫌なのよね、それなら元から私が無かった事になる方がマシ」

「……………わかりました、それらの内容に添う事は出来ると思いますので」

真剣な雰囲気です承の意を告げるのミユケーさんに私は深々と腰を折り最大の感謝を示す。

私の最後の孝行を叶えてくれてありがとうございます

「じゃ、宜しくお願い致します」

深々と下げていた頭を上げ目の前の死神さんを視線を向ける。
私の視線を受け止めながらミユケーさんは優しく穏やかな声で「

それでは、他は宜しいですか？」と紡ぐ。耳を打つその声音は、安堵を誘い私はその言葉に「大丈夫ですよ」と淡く笑んで返す。

そしてこれから行く先について少しだけ説明をつけてくれた。

「世界に渡った時点で魂に応じた身体と力と補正を 世界 から与えられると思います 貴方が進む為の力となるでしょう……………決して悪いモノではありません」

一端、紡いだ言葉を切りミューカーさんはまるで小さい子にでも言い聞かせるかのように、御伽噺でも読み聞かせるかのように続ける。

「認めたくないモノも在るかもしれませんが、しかしそれも貴方の魂の資質なのです 貴方の自身とも言えるでしょう……………受け入れて、認める事で進めることもあります」

大丈夫、貴方の魂はともしなやかで美しくそして、強かだ……………エクセステイン の魂が此処に今、現存している事を嬉しく思います」

「え？」

言われた意味が解らず聞き返すがミューカーさんはそれ以上言う気は無いらしく、穏やかな声のまま別の言葉を述べる。

とても、不穏な事を言われた気がする上に流された感があるわ

「では、今から貴方と彼女を向こうにお送りします」

そう言つて頭を下げるミューカーさんは段々と姿が薄れていく。最後に見えた彼のヒトの唇が「ご武運を」と動いた気がして、会ったばかりの……………輪廻の環上では塵芥の一つでしかない魂にまでそう告げる律儀さに笑みが浮かんだ。

01 終りと始り・死せる者と蘇える者・「後」(後書き)

死神さんは 魂 には弱いですが、ただ上には腹黒いかもしれません。

修正履歴

H22・7・20・ 感情部読点削除、改行追加 + 文頭空白追加

02 救いを求める世界・ファルディカーレ・

視界から死神の姿が完全に闇に覆われると、不意に浮遊感がやってきた。

足元から《立っている》という感覚が消え去り、バランスをとる事が出来なくなる。

こけて何かにぶつかる訳でもなく、前にゆったりとした動作でくると前転をした……そんな感覚を受ける。

漆黒の闇が何処からか漏れる光と混じり、薄くなり始める。

まるで澄んだ空が、夜から朝を迎える様に……。

我は其方^{そなた}を バシレース・ニウス と定め、歓迎する

「え？」

不意に何処か遠くで誰かが囁いた気がした瞬間、視界は白転した。浮遊感を取り払われ、重力が身体に掛かる。差し込む光に、何度か瞬きを繰り返す。

少し前の方では「ふぎゃっ」とかいう声が聞こえたが、声を上げた人間は大体予想が出来るので其処は気にしない、というよりは気にすることが出来ない。

目の前に広がるのはただっ広い 白 に満ちた空間、私と彼女が

居るのは精密な文様の描かれた直径10メートルあるうかという光を放つ円陣の上。

中央には死ぬ間際に見たままの彼女が、座り込んで目をぱちくりとさせている。

私はその後ろ人が2、3人入れるぐらいの間を空けて、突っ立っていた。

周囲にはずらりと私達を中心…否、円陣を中心としてヒトがおり、私達を凝視している。

彼らの腰元には剣と思われる物が下げられている、その中の一人が動いた。

白い服に身を包んだ青みを含んだ銀髪に深い蒼の瞳を持つやたらと顔立ちの整った美青年が円陣の中に足を踏み入れる。

青年が円陣に触れると、漏れ出ていた光は掻き消る。

瞬間的に、道が閉じられたことが理解できた。

この理解力…というよりは、感知力が補正？等と思いながら彼の行動を見守る。

明らかな殺意や敵意は出されていないのだから、私達に危害を加える者では無いのだろう。

これだったら、私達の世界の人間の方がよっぽど強かったし、ね

白衣の彼は座り込んでいる彼女と私の前に来ると、恭しく膝き頭を垂れる。

それに習うように周囲にいた人々も、同じように膝き頭を垂れる。

……壮観は壮観だが、微妙に居心地悪いわあ　しかも百合さん固まっちゃうし

「お待ちしておりました、エルピス聖女様」

そう彼は静かに、私達に向かって言った。

おおぅ……話してる内容も理解できる

エルピス……って多分、聖女の事よね

ミューケーさんの話を聞いてなかったらホントにさっぱりだっただろうな、そう思いながら沈黙を貫く。何故ならここは私の出る幕ではなく 聖女 が取り仕切るべきだろう。

「え、ええ……と どういう事でしょうか？」

可愛らしく首を傾げ、訪ねる彼女に連動して美しい黒髪がサラリと揺れる。

座り込んでいる彼女の上目遣いをもろに喰らった白衣の彼は、微かに頬に朱を走らせたがすぐさまその色を隠しこの状況を経緯を語り始める。

ふむ……彼も堕ちたな

まあ、あくどい男と融通の利かない男以外は美人の涙には逆らえない
まい

しかも超ド級の美人とくれば成功率はかなり高い

……百合さんなら老若男女関係なく堕せそうだけど

しかし、剣の携帯が許されてるなんて結構物騒な世界そうだねえ、そんな事を思いながら彼の説明を一応頭に入れておく。

簡単に纏めると、

「この世界　ファルディカーレ　に落ちた忌石きせきを浄化して欲しい」

これに尽きた。

数年前に落ちた隕石（？）が原因で瘴氣的な物が発生し、この世界に住む者達に多大な悪影響を及ぼしているらしい。

どうやらこの世界にはヒト以外に多くの種族があり、魔族やエルフなんてものもあるようだ。

聖女にしか忌石は浄化できないらしく、各国に散っているらしい。そんな忌石の影響からか、それぞれの国がなんだかんだキナ臭くなっているとのこと。

幸い私達がいるこの国　セレファン神聖国　は、其処までの影響が出ていないらしいが、何処に何が潜んでいるか解らないとのこと。このまま、隕石の影響が進めばこの世界は滅ぶ可能性があるということも話しの最中にうつすらとあがっていた。

……ねえ、これ何処のゲームですか？そう突っ込みたい

あまりにも在り来たり過ぎて私、笑っちゃいそうになったよ

まあ、笑ったら最後だろうけど

周りには剣を持つ者ばかり……しかも、それぞれ豪華な服を着ていて身分があるというのを伺える上に

多分、これは感だが………戦闘能力高い奴等ばっかな気がする
私は、痛い思いはしたくない

その話を聞いて百合さんは既に出来る事なら手助けする気、満々のようだ。

何分、彼女は正直なので顔に書いてある。そして、とてつもないお人好しである。困っているヒトは放っておけない、相手を憎みきれない……そしてヒトを疑えない。

まあ、そこは今は関係ないから置いておいて。

ただ、問題は……どちらが、聖女か

ソレをはっきりさせて置く必要性があるわね

私は誰が聖女だか知っているけど、二人同時いるなんて事はそうそうないだろうしね

「異世界の方に、頼む事は申し訳なく思いますが、どうぞお力をお貸し下さい」

そう言って、彼等は再度頭を垂れた。

そんな彼等に口を開いたのは、彼女だった。

「あ、あの私が出来ることであればお手伝いさせて頂きますので」

真剣な表情で、目の前の彼等を慮る美人を誰が嫌えようか……

おおぅ……色んな所のハートを一気に打ち抜いたね、百合さん

「そのお言葉に感謝いたします」

白衣の彼は嬉しそうにキラキラの笑顔を浮かべて彼女に言葉を返す。

……………無駄に眩しい

「申し送れました、ワタクシはこの国の神官を務めます
カリスフェイド・アルク・セレファンと申します」

……今、彼の名前に国名入ってませんでした？ 王子様とか言わないよね？ ね？

そんな私の心境を無視して百合さんが自己紹介をする。

「こちらこそ、名乗りもせず申し訳ございません 私は御巫 百合
といます」

そう言っただけで彼女が名乗った瞬間、私達の立っている魔方阵が呼応するように光を放った。

……えーっと、聖女判定機？

円陣が光った事によって、周囲は微かにどよめく。

「私は、水江 享子 姓が水江 名が享子になります」

一応、ついでに名を名乗っておく。やはりというか、何というか
円陣は無反応だった。

「神官さん、今まで聖女が二人なんて事は無かったのよね」

「文献には、それらしいことは何もあります」

「なら、今の円陣の反応を見るにエルピスは解ったようだし……百
合さん、がんばって」

につこり笑ってそんな事をのたまえば、彼女はビックリしたよう
な顔をしている。

その間にもカリスフェイド氏が周囲に何かを伝えて急速に周りが動き出している。

「え？」

「だから、百合さんが名前を言った瞬間に円陣は反応した……なら、答えは一つでしょう？」

「……私が、エル、ピス？」

「そういうことでしょ」

困惑気味の彼女に、サラリと肯定の言葉を紡ぐ。

「ええっ！？」等と驚いて混乱している彼女に、優しく声をかけたのはカリスフェイド氏だった。

「ユリ様、ミズエ様 本日は貴方方に大変な疲労を強いたかと思ひますので

ごゆっくり城内でお休み下さい」

「お部屋を用意させて頂いていますのでご案内いたします」そう言つて、彼は私達を連れ立って広間を後にする。それに従いあの場所にいた全員が広間の外へと出る。

全員がその場を後にすればあの広前の扉は嚴重に 封印 された。文字通りそのままの意味で扱つていいと思う、アレは。

多分、魔術とか魔法とかそういう系統なんだろう、扉が閉まるとすぐに先程広間に居た一人がその前に立ち 何か を囁いた。離れていたから呟いた 何か は聞き取れなかったが、彼の唇が動くのを見た。

その囁きに呼応するように扉には強大な紋様が浮かび、外見上は壁と一体化したのだ。

わーお

そう口だけで微かにかたどり、私は先を歩く彼女とカリスフェイド氏の後に続いたのだった。

02 救いを求める世界・ファルディカーレ・（後書き）

聖女様の物語は大まかな感じでは内容に出て来たコトになります。
ただ、トーコさんがそれについていくか否かは不明。

修正履歴

H22・8・23・ 感情部読点削除、改行追加＋文頭空白追加

03 選択と自覚

先を歩く二人の会話を聞きながら、ゆったりとした所作で歩を進める。

二人の会話から色んな情報を得、頭の中に収める事に没頭する。
目の前で和やかに「私のことはカリスと呼んでください」だとか
「私もサマは要りませんよ?」とか和やかに会話している二人を、
どつき倒したい。

ヒトはそれを、八つ当たりというのも知っている。

後方にいる他の方々も、百合さんに話しかけたのかそわそわしているのが感じられる。

何処までヒトを魅了すれば気が済むのだろうか、そして本人が気づいてないのがまたスバラシイ

やだなあ……………ここにいるの

オマケはオマケで捨てられておきたい

そんな事を思いながら、軽く溜息を吐き気付かれぬよう後方のヒト達をちらりと見る、此方も先方を歩くカリスフェイド氏と負けず劣らずの美男子達だ。

美人には美形が寄ってくるんでしょうか……………そうかもしれない
向こうでもそうだったもんなあ

………はあ、目の保養には嬉しいが、それは遠目からだからいいの

だ、と百合さんと付き合っていてよくよく思ったなあ

そうシミジミと遠くない過去に思いを馳せながら遠い目をしてい
ると、どうやら目的地に着いたようである。

「それでは、右の部屋をユリが隣の部屋をミズエ様がお使いくださ
い」

そう扉を示すカリスフェイド氏に促され、百合さんは扉の中に消
える。

パタリと扉が完全に閉まる音を待つて、私は口を開いた。

百合さんには出来れば聞いていて欲しくない、内容だったから。

「別に敬称は必要ありませんよ、ただのオマケに」

ふつと口元に笑みを浮かべ、そう告げる。

目の前の彼は私の自分の立場の言い回しに肩眉を上げて見せた後、
心得た様に「では、ミズエと呼ばせてもらう」と百合さんにむけて
いた笑みとはまた別の笑みを浮かべた。

人柄思いつきり変わりやがりましたワヨ……………やっぱり、一筋
縄では行かない性質か

でも……………今の所は彼さえ引き込んでおけば、百合さんは安全
かな

そんな事を考えて苦笑を零しながら問いかける。

「ただのオマケの戯言ですが、一つ お願いがあります」

「……………それは、ユリに関する？」

「ええ、彼女の存在は様々なモノを動かします……………時には 神

さえも　ただ、本人自身は貴方方が垣間見た人間そのものです　その本人を……彼女の全てを　護って下さいとは言いません、傷付ける事だけはしないで下さい」

嘘は言っていない、現に此処に居るのだって　神　と呼ばれるミューケーさん達の上の采配だろう。

その采配によって、彼女は国々を渡り歩くのだ……色んな国の色々な事に巻き込まれるのだろう、それでも巻き込んだモノを憎まず、世界を呪わず、其処にいるヒト達を愛するだろう彼女。

人々に愛される彼女を……他人の痛みに涙を零せる、彼女をどうか傷付けて欲しくない。

私は何だかんだあの子をきつく評価するけれど、嫌っているワケじゃない

どうでもいい人間だったら、世話なんて焼かないし基本的に気にも留めない

それぐらい私はヒトに対して興味が持てない、事象になら幾らでも持てるんだけどねえ

そんな私が面倒事に巻き込まれながらも、二人セットに見られるぐらい一緒に居るのは……私が彼女を許容し、愛しいと思っているから。

ただ、面倒事は面倒だけだね

親愛のアイジヨウがあるのは、否定しない

そう深々と目の前の彼に頭を下げる。

これから先、彼女はこの彼と後は周りの彼等と共に行くのだろう長い旅路へ。

それに私はついていく気は無い、聖女でもない私がこの中にいる

のは違和感以外、何者でもない。

でもって、役に立つのかもさっぱりだ

ミューケーさん曰く、世界を渡った時点で色々と与えられているらしいが、特に何か兆候があるわけでもない。ゲームや小説などの様に髪の色が変わるとか、瞳の色が変わるとか外見が良くなつてるとか別人になつてるとか、そんなだったら真っ先に百合さんが気付くだろうし。

私も彼女の変化や態度で気付く、それに百合さんは私にそういつた変化を隠す理由が無いしね
役に立たないモノを連れていけるほど 世界 を救う旅は容易ではないだろうし

では、彼女の居ない期間どうするのか…… 此处に世話になるわけにも行かない。

まあ、私は私の道を行くだけだ

「頭を上げよ、ミズエ」

不遜な声音が、頭上から響く。その声の指示する通り、下げていた頭を上げ目の前の彼を見据える。

「ユリは世界が望んだ奇跡、ソレを誰が好んで傷付けよう 儀式はファルディカーレ既に他国にも周知事実、喚ばれた彼女を傷付ければそれは世界すらも敵に回そう お前が言うまでも無く、それは私が許さぬ」

私の思いを感じ取ったのか、目の前の彼は真剣な目と上に立つ者

の空気を伴い、その言葉を紡いだ。

その瞳や言葉に、嘘や計算が無いことを悟る。

「では、どうか 百合さんのこと宜しくお願い致します」

そう言い、再度深く頭を下げる。これが私に今できる、最大の感謝の表し方。

数拍置いて頭を上げれば、目の前のカリスフェイド氏は苦笑を浮かべていた。

「お前はユリの母か姉の様だな」

そんな言葉をポツリと彼が漏らすものだから、「あんなデカイ娘か妹を持った覚えはありませんよ」などと返しながらあてがわれた部屋の扉を開ける。

その言葉に彼が愉しげに喉を鳴らした。

向こうの世界では熟年夫婦などと呼ばれていたことは、言わない方がいいだろうな

因みに百合さんが妻で、私が旦那である

「では、今日はゆっくり休め 明日はこの国の王…父に謁見して貰う ユリには先ほど伝えてある」

「……………やっぱ、王子だったか」

「ん、何か言ったか？」

「イエ、ナンデモゴザイマセン」

「そうか」と彼は呟いて、他の方々を引き連れて部屋の前を後にした。

ちなみに隣の扉には、ガッツリ護衛の方が着いている。

……… 嚴重だ、これなら、百合さんに滅多な事は起こらんだろう
そう思つて、溜息をつきながらパタリと扉を閉める。閉めた扉を
背に、部屋の中の気配を探る。

以前ならこんなことは出来なかった、コレも補正の一つなんだろう。

自分以外の気配がしないことを確認して、ずるずると扉に背を凭れさせながら座り込む。

「…………… はは、はははは」

口から零れるのは乾いた笑い、それさえも遠い。己の口から漏れているモノの筈なのに。

視線を両の手に向ける、ゆっくりとした動作で指を動かし、グーとパーを繰り返す。

其処に確かに存在する身体。

それが、もう私が向こうには存在しない証。

本当の身体はとっくになくなっているのだろっ、この身体に傷が無くとも覚えている。

心が…………… 魂が…………… あの、衝撃を

涙で視界が滲む、もう抑えていられそつに無い。

「…っふ、…………… ふうっくっ」

声を漏らさぬように、誰にも…………… 特に、隣に居るであろう百合さ

んに気付かれぬように、泣き声を口内で噛み潰す。

私だけが、私 という存在を惜しもう、今この時だけ……
大した生き方をしていた訳じゃなかったけど、もっと、生きていたかった

もっと、両親と共に居たかった
もっと、学びたかった…… もっと、もっと、もっと

大好きだと思える人に出会って見たかった、結婚だっと思って見たかった、

赤ちゃんだっけ産みたかった、愛してくれてた両親に孫の顔を見せてあげたかった、
おばあちゃんになって子供を孫を見守っていたかった

ありがとうもさようならも伝えられなかった
まだまだ、私 としてやりたいこと一杯あったのになあ

もう一度生まれなおせるといっても、私 として生まれることはできないのだろう。

だって、私 はあの時死んだのだから。

そして、私 が死んだのを知っているのは人間では私だけ。

せめて自分だけは 私 の死を悼もう。

自分で自分を悼むなんて余りにも滑稽だけれど。

泣くだけ泣いて、明日からは仮初めの身体だけど、この世界で生きる為に。

だから、もう少しだけ自分に涙を許そう。

03 選択と自覚（後書き）

思っていた以上に最後がシリアスに……
もうちょつと強い子にする筈が、あれ？

修正履歴

H22.8.23. 感情部読点削除、改行追加＋文頭空白追加

04 魂の温もり「前」

体内の水分を出し切る勢いで、泣くだけ泣いてすっきりした。

ついでに、頭もすっきりしゃっきりした。

パシッ和小気味いい音をさせて両頬を自分の手で叩く。

結構、痛い

「……さて、いっちょ頑張りますか」

自分にしては珍しく頑張る踏ん切りがついたので声に出してみる。

私、こんなキャラじゃなかったんだがな

何分、頑張るといふ才能が欠如しているのだ私は……この気力も何時まで続くものか

「まあ、いいか」

それにしても、さっきから首の裏がチリチリする。人がいないのに誰かに見られている様なそんな感覚。

………監視か何か、かな？

まあ、見られて困るような事は……してるけど、まあ一般人がコッチに来ちゃって混乱して泣くことはきっとありえるよ 多分

百合さんは……泣くより先にぶっ倒れて寝てそうだな

この感覚、円陣出てからずっと続いてるんだよねえ………始終、コ

しだとやつとこさ浮上した気持ちも沈むんだけど、どうしたものか

「そう言えば、この部屋って鏡あるんだろか」

そう言いながら改めて、冷静になって部屋を見回す。

因みに部屋を一言で言い表すなら 豪華絢爛こうかけんらん …………… 目がチ力

チ力して痛いっす。しかもあの広間よりは狭いが広い、無駄に広い。はい、大事なことで二度言いました。

一応部屋を探索しつつ、どうにか鏡を発見…………一応この部屋の中に水場がついてた。

この部屋だけでも生活できるんじゃないかなるか

「あーあー、目え真っ赤」

鏡に映った自分の顔は泣きすぎた所為で酷い惨状である。

うー…………む、鼻がずる剥けなのは痛い

ちよいちよいと鼻先を指でつつけばヒリヒリとする。瞼はボンボんに腫れ、見るに耐えない。

あー…………明日までに治まるかねえ

そんなコトを思い、軽く溜息を吐いた。

手身近にある布を水で濡らして冷やすか……………って、水はどこ？

一応、水場つぱいのだけでも水は存在せずに、見た目だけで判断すると多分だがトイレと風呂がある。蛇口とかそんなものは付いて

いない。

此れはどうやって使えと？

いや、まあ召喚なぞというものがあるのだから、魔法も魔術もあるだろうが

………使った事の無い人間には、不親切仕様の何者でもないよな、コレ

「はあ、使い方を聞く為だけに王子様呼び出すわけにもいかないしなあ　つか、百合さん以外が呼び出したら後でどうなるかわかんないよね、あの人」

「どうすつかな」などとブツブツと言っていると、急に目の前の鏡が水面みたいに揺らいだ。

「っ！？」

ついで、私は息を詰める。音も無く、目の前の鏡から腕が出てきたからだ。しかも、その腕は私に向かって伸ばされている。

どんなホラーっ！？

うえええええつ、ホラーとか大好きだけど、自分の身に起こるのはイヤだああ

いかも、怖い通り越してグロイというか、違和感ありすぎて何かイヤだっ

そんな心中を抱きながら、いきなりのホラー展開にビビリその場から飛び退こうとした。が、足はピクリとも動かない　否、身体自体ドコも動かせないのだ。

……う、動けない　嘘だろおおっ

心の中で絶叫すると同時に、その腕に触れられる。

ヒヤリと微かな冷たさを伴った腕は、私を掴んだ瞬間ずりりと何かを引きずり出した。

そして、視界は暗転する。

テレビのチャンネルを切り替えるように、目の前が真っ暗に切り替わった。

暗闇の中に唯一人、ポツリと立っている己。こんな状況に既視感デジャヴを覚える。

確か、死んだ時もこんな感じだったねえ

……突然、幽霊に襲われて死亡とかだったら、ミューケーさんに文句言つてやる

つか、仮初めの身体でも死ぬのか？

そんな疑問を思えば、それに答える声があつた。

我が与えた身体だ、そうそう壊れる事は無い

漆黒の闇に響く、威圧感のある深いテノールの声音。その声音は

何故か聞き覚えがあった。

聞き覚えがある？

次いではたと現状に気付く、私は声には一言もしていないということに。

………また、思考読まれた気がするんですが

其方が魂だけだからだろう

「ソレは解る……が、何で私が また 魂だけになってるんですか、ね！」

思考を読まれて話されるのも癪なので、暗闇からの声に言葉を紡ぐ。

その様子が面白かったのかなんのか声の主が闇から姿を見せた。

この度の^{たび}ニユスはいきがいいな

「人を魚みたいに言わんで下さい、ってか にゆす ってナンヤネ……ン」

姿を見せた声の主にすかさず突っ込むが、その後に言葉が続かなかった。

何故ならば現れた声の主は、ド派手だったからだ。

一言でいうなれば 極 彩色

まぶしっ

この暗闇にどうやって、このド派手な色を隠してたんだこのヒトこの色、既に公害だと思っよ、泣き腫らした目にはとてつもなく

毒なんですけど

我を毒と言いつける者が居たとは

呆れたような声音で、そんなコトを言われる。

私は思ったただけだ、思うのは自由だっ

まあ、それも面白くて良い

「良いんだっ!？」

我は退屈していたからな

「ソッス力」

私の言い返しに、極彩色のヒトは至極楽しげに喉を鳴らした。

しかし、よくよく見れば極彩色のヒトは一般人なら息を呑むような美形だ。翡翠の様な柔らかなエメラルドグリーンの髪に、薔薇色の瞳……そして、褐色の肌。

ド派手にしか思えない色彩もあつらえた様にしつくりと馴染み、彼を引き立てる要素になっている。

私はその域の人間（百合さん）を間近で見てる為、其処まで感慨深くは無いが。

驚かないのか……

「何故に？」

何を驚く必要があると言っのだろうか、今日で既に色んな驚きは出尽くしたと思う。

目の前にド派手な美形が出てきたとしても、あっそうで終わるような体験をしてきたのだ。

そんな事を思いながら、首を傾げれば目の前の彼は声を上げて笑

い出した。

何故にそこまで大笑いする必要性があるのか……ムツとしながら目の前の相手をねめつければ、彼は愉しげな表情のまま言う。

そう不貞腐れるな

「言動を見て大笑いされれば、誰しも不快になると思いマスガ」
ふむ、ヒトとはそういうモノのようだな

「まるで、ヒトじゃない物言いね」

ヒトでは無いから……先程言っただろう？「我が与えた身体」だと、ヒトが産む以外に他者に身体を与えられるか？

「無理だね……じゃあ、アンタは何」

目の前にヒトとして其処に在るのに、何をいうのかとそう言うてみたが、はたと気付く。

……………そういや、私は此处に魂だけでイルンデシタツケ

ミューケーさんに出会った時と同じような状態だと言うことに改めて気付く。

まてまてまてまてっ 何か聞いたら何か解らんが戻れん気がするからやめいっ

そう、気付きたくなかった事実気付き心中で絶叫すると同時に目の前の相手はニンマリと笑みを浮かべ程良く低く聞き心地の良い声で真実を紡いだ。

その笑みは言外に「知れば共犯だ」と言っている気がしたのは、きつと間違っていない。

ファルディカーレ
我は 世界 だ

.....
うそん

04 魂の温もり「前」（後書き）

微妙にホラーちつく。

そして、調節の為分割しました。

修正履歴

H22・8・23・感情部読点削除、改行追加＋文頭空白追加

04 魂の温もり「後」

こんな事で嘘を言って、何になる

信じたくなって心中でボソリと呟いた言葉に、ふんぞり返りながら目の前の 世界 と名乗った男は言う。

心中が筒抜けと言うことはこういう時いただけない。

「で、その世界サマが私に何の用？」

色々と諦めた心中で、そうつつけんどんに言葉を紡げば、目の前の彼は眉間に皺を寄せて不満を表す。

この場の空気がピリリと張るのが解った、なまじ美形だけに結構怖い。

ただ、其方に逢いたかった それだけだ

それだけだが、何か文句あるかと続けて視線で言われた様な気がした。

..... 一瞬、思考停止したじゃないか

目の前のこの御仁、行き成り何を言い出すんだ。

まるで、好きな相手に言うような口ぶりでそんなコトを言うものだから完全に呆気にとられてしまった。そんな私を置いて目の前の彼は言う。

我に属しながら、我を見る事が出来るのは……触れられるのは
ニュースだけだ

死神どもや神とは話す事が出来るが、お互いの姿を見る事はない
からな……そう、彼はボソリと続けて呟き、そのまま言葉を再度紡
ぐ。

そして、其方の魂自体は別の世界に属すモノ 通常のニュースと異
なりこの我と言う世界の中で 唯一、我と対等であり 影響を与つ
ることが出来る存在

淡々と語る彼の瞳に浮かぶのは、世界で在り続ける強き意志、そ
して……孤独と寂しさ。

その存在を嬉しく思う事はいけないことか？

いい男に子犬の様な瞳で見られればどうしようも出来ない。
特に私はこういうモノに弱い、興味を持てる持てない以前に、基
本的にはこういうタイプを放っては置けないのだ。

ああ、なんてヘタレ

目の前の相手は見た目はいい大人だが、対人では子供と言ってい
いだろう。

まあ……その、にゆす？しか相手が居なかったのだからしょうが
ないか

「別にいけないとは言っていないわよ」

……だが、ニユスは私の事を あまり好きではないのだろう
「逢って、すぐさま好き嫌い判別出来る程、私はできちゃーいない
の」

すかさずそう言い、続けて「だからって、嫌ってるワケじゃない
わよ」そう言葉を紡ぐ。

其の言葉に相手が、ほんのりにはにかんだ笑顔を浮かべる。

……何故か、今耳と尻尾が見えた気がしたが、その思考は置いて
おいて先程から気になっていたことを聞く。

「ところで、その「にゅす」って何？ っていうかこの世界に来た
時も誰かが そう、私を定めたと言ってたけど」

そう問いかければ、彼はニユスについて静かに語り始めた。

ニユスとは…… 正式にはバシレース・ニユス 【安息の王】を
意味するモノだ この世界に其方が来た時…… ソレは我だ 我が其
方の魂に見合うモノを定めた

「…… やっぱり、あの時に聞いた声はあんたのだったのね」

やはり先程聞き覚えが在ると思ったのは間違いではなかったのか、
と思いながらそんな事を言えば。

……… 我はアンタではない

声音からむすくれた雰囲気伝わってくる、どうやらご機嫌を損
ねたらしい。

「じゃあ、何て呼べばいいのよ」
今までのニユスは「ファルディカーレ」と呼んでいた

「長い……勝手に略すよ？………ファル」

音的に読みやすいように短くしてそう呼べば、彼は何度かその音を口で呟いた後、満足気に頷いた。

どうやら、ご機嫌は治ったらしい……やれやれ手の掛かる子だこと
我は子どもではないぞ、ニユス
ヤッベ、まる聞こえだったか……

「てか、私の名前もニユスじゃないわよ 亨子よ、りょ・う・こ」

意趣返しに仕返し、そんな風に名前を名乗れば目の前の彼、ファルは数度瞬きをして頷く。

そして、何度か私の名を呼んだ。

ソレがちよっぴり嬉しかったのは伝わったであろうが、声に出しては言ってやらない。

「それにしても、逢いたかったからって行き成り、魂引きずり出すことはないんじゃないかな」

逢いたかった、のもある だが……其方が泣いていたから心配になった

……それは、泣いているのを思いつき見られてたと思っていいるのだろうか

我は世界 世界は我、……この世界に居る限り、何時でも何処でも我は居るぞ？

コレは世界だからと納得しておいた方がよさそうだ。
きつと、考え始めるとドツボに嵌って抜け出せなくなる気がする。

「何ていうか、色々凄いやね ソレって」
そうか？

「まあ、世界だからあたり前なんだろうけど …………… 心配してくれてありがとね」

逢ったばかりの、しかも世界サマに心配される程どえらいことも無いだろうに、誰かが心を自分に傾けていてくれることを知って嬉しく思う、自分の現金さに苦笑が零れた。

我が勝手に心配しただけだな

そう言つてファルは私の両の瞼を手で覆う、身長差や体格差を鑑みるにデカイと思つていた手のひらはやはり片手で両の目を隠せるくらいにはデカくて、温かった。

魂なのに温かいのか

そんなコトを感慨深く思いながら特に抵抗することなく、そのままであればその温かな手は直ぐに離れていった。

「何？」

腫れを治めただけだ

「…………… 魂だけなのに出来るんだ？」

ニユス……リョーコとエルピスの身体は我が与えたモノ、其々の魂に影響されるからな

「思い込めば出来ないことも出来る…………… とか」
そういう事も含むな

案外性能のいい身体を与えられているようだ、じゃあ…………… ああ

うこともあんなことも出来るんだろうか。

ちょっと、試してみたいかもしれない

そろそろ、戻さねば……な

「そう言えば、私は魂の状態だったか」

向こうではそれ程時間は経っては居らぬがな

「へー……、魂だけってのは結構便利？」

そうとも、限らん 影響できる範囲が限られているからな

「なるほど」

では、戻すぞ

「ウィッス」

了承の意を紡げば視界は暗闇から一転、真っ白になる。

白の向こうで彼が また、な と呟いたので「また、ね」と呟いた。

ソレが、彼に届いたかどうかは解らないが。

目を射るような白が引けば、私は鏡から半歩身体を引いた状態で其処にいた。鏡で確認すれば、瞼からは見事に腫れが引いている。

……ファルサマ様である

そして、再度首の後ろにチリチリとした感覚が走り始める。

……あー……、こういうのの対処の仕方とか聞き損ねたっ

そんなことを思うが彼と交わした約束に上機嫌で備え付けられたベッドにダイブする。

彼女以外とそんな約束を此方で出来るとは思っていなかったから、

余計に嬉しい。

誰かと「今度」の約束をするのが、これほどに嬉しいって初めて思ったかも

ファルとのやり取りを反芻しながら私は眠りの淵へと落ちていった。

04 魂の温もり「後」(後書き)

世界サマと接触、ファルさんは寂しん坊デス。
長文の為分割しました。

修正履歴

H22・8・23・感情部読点削除、改行追加＋文頭空白追加

05 聖具選び「前」

目が覚めたら、いつもの日常が始まる筈だった。

そんなこたー無かったけど、ええありませんでしたともさ。

昨日の事は夢で、一人暮らしの部屋で起きて手早く準備して大学行つて講義受けて、百合さんと昼をつつきながら、この夢の話をして笑い話にしてるのがベストだったのに……。

どっちかと言うと今ではそっちの方が夢よね、うふー。

両の手をベッドに付き頭を下げている……いわゆるオールゼットという状況で深い溜め息を零した後、顔を扉に向ける。

豪奢な扉の向こうからこちらに向かつてくる複数の気配を感じ、体勢を整えベッドから降りる。

行き成り開けられてあの格好ヒト様に見せるのもなんだしね。

ベッドを降りた瞬間、容赦なく扉は開かれた。

その後は、怒涛と言つていいと思う。まるで、氾濫した川に落とされたかの様だった。

行き成り開いた扉から入ってきたのはこの城の侍女であろう方々。しかも、綺麗処揃いときた。眺めるだけなら嬉しさ目一杯で眺めさせて頂いていた事だろう。しかし、そうは問屋が卸さなかった。

その方々にあれよあれよという間に剥かれて、体も見事に磨き上げられ。

その間に壮絶な私と彼女達の攻防戦があったのは云うまでもない。ぐったりした様子の私と遣り切った感の彼女達の様子にその後、百合さんに心配までされてしまった。

そうして、準備が整えばカリスフェイド氏の案内で謁見の間へ。

カリスフェイド氏に似た……いや、逆か親子だもんな。まあ、よく似た感じの方でした王様は。

厳かな空気の中、百合さんに応答は任せて欠伸を嚙殺す事に必死になりつつ無事お話し終了。

なんだかんだ云って、何故聖女を異世界から召喚しなければならぬいか、なども話してくれてました。

後は今後についてだとかも。

まあ、聖女についてはなんとなくわかる気がする、ミューケーさんからもちよろつと聞いてたからだけど。

王様の見解イコールこの世界のヒト達の見解だと前置きをしておう。

ついでに、この世界での呼び名が違うが思考の関係上、聖女で脳内は称する。

曰く、聖女を召喚する時にこの世界に来た わたしたちのような 異世界の者は大きな力を顕現するらしくその力は基本的に癒しや浄化に特化したものなんだそう。しかも、その類の力は資質がないと扱えないとのこと。こちらの世界に居る方でも特化した方は居るようだが、忌石を浄化できるだけの方はいらっしやらないらしい。

確かに居たら、聖女なんて喚ばなくてもいいもんな。

で、何でもそこまで忌石について聖女について情報があるかというところ「前例」があるようだ。

どうやら、向こうの世界換算で五百年〜八百年単位の周期で忌石という名の隕石は飛来しているらしく、私達の前には少なく見積もって5人は聖女として喚ばれているらしい。

そして、その際の記録が魔法などを駆使して幾つか残っているのだとか。

にやるほど、そら色々心得てるわな。

と、まあ此方の世界の見解に私なりのミューケーさん達側の事情も追加してみる。

世界の危機？に際し召喚が行われると、それを認識した死神さん方の上（多分、これは神様であってる）が他の世界に現存する聖女として役目と力を行使出来る 魂 を探し、 魂 だけ此方に送りつける。

で、送られた世界が ファルディカーレ 魂 に見合った身体や力を与える。

多分この力が、ファルディカーレのヒト達曰くの 大きな力 ってことかな。

まあ、送りつける 魂 を神様が選定してるんだから 魂 に比例する力も強大なのは当たり前。

で、浄化等に特化してるのも当然……目的と違う力を持った者を送っても意味ないしね。

以上の内容の上でめでたく百合さんが選ばれましたということである。

王様曰く、すぐさま聖女用の騎士団を創設してくれるようだ。

勿論、責任者はカリスフェイド王太子殿で彼を中心に優秀な者達を集めて創るらしい。

大体一週間後には忌石浄化の巡礼の旅に出て欲しいとのことだった

のだが、百合さん自体は旅に出るのは初めて。しかも、初のアウトドアだとか。

向こうのアウトドアに比べて難易度は格段にこの世界の方が上だろう……田舎育ちの私でもキツイ所あるわぁ、何せ馬車移動。

此処の世界ではどうやら車や電車と言った電気関連は無いようである、大半は魔術や魔法で補えるからなのだろうけど。

まぁ、初めての長旅でしかも何が起こるかわからない旅路。

聖女の身を守るモノを、ということとで百合さんは謁見の間を後にした後 聖具…ヒカレスと言うものを選びに宝物庫に向かったのだ。た。

私もちゃっかり、覗きにだけはいったけど。

聖女の為にだけに作られたモノらしく、私は本当に覗くだけでした。7つあるのにその内1つしか選べないんですと、何それケチくさーとか思っていたら王子サマが解説してくれました。

聖具それぞれに宿る 気性 が違う為、それぞれに波長が合うモノ合わないモノがあるんだそうで。

なので、今の今まで使われない子もいるらしい。

百合さんが選んだ聖具は錫杖……カタルティゾと言らしい、なにぶん合気道で杖や剣の扱いには慣れているのでそれに決めたらいいです。刀が在れば刀の方がよかったんだけど…などという言葉は聞かなかったフリ。

剣は在ったのですが、扱いが違うのでやめてオイタソウデス。

……人間凶器（黒帯持ち）に武器が装備された瞬間でした。

まぁ、宝物庫に言ったら私は私で心中どえらい事になっていたんですが……

- 回想 -

「此処が宝物庫だ……ユリは入って選んでくると良い」

そう言う王子サマの言葉に百合さんは神妙に頷き、左手で宝物庫への扉を握る。

右手には私の服の裾をしつかと掴んで。

「……………」

ジロリと視線を左隣に向ければ申し訳なさそうに…………でも、視線で目一杯「一緒に来て」と訴えられる。

その視線に「知らん、行つて来い」という意味合いを込めて見つめ返せば…………長身の美人はシヨゲた。

シヨゲても私は知らん、という意志を訴えていたら横からお声が掛かった。

「ミズエ、お前も一緒に行つて来たら良い…………見るだけだな」

視線のやり取りで色々悟つたであろう勘の良い王子サマの言葉にパツと百合さんの顔が綻ぶ。

そんな彼女に周りの男共は見惚れ、一瞬沈黙が降りる。

沈黙の中、深々と溜息を吐いて扉を押し開き百合さんを掘り込み続いて私も中に踏み込んだのだった。

05 聖具選び「前」(後書き)

回想の途中で分割。

今までの日常はもう既に非日常。

05 聖具選び「後」

「つつ」

入った瞬間に空間が切り替わった。

外の音全てを遮断した静寂が其処には在り、7つの聖具ヒカレスが鎮座していた。

ただ、私が息を飲んだのは空気に飲まれたからではなく。

7つ其々の聖具の脇に眉目秀麗な者達が立っていたからだ。

先程まであの扉の向こうではこちら側にヒトの気配なんて無かったはずなのに。

「わぁ…凄い」

百合さんはまるで彼らが見えていないようにそんな言葉を漏らす、否実際には彼らは其処に立っていたわけでは無かった。

ほう、これがこの度のエルピスカ

ふふ、綺麗なお方だこと

彼らがさざめく様に口にする音は百合さんに届いていないかのよう……実際に届いていないのだろう。

彼らが話しているのは音ではなかったのだから。

百合さんは固まっている私を放置して7つの道具をじっくり手にとって眺めだす。

めずらしや…エルピス以外がこの部屋を訪れるとは

固まって息を殺していた私に気付いた一体がそう紡ぐと他のモノ達も此方に視線を向ける。

視線が合い、私はその瞬間に理解する。

彼らが聖具なのだと、其々に宿る 気性 がヒト型を取ったものなのだと。

これは、これは……………珍しいお方が居られるのう

聖具の中の内一人…一つ、老人の姿を取りながらもその瞳は光を失うことなく強く輝くモノが私を見て興味深そうに言う。

そんな彼を見ながら、若い姿をとったのならこのヒトかなりの美丈夫だろうなあと思うていた私は暢気なのかもしれない。その言葉に反応するように他のモノ達もざわめく。

まさか、バシレース殿にまたお逢い出来ようとは

歓迎ですぞ そう老人の姿をした彼は床に膝をつき頭を下げながら私に言う。バシレースという単語とその動作に他のモノ達がさらにざわめき動き出す。

そして、残りの6つは即座に老人と同じように頭を下げる。

ええー…いや、私そんな偉くナイデスヨ？

つか、頭上げてクダサイ立ってクダサイ……私が居た堪れんです

聖具にそんな礼をされるなんてあって良いのか、などと思いながら心中でそんなコトを呟く。

百合さんが居る為、下手に彼等と喋って色々聞かれると困るので戸惑っている老人の方が穏やかに笑い言葉を紡ぐ。

口に出なくても構いませぬ、我らは感じ取れます故
あ、そうなんデスカ

そう返せば、先程の思考も聞こえていたのだろっ、それぞれが頭を
上げ立ち上がる。

其々としてつもない美男美女で、そんな方々を前に一般人の私はちっ
ちやくなるしかない。

百合さんなら気にせずおしゃべりできるんだけどねー…だって、天
然サマですから。

美男美女の中に混じる気概は私には無いです、遠くからひっそりこ
っそりニマニマしながら見ているのがベストというものデスコ。

ヒトというモノは複雑なのですね

私の思考を読んだのか、真紅の髪と瞳を持つ超ド級の美女がそんな
こと言う。

………解らないと首をかしげる貴方の隣に自分が並んでいる姿を想
像すると地べたに頭を擦り付けて謝りたくなるのですよ。

それぐらい複雑なんですという意味合いを込めて思う。

彼等的には納得しきれていないようだったが、私がそれ以上の言及
をやりわり拒んだ為、頷いてはくれた。

そういえば、我らはバシレーズ殿にまだ名も申ししていなかったな

そう言うって再度頭を垂れる、深い蒼の髪と瞳を持つ美丈夫。彼を始
めとし、それぞれが順に名と物質を告げてくれる。

お初にお目に掛かります 我は、ファネロオ この腕輪に宿る気
性也

初めましてお会いできて光栄ですわ、私は^{わたくし}ディアノイアと申しま

すの

この頭飾りに宿る気性ですわ

蒼いヒトに続いて自己紹介をしてくれたのは真紅の美女。

素敵：とうつとりとしていたら真紅の美女は穏やかな笑みで お褒め頂き光栄ですわ と返してくれた。美人は目の保養ですつ。

初めまして、バシレース殿は面白い方なのね 私はこの鏡の気性、
デイクニユーミ

合間見ることが出来て光栄です、我が名はクリーノウ この剣に宿る気性だ

真紅の美女に続いて声を掛けてくれたのは緑柱石を思わせるような透明感のある緑の髪と瞳が印象的な美少女と琥珀色の髪色と瞳を持つ無骨な美青年。先の二人も含め私への敵意や不快感などは無く友好的に自己紹介をしてくれる。

バシレース殿、初めましてお会いできて嬉しく思います
わたし

私この首飾りに宿る気性、ソウゾーと申します

私はその杖に宿る気性で名はカタルティゾと申します、邂逅嬉しく思います

剣の彼の後に続いたのは紫水晶アメジストの様に深い紫の髪に同色の瞳のたおやかな女性と百合さんと同色、漆黒の髪に漆黒の瞳の伶俐な男性…
彼は丁度、少年と青年の間ぐらいの外見をしている。

儂がこの扇子に宿る気性のロギゾマイじゃ

最後のおおとりを先程の老人、白髪に銀の瞳を持つ彼が飾った。

- 回想終了 -

百合さんが彼等の中から一人を選ぶ間、彼等と言葉を交わしていたのだが。

その間で解ったことが幾つかあった。

一つ目、私に与えられた バシレース・ニユス という役割は聖女以上に稀少らしい。

ヒカレス達の中でも会ったことが在るのはロギさんだけとのこと。

(5人現れた聖女の中での遭遇は1度きりという解釈をする)

名前に關しては好きなように呼んで良いとご許可を頂いたので「ロギさん」で呼びます。

二つ目、彼等曰く 聖具^{ヒカレス}とはエルピスだけに扱われるモノであるが、バシレースに危害を加えるモノではない。

ぶっちゃけバシレースが拒絶すれば聖具の能力を行使することが出来ないとかいうことらしい、能力によって行使する対象制限を設けることも可能だとか。

なんじゃそりや……なんてご都合とか思っただのは伏せておく。

三つ目、バシレースは精霊・物質などを含むこの世界の事象に干渉出来るらしい。

後はエルピスは精霊に好まれるがバシレースは精霊達を司るんだそうだ。

どういうことかというところ、魔法・魔術は精霊達との契約で行使できるワケだが、バシレースは他者が行うその契約をぶった切ることも可能らしい。

簡単に言ってしまうえば、電力供給を発電側で強制的にストップさせることが出来ると言う解釈になる。

なんて、エグイ。

ソレって色々理違反とかになんね?とか、思っていたら百合さんがカタルさんに決めたのでお開きと相成ったわけである。

もうちょっと、話を聞きたかった……と、しよげていたらカタルさんが申し訳なさそうに謝ってくれた。

いや、貴方が謝らなくてもいいんですよ？仕方ないことなんですから。

カタルさんは今までエルピスに選ばれたことが無かったらしく、外は基本的に初体験なんだそうです。

ロギさんが旅の経験は一番長いとか補足付け足してくれました。

さて、百合さんのヒカレスもしっかと決まって旅立ちまで後7日。私も準備を始めますか。

05 聖具選び「後」(後書き)

物語の歯車は動き始めました。

紡がれる聖女の物語：そして、バシレースとは。

物語が終わる時、彼女は何を思うのか。

06 選択肢

旅の準備の為、百合さんと私以外の人たちは慌しく動き始めた。

「どうしようか？」

暢気な様子で訪ねてくる百合さんに「どうするもこうするも、ねえ」と返しながら二人してあてがわれた部屋に戻ったのだった。

部屋に入り一人になったのを確認し、ふむつと顎に手を当て椅子に腰掛ける。

さて、ここで考えよう、私の目の前には幾つかの選択肢がある。

↓ 百合さんと一緒に世界救済の旅にでる

↓ 早々に此処からトンスラこく

↓ 此処に残って職を探す

あ、後 何にも言われなかったから今の今まで思いつかなかったけど。

↓ もういつぺん死んでみる

この手段もあるか。

で、先ず無理そうなのを上げてみる。

仮初めの身体でももう一度死んでみるのはゴメンなので却下、それに自分から命を無駄にしたくはない。

此処に残って働くっていうのも手だけれども、エルピスと共に召喚されたつてのが筒抜けなので却下。

色々気を使わせて働きにくかったり、エルピスを掌中に納めようと

画策する輩がいなくても限らないし国を巻き込んだの大掛かりな面倒事になんて関わりたくない。

では、残る二つ。

百合さんと旅に出る、これが一番の良策ではある。

私の心身の疲労を除けば、の話であるが。何分既に彼女は王太子を落としているしこれからその被害者（？）は増えると容易に予想される。

ヒトの惚れたはれたに関わるほど無粋じゃないし、そんなことはめんどくさいのでそれは避けたい。

いっつも、いらぬ妬みを買うのは私なのだから今回ばかりは避けたい。

あの王子にネチネチとなんだかんだ言われるのは絶対的にイヤだ。

とするとすれば、残る一つ「早々に此处からトンズラこく」なのだが。

………トンズラこくって行っても、何処に行くよ私。

見事なセルフツッコミでペシャンコにされるわけだが。

一番とりやすく、心労的には最も優しい策ではある。ただ、私が途中で野垂れ死にしないかがどうか怪しいが。

というか、この世界に着いた時から言語に違和感はないけれど…日本語で喋っては、ないわよねえ。

これもこれで、補正の内なんだろうけど…文字もかけるのかしら。

この世界の識字水準ってどんなものなのか、そしてどれくらいあったら外へ出てやっていけるか…そこらを調べないといけないか、な？

この国に留まるにしても旅に出るとしてもある程度の常識は仕入れないとね。

………しかし、まあ監視がウザりたいことこの上ないコト

チリチリと首筋を走る違和感に眉間に皺を刻みながら思考を巡らす。多分この国に留まればこの監視は私がこの世界から居なくなるまで続くのだろう。

異世界から来た者は大きな力を顕現する…というのだからソレをむざむざ放置しておくことを上はしないだろう。

聖女とはいかないにしろ利用価値は在るのだから。

それも、またウザイ。

「部屋だけでも如何にかならんものか」

そう、ポツリと漏らせば不意に直ぐ脇…右腕の辺りから言葉が返ってきた。

「其方のバシレースの力で拒絶すればいい」

「いやいや、そのバシレースってというのは気付かれないの、ね……って

ファルさんナンデココニイラツシャルンデスカ？」

「リョーコと話がしたかったから具現化してみたのだが……変か？」

私の右腕の腕にチョココンとSDサイズでのっかっている、翡翠の髪ファルディカーレと薔薇色の瞳を持つ褐色肌の世界は首を傾げながらそんな事を言う。

「変かって、変じゃなくてべらぼうに可愛いんだけどって、そうじゃなくて……具現化って」

「そうか…変じゃないんだな、ならいい」

可愛いという言葉に満足そうに頷くファルは可愛いんだけども、だけれどもっ。

とてつもなく撫で繰り回したい衝動を抑えつつ、懽然とした口調で

言葉を紡ぐ。

「良くない……私には今監視がついているのね、ファルのことが
ばれると色々厄介なんですが？」

「リョーコにしか感知できないようにはしてある」

私の心配をよそにファルは「それに、この手の監視は音は伝えてい
ない 風の精霊共が動いていないからな」そう飄々と言う。

「私が下手に動かない限りは変に思われることはない」と

「そういうことだ、それにこういう術はバシレースの力で書き換え
る事が可能だ」

ファルが言うにはバシレースの能力で行使されている魔術が感じ取
っている動きを書き換える事が可能だそうだ。

簡単に行ってしまうえば、録画したビデオを延々流し続けるようにす
ることも可能だと言うことらしい。

録画した内容が動きの少ないもので在れば在るほど見ている側には
気付かれにくい。

「そうすれば、私はその時間に色々な情報収集が可能……でも気配
でわかるんじゃない」

「そこは気配を誤魔化すように精霊達に頼めばいい、リョーコの言
うことなら喜んで聞くぞ？」

「……その肝心な精霊さんが見えんのデスガ」

「我が与えた身体だ……出来ないと思うから出来ない」

「……出来ると思えば見える？」

「見たいと思えば、出来るのではないか？」

何てアバウト。

首を傾げて樂觀的にそんなコトをいうファルを指でつつきながら、精霊さん見たいですとか念じてみる。

特に何も起こらない……………やっぱり、ただ念じるだけじゃ駄目か……………これじゃあ、修練とかしないと使いこなせないのかねえ、ど
うだけ掛かるんだ。

そう頭を抱えて先のことを思い浮かべて、目を閉じる。

「我が行うか？」

「それで世界の力使っちゃ駄目だろ」

ファルの言葉にパツチリと目を開きそう言えば、ファルがシヨゲた。SDサイズのちみつこがシヨゲルのも可愛いなあ、などと思えば視界に何かが映った。

視線を何かの方へと向ければ、半分以上透けてる美人さんがいた。しかもこの部屋のいたるところにフヨフヨと色んな色の方々が浮遊してらっしゃるのだ。

「……………ファルさん、これが精霊さん？」

「そうなるな、エルピスとリョーコ存在に引き寄せられて色んな精霊がさつきから

構って欲しそうにしていたからな」

私が漏らした言葉にファルがうつとおしそくに冷静なお言葉を添えて返してくれた。

よく、取り乱さなかったものだと自分を褒めたい。

しかし、何でそれだけ、精霊さんには愛想悪いんだお前……………と、そんなコトを思えば平然と「我がリョーコに構ってもらえる時間が減るからだろう」とのたまわれた。

……………というか、また読まれた？

「ファル……………今度、読んだら怒るよ」

につこりと笑んでそんな事を言ってみればファルがびくつとしたが気にしない。

「で、さっきのバシレースの能力使うにはどうしたらいいわけ？」

「先程から既に行使してるだろう」

「へ？」

何とも間抜けな言葉を返した私にファルが呆れた視線を向けてきた。ひどいよ、使い方も知らない人間なんだから仕方ないでしょうに。そんな事を思えば視線から感じ取ったのかファルが戸惑ったように話す。

「先程の私の説明で既に行使しているから解ったものだと思っていた……………」

無意識で行っていたのか」

「……………え、私無意識で使ってたの？ ソレって結構危険じゃない？」

「危険……………という程では無いが、不便だとは思う」

「デスヨネ……………如何したら、いいのかねえ」

そうボツリと呟けば、ファルが私を見上げながら「バシレースであれば直ぐに制御できるようになる」そう言う。

どうやら、これまでのバシレースは使い方方は勝手に理解したらしい。というか、力の行使を無意識にやってのけたのは私だけらしい……………そういや、さっきからあのチリチリと感じる首筋の違和感がないと思っただけだろうか。

まあ、現在進行形で監視はさらされているようなので周りの精霊に頼んで内から外に音が漏れないよう、外の音に異変が在れば直ぐに

わかるようにしてもらった。
なんてラクチン。

改めて体を楽にしてファルと話し始める。

「リョーコは何にしても今までのニユスとは違うな」

「其処まで違う?」

「先ず、性別が違う」

「……………ハイ? 其処からデスカ」
「其処からだ」

妙な沈黙が二人の間に落ちるが、其処を気にしては話が進まないの
で息を大きく吸い込んで改めて問いかける。

「…………一応確認、今までのバシレース・ニユスは全員男の人だった
?」

「そつだ…もともと、バシレースとは「王」を指す 「王」とは男
で治める者を

指すことが多い、ただ居たといってもリョーコが来るまで3人し
か居なかったがな」

「…………少ないねえ、何か理由があっていないとか」

「まあ、単純に見合う魂が居ないというだけなのだが」

「見合う魂とかって如何見分けるのさ」

「…見分けるワケじゃない、魂に触れた瞬間に理解するんだ コレ
ダと」

ファルの話に「へえ」と感嘆の言葉を零しながらその後、軽く今ま
でのバシレース・ニユスについて聞かせてもらった。

話を聞く分には私は何から何まで規格外だと言うのは解った。

嬉しくないけど、ね!

能力の行使然り、性別然り、魂の在り方然り……そもそもこの世

界に飛ばされたこと自体が突発的なものなので仕方ないのかもしれないが。

ファルが「そういえば」と言葉を紡ぐ、何か思うことでもあったのかと視線を向ければ、特に重大でも何でもないように言った。

「ニユスは魔法や魔術は無制限に意のままに操れるからな、城こから出るのであれば

それで生計が立てられると思うぞ」

「それで生計を立てていたニユスもいたからな」とか続けて言う。

「それだっ!!」

魔法と魔術が使いたい放題なら外でもやっていける、その事実グッズと右手で握りこぶしを作る。

そういったものには資質が必要な様だがソコは問題ないようだし。

よし、コレで外でやっていくことに目処はついた。

なら後はどうやってこの城から雲隠れをするかということと、情報と必要な資金の調達になってくる。

「役に立てたか？」

「大いに」

ファルの問いに満面の笑みで彼の頭を指で撫でると、彼も嬉しそうに笑った。

ああ、可愛い。

ファルの可愛さに現実から逃避しかけた気力を引っ張り戻して確認したいことを彼に訪ねる。

「そういえば、ファルは世界なんだよ、ねえ？」

「そうだな、この世界が 我 だが」

「世界の常識と違ってわかる？」

「国の情勢などは興味が無いから知らぬが、基本的なモノなら少し」

そう言う彼に深々と頭を下げて「教えてください、ファルサマ」と
教えを請うたのは言うまでもない。

06 選択肢（後書き）

SDがたファルさんとのやり取りが書けて満足。
ただ、会話ばかりになってしまった（汗）

07 資金調達と通貨の話「前」

それは異世界に来て二日目とは思えない朝だった。

「ふひゃあー」

妙な声を上げながらムクリとベッドから身体を起こした私は大きく伸びをする。

無為に時間を消費するわけにはいかないからだ、基本私に与えられた時間は後六日。

その間に、この世界での常識、知識の収集と旅立つ資金の調達をしなければならぬ。

百合さんみたいに国が出してくれるわけでもないから、バシレースの能力を駆使して時間を作って自分で収集するしかないのだけれども。

「ファル、おはよう」

「うぬ……おはよう、リョーコ」

ちみっこいファルが眠そうに瞼を擦りながら身体を起こすのが見え、声を掛ける。

昨日の夜は勉強にかなり付き合ってもらったからなあ、などと思つて頭を撫でれば穏やかな笑みと声音で挨拶を返してくれる。

実際、勉強したといっても身体は眠っていたのだけれども。

先日の状態の様に精神だけ抜け出した状態でファルに基本的な常識や魔法・魔術というものを叩き込んでもらっていたのだ。

なので、身体は疲れてないが脳は眠いという状況に陥っているわけだが。

時は金也！

ちやきちやき活動して資金調達しなければいけない。

そんな事を思いベツトから勢い良く出れば「のあっ」と言う声が聞こえた。

…………… どうやらファルを巻き込んでしまったらしい、すまん。

精霊に頼んで外の音を伝えて貰える様にしてある為、こっそりと耳打ちしてくれた。

ファルの前じゃあんまり意味ないんだけどね。

どうやら、百合さんは旅の準備で午後以降数日間忙しくなるらしい。その前に捕まえなきゃ、だね。ただ、どうやってお付きの人達を巻けばいいものか……。

ずっと傍で控えて内容を漏らされても困るし、……………百合さんも長期黙っていられるかといったら微妙なトコなんだけど。何分、嘘の付けない人だからな…お偉いさん方相手に迂闊に漏らしかねない。それだと、私が至極困るワケで。

うーん……………、私がトンスラこくとくに置き手紙でも置いておくか？

あ、それいいかも。日本語であれば他の人は読めないだろうし。

おし、決定。

トンスラ前日に手紙を残すという方向性に決めれば後は行動するのみ。

情報収集は、風の精霊さん達に投げました。だって私の体は二つには分裂できないのだ。

くそう、私が二体居れば効率がいいのに。

そんなことを思いながらファルを頭に乗つけて侍女さんが運んでくれた朝食に手を付ける。

しかし……此処って、朝ごはん 米 じゃないんだよね。

米大好き人間としては切ない限りのパンの朝食……力が出ないヨ。

しよげた私をファルがよしよしと撫でてくれるが気力はちよびつとへしよげたまま、こつちで米ってないのかなーなどと思っていたのです。

その朝食が終われば私は特にするこの無い暇人、だが部屋からは出してはもらえない。

一応部屋の中に御付の方はいないものの、一応賓客扱いに近い形で聖女の隣部屋を与えられているので部屋の扉の脇には人がついているんですよ、ね。

出してもらえない………ならば、出てしまおうホトトギス…ちと、古いか。

精神での勉強会のお陰である程度は使いこなせる様になったバシレースの能力、ただ他にどういう力を有しているか今一私はわかっていない。

まあ、自分の身丈にあった能力が使えるだけでいいんです。

目下は、うまいく城から抜け出せばそれだけで充分。

そんな事を思いつつうまいく能力で誤魔化しつつ精霊さんたちの手助けを借りて城外へ。

「ビバ、しゃばっ」

「…びば????しゃば????」

ばんざーいと両手を挙げながら言った言葉にクエスチョンマークが山と浮かんでいるであろうファルに「外はいいなあってこと」と簡単に訳して伝える。

「リョーコは外に出たかったのか？」

「なら、いつでもだしたのに」などと言ってくれるファル。

お前さん、ホント可愛いわぁ……ただ、力技で外に連れ出してくれるのは無しね。

やりそうで怖いから今は聞かなかったことにしておく。

「まあ…ソナトコ 自力で出てやったからいいけどね！」

「リョーコが良いなら別に良いが……………」

「さーザクザク稼ぐぞーっ!!」

それから数日は昼間は資金調達に出稼ぎに、夜は夜とて能力や魔法・術の練習に明け暮れたわけですが。

稼いでいたのは精霊達が見つけてきてくれた果物を魔法で凍結させて砕いた氷菓子を売っておりまして。ほら、擬似アイ○の実、あんな感じ…………丸くはないけどね。

これがちっちゃい子からおじいちゃんおばあちゃんまで好評で結構な稼ぎになったのです。

もの珍しさも相まって、色んな方々が買いに来てくれたしねえ、ラッキー。

二、三日で結構な額が溜められました。

この世界で、貨幣は国ごとに分かれるらしい…………これは城の侍女

さん達に数時間紛れて仕事をこなした時に仕入れてきた知識である。ファルさんは貨幣の単位までは認識してなかったんです。

一応この国では硬貨が主体、他の国は紙幣があるところも在るらしいが今回そこは置いておく。

白っぽくてアルミ素材っぽい一番小さなコインが【1ファン】

銅素材っぽい赤いコインが【1ファンズ】

銀素材っぽいコインが【1セレ】

金素材っぽいのが【1セレズ】となる。

硬貨の単位的には昇順で並んでいる状態。

1ファン×10〃1ファンズ 一円と十円の関係だね。

1ファンズ×100〃1セレ 1セレ×100〃1セレズになる。

日常のやり取りはファンとファンズでやり取りされ、セレとセレズは滅多にお目にかからないのが常のようである。

余談ではあるが1ファンは10円あたりの換算で見積もってみよう。

この国では市場単価がそれ程高くは無かったから5ファンぐらいで売ってたんだけど、それでもかなり儲かったのはありがたい事です。素ではタダだし、其処まで裕福な人達じゃなくても食べて欲しかったから基本お安くがモットーでした。

大量の氷菓子売り切った後、ドコゾの悪徳商人宅の倉庫の果実がごっそりなくなってたらしいとかそうでないとか噂で聞いたけど……

……しーらんぺ。

07 資金調達と通貨の話「前」(後書き)

セレファンでの通貨のお話でした。
他国ではまたちよつと変わってきます。

07 資金調達と通貨の話「後」

しかし、外に出て思ったのはこの世界ってカラフリー…。

いやまあ…王子も充分カラフリーなんです、それと同じぐらいにはカラフリーでした。

城の中のヒト達の配色も凄かったけど、基本制服とかキャップとかで隠してるから気にならなかったのよねえ。

ファルバリとは言わないが、目の前を行きかう人々の色彩豊かなこと。

金の髪に朱の瞳が居れば青の髪に海色の瞳の方もいる。

まあ……さすがに翡翠色に薔薇色はいらっしやいませندしたが、その中でも私は浮いていたわけだが………何せ、漆黒とはいかないまでも黒に近い髪に焦げ茶の瞳というありふれた日本人容姿はこの国には居なかったわけです、ハイ。

おばちゃんたちには何処から来たの？何処の国の子？とか聞かれながら、売っていましたさ。

まあ、最初にヒトの目引くにはよかったわけだけでも、あー…アレダ、客寄せパンダ。

名物になっていたコトを聞くのはその後、日常に必要な道具などを買い漁っている時に人々の口に上がる噂から知った事実だったりする。

そして、四日目に溜めたお金でマントやら装備など一式を見繕って
いれば不意にポツリとファルが呟いた。

「ヒトとは、鮮やかなのだな」

それは、どういった意味でなのだろうと意味をはかりかね沈黙して
いるとファルが「我は我に住むモノ達を見たことは無かった」とま
た言葉を続ける。

何処か遠くを見るような瞳に声を掛けるのを躊躇う。

「逢えるのはニユスのみ…しかし、あれらは我に近い存在 だか
ら、逢えるワケだが」

あれらと逢えたのは楽しかったし嬉しかった」

「だがこうして、リョーコと共にこの中に入れるのはまた新鮮だ」
そう言つて、目を細め行きかう人々を心底愛おしそうに見るこの世
界の化身がとても私は愛おしいと思った。

「ファルこれから一杯、色んなトコロを巡って楽しもうか」

そう言つて、につこりと笑みを彼に向ければ彼は目をパチクリさせ
た後満面の笑みで頷いた。

私に仮初めの身体を与えてくれたこの寂しがりやの世界に 己を
見せてやろうと思った。

キミの中には多くのモノが居て、悲しみも怒りも在るけれども幸せ
も溢れているのだと知って欲しいと思った。

それから、私とファルは遠出用の装備を買い求めに色々な場所を回り着実に準備を整えていったのだった。

即座に購入したのは顔まで見事に隠してくれる大きなフード付きの旅人用のマント、何分私の配色は此方の世界の方々には物珍しいよううで一目を避ける為に飛びつきましたともさ。

後は、小回りの効く二刀のダガー……一応護身用に、ね。戦闘はしない方向性でいくつもりなのです、基本は逃走型ですから。

そして、最後に訪れたのはこの世界各地にネットワークのあるアイオン

所謂、ゲームなどと言うギルドとかいうヤツである。

旅に出るにしても定期的に収入を得なければ長旅などしてられない、なら行つた先々で収入得るしかない。ソレならば、民間からお貴族様まで色んな依頼を出されソレを消化している アイオン が最適だったのだ。

こつという設備が揃つてるってありがたい……特に国籍不明な私としては、ね。

ギルドといつても、内容は多岐に渡りイメージは「何でも屋」と言つた方がしっくり来るかもしれない。確かに戦闘や討伐に特化した方々もいらつしやる様だが平和な依頼もある程度あるありがたい場所でもあつた。

登録については多少の筆記と万が一荒事が在れば対応できるかどうか、という戦闘能力テストらしきモノがあつたのだがそれだけだった。

もつと厳しく見るのかと思いきやそんなこたーなかった。

「トールさん、これが貴方の アイオン としての証になりますので無くさないように気をつけてくださいね」

勿論、登録名は偽名です。

城の方々に調べられて簡単に見つかるのも困るしね。

なので亨子の「りよう」を別の音で読んだ「とおる」を「トール」に変えて登録したワケなのですよ。

因み性別の欄はなかったので何にも書かずだったんだけど……………いいのかねえ。

筆記や戦闘試験は全てフード被ったままの怪しい人間でも受かったよ、受かったよ。

で、有り難いことにここでも補正発揮。

どうやら、私はこの世界の言語はある程度読み書き出来るようです。

アイオン では各国にある為、支店の中には色々な国の文字で依頼が掲示されているモノを全て読むことが出来たのでそう考えてもいいと思う。

受け付けのおねーさんがにこやかに言っただけだったのはセレ硬貨と同じ素材で出来ているであろうピンブローチ。片翼をかたどったソレには、無色の石が埋め込まれている。

「その証をつけていらつしやると基本的な旅費が安くなりました」

その言葉に私は瞳を煌かせる、と言ってもその表情はフードに隠れて見えることはないのだけれども。

学生の学生証みたいなものかな……………旅費が安くなるのは大変、良い。内心、両手を挙げて万歳三唱しながら喜びつつおねーさんの話を聞く。

どうやら、石の色でランクが決まっているらしく受けることの出来る依頼内容、旅費の割引などにも関わってくるらしい。此れは頑張っただけでランクを上げねば。

ランクに応じて色が変わる仕組みになっている様である。

因みに、【無】ロシゲイトが最下位ランク

受けられる依頼内容は危険度が低いものに限られる。

所謂、おつかい程度の内容であればこのランクだけでもオツケーなのである。

一つ上がって石が【黄】ゲルプになれば、

多少の戦闘：害虫・害獣などの駆除なども含まれる。

その違いだけで無色と大差は無いようである。

次いで続くは【橙】オラン、【緋】シャルラ、【紫】ブルプ、【碧】グリユン、【紺】ダンブラオ、【灰】アシエ、

【白】ヴェイ

そして【黒】ルツ

以上の10段階に分けられる。白と黒はホンの一握りのものだけのようだ。

ロシゲイトは旅費関係は5%OFFだろそうです。

ゲルプは10%、オランは20%、シャルラは25%、ブルプは30%でグリユンは40%、ダンブラオは45%、アシエは60%…

……ヴェイは70%、ルツにいたっては80%OFFっ！

ただし、其処まで上げる気は毛頭無いので………目指せ20%OFFF！！

多分、アシエの階位からは人が極端に少ないからできる芸当なんだろうな。

そんな心境を抱きながら割引表をじっくりと眺める。

因みに昇格制度的には1ランク上のランクを5つこなす事で1昇格、2つ上であれば3つ、3つ上では1つというシステムらしい。

持ちランクをどれだけこなそうと上には上がれないのでご注意をと言われた。

………確かに、塵も積もれば山となるとという言葉が在るように。同

階位のモノを複数回こなせば上階位にランクアップするシステムであれば、必然的に無のモノでも数をこなせば上がるワケで。

【依頼】の内容に見合わない実力の者でも【依頼】を受けることが出来てしまうという状況が成立する。

それ、結構危ないよなあ……依頼を行う側も受ける側も。

……世の中うまく出来てんのねえ、とそんなコトを思いながら本日中に終わりそうなロシゲイトのランクのお使いを幾つか受け、街へと繰り出したのでした。

「そう言えば、もう4日目だあ」

「日が過ぎるのは早いな」などとのんびり呟きつつ歩を進めるのであった。

07 資金調達と通貨の話「後」(後書き)

此処では通貨の話とギルド? アイオンのランクについて少し。
一人暮らしの所持金事情でトリーコさんは基本節約家です。
使うところでは使う方ですが。

08 初めてのお仕事「前」

そして、私は受けた依頼をこなす為に森の中に立っていた。

依頼受領時に受け取った羊皮紙を覗きながら移動する光景はなんとも言えない。

草木を掻き分けながらあっちへふらふら、こっちへふらふら、真剣に探している気配は毛頭無い。

「しかし、目的のキノコは何処だ」

「木々達に聞けばいいだろうに」

ボソリと漏らした言葉にフードに埋もれているファルが冷静なツツコミをくれる。

……………だって、こういうのってウオーオーを探せだから自分で探したいじゃん。

多分、木々の精霊さん達に聞いたら即座に教えてくれると思う、というかキノコさん自身から申し出てくれそうな気配が満載なのはわかってるっ。

だって今までのお使いがそれでどうにかなってるんだものっ。

一つ目の依頼は 【お貴族様の飼い猫が行方不明なので探して来い】
だったのだが、

お貴族様の屋敷の従業員総動員しても見つからなかったにゃんこが「あ、王様だー」とかいながら寄ってきた時には如何しようかと。一瞬、この世界のにゃんこは喋るのか……………とか思いきや、私に

しか聞こえてなかったとかいうオチ。

基本、感情が表情に出にくいのが幸いした。他の人には喋ったように聞こえないニヤンコの声に素で応えてしまうほど危険なことは無いと思う。

精神異常者扱いはされたくないからね。

王様って…多分、バシレースのことよね。にゃんにまで知られてるって何……つか、ヒトにはばれていない方が凄いのか？と悩まされたものである。

ファルさん曰く「精霊や植物、動物などは僅かな気配の違いにも敏感な様だからな」だそうで。

……ヒトとか人とか人間とかは鈍いということなのだろうか、などと呟けばファルは「リョーコは無意識でバシレースの能力を制御してる節があるからね。もしかしたら、無意識にヒトには感知されぬようにしているのかもな」とか言っていた。

もしもしファルさん？

……つい、数日前に何とか一部の能力だけ制御できるようになったんですが、私。

そして二つ目は【家の屋根に害虫が巣を作ったので取り除いて欲しい】だったわけだが、

その家に言ってみれば巣を作っていたのはスズメバチっぽいもの。コツチの世界でも猛毒所持で刺されれば死に至る害虫だそうです。ただヒトにとつての害虫なので、出来れば駆除はしたくないなあと思いつつ。先程の猫の例もあつてか人払いをして蜂さんに話しかけたワケです。

「すいません、此処に巣を作られてしまうと貴方方を駆除しなきゃいけないるんで

引越して、出来ませんかねえ」

「お引越しの手伝いは幾らでもしますんで」と付け加えて言えば、女王蜂サマが出てきて「王がそう仰られるなら、御意に」と快く了承してくれました。

後は巢を丁寧な屋根から取り外して彼等のいう餌場が近くてヒトとは遭遇しそうな木に再度くつつけて作業終了。

厚地の服で覆う必要もなく蜂さん達は全員外に出て飛んでくついついて来てくれました。

巢はちゃんとしっかり抱えて運んだよ、木に取り付けるときには練習がてら浮遊の術を使って高いところに取り付けました。

どうやら、そっちの方が立地もよかつたらしくて蜂さん達に感謝されつつそこで仕事は終了。

と、まあ前述二つの依頼はどちらとも対象が勝手に自分で出てきてくれるとか、簡単に了承してくれるとかで済んでしまっているわけです。

今回の依頼は 【薬に使う貴重なキノコを取ってきてくれ】 なのだけれども

同じような結果になりそうな気配がプンプンとしているのですよ。

「別に、悪いことをしているわけではないのだから良いではないか」
「確かに、そうなんだけどね」

そうなんだけど、ね！こう、何ていうか自分でシタっていう感覚が無くて寂しいんです。

作業をしてる間は割と好きなんです。やる前と終わった後は面倒なのです。

「このままでは、夕食までに戻れぬぞ」

「あー…それは面倒、今のまま平穩に雲隠れしたいからソレまでは

目立った行動したくないね」

「んじゃ、お喋りしますか」そんな事を言って歩を進めつつ、「パステラキノコさんいらっしやいますかー？」となんと間抜けな声かけを試してみれば「「はい」「」とすぐさま返事があつた。

まあ、この能力も便利ですよ ええ、とてつもなく。

森の結構奥の方にあたる巨木の幹の虚の中、目的のキノコさんはいらっしやいました。

結構な量ビツシリ虚のなか中に生えていたので10株程残して袋の中へと入れていく。

や、天然のキノコの養殖所になつてゐるからこのままおいておいたらまた増えてるかなーとか思つたのです、はい。

「以外に奥まできちやつたーねえ」

「まあ、希少なモノだからな」

ファルと軽口叩きあいながら、きつちりキノコを入れた袋の口を閉める。口を閉めた袋は被つていたフードを取りフードの中に突っ込んだ。

どうなつてゐるかという、チョコピツと時空魔法と空間魔法を編んだ術で四次元ポケットにしてゐるんですこのフード。そのお陰で手持ちはラク。だって、手持ちが多いのは許せないんだもん、つか向こうの世界では財布も持ちたくなかつたんだよ。

しかも空間とかいじくつてゐる類なのでモノが腐つたりとかしないあたり優れたもの！

まあ、ソレまでに幾つか失敗作作つてゐるだけだね。

改めて、フードを目深く被りなおして品物をお届けに行こうと歩き出せば木々がざわめく。

「なんぞや？」

「？」

行き成り風も無く騒ぎ始めた木々達の様子に耳を澄ませてみる。

王、ニゲテニゲテ……… キケン

ざわりざわりとまるで「早く、早く」とでも急かすかの様に葉を鳴らす木々達。

私達を心配してくれているのが、危険から遠ざけようとしてくれているのが解る。

「……………何かやばい雰囲気だなあ」

「リョーコは暢気だな」

「ファルもね……んじゃ、ま 面倒事に巻き込まれない内にさつさと森をでるよ

ダッシュするからファルはしっかり掴まってるように あ、それと外ではツールで宜しく」

「心得た」

ファルの返事を合図にダッシュで走り始める。木々や草、石達もキケンを理解しているのか私の走る先を邪魔しないように避けてくれる。

そして、ファルに与えられた身体はやっぱ性能が良かった、疾く そう願うだけで受ける風の強さが変わった。

ただ、ソレをもってしても 危険 からは逃れられなかったのだが。

「だーい、ピンチ？」

「余裕だな」

「いや、虚勢」

そんなやり取りをしながら対峙しているのは3m以上の巨体を誇る
熊らしき生物×4。

しかも4体とかありえねえ…………。

そつえばキノコ採取の隣に人食い熊撃退依頼なんてモノが在りま
したねえ、【紫^{ブル}】ランクで。【紫^{ブル}】ランクであるのだからそれなり
に危険度が高く人手も要するモノなのだろう。

あー…運ないわあ。

「リヨ、トール…こやつら忌石の瘴気にあてられている」

「……………ってコトは近くにある？」

「欠片がな、塊であればもっと被害は大きkarう」

「成る程」とか頷いている間に、目の前の熊さん達はグルグルと唸
りながら私への距離を縮めてきていた。その熊さん達に絡み付いて
いる、どす黒い粘着質っぽい靄状のモノが見えた。

……何じゃね、アレ 不気味にも程があろうっ！！

此方が靄状の多分 瘴気 にビビッて居ると一体が飛び掛ってきた。
ふぎやーっ！！

08 初めてのお仕事「前」(後書き)

ピンチがピンチに感じられない謎。
というより、表現力欲しいですorz

08 初めてのお仕事「後」

ギリギリで対面衝突を回避する、が その動きと同時に他の熊達も動き出す。

「トールツ、雷を喚べ」

「む、むりっ……絶対、大穴あけるっ」

「ならば、腰の二振りは飾りかつ」

ファルに叱咤されながら、身に着けていた二振りのダガー手に持つ。生まれてこの方扱った事のある刃物は包丁しかありませんよーっ。

そんな絶叫を心中でしながら振り下ろされる熊の鋭い爪をダガーで流し、補正でどうにか怪我を負うことなく逃げ回る。

以前より上がった腕力、跳躍力、反射能力その他諸々が無ければ私は既に此処でもう一度死んでいただろう。

とんとと軽く地を蹴り二足立ちをしている3m越えの熊の頭上を軽々と越える。

一体の背後に回り、覚悟を決めて熊の身体にダガーを付き立てようとした瞬間、黒い靄が私に絡み付いた。

嫌悪感で無意識に眉間に皺を寄せる……………そして、口にしていた。

失せろ

黒い靄が私に触れた所から 消失 していく。あまりの予想外の事に固まっていれば4体の熊に絡まっていた靄は影も形も無くなっていた。

しかも、先程の凶暴さは靄の所為だったのか…それらを取り払った

熊達はいきなり大人しくなった。
というよりは、本来はもともと大人しい気性だったのだろうか……
凄く好意的になった。

「え、何……今の」

「トールが行ったんだろう」

驚いてそんな事を言うത്ファルが呆れたように「何を言っているんだ」と言う。

えー私、何もしてねえよ？

アレが生理的にとても受け付けなかっただけなんだが。

そんな感じで呆然としていると「王、ありがとう」一番の巨体がそう言いながら擦り寄ってくる。

うおう、ちよつと待て。まだ、私は刃物片付けてないからっ。

いそいそとダガーを仕舞い、擦り寄ってくる熊達の毛並みを撫でてやる。そうすると嬉しそうに彼らは身体を摺り寄せてきた。

かわええ。

はっ、まったり癒されてるわけじゃないのデスヨ。

「キミ等は忌石の所為であんな感じになったの？」

「……キセキ？あの石をそう言うのであればそうだ」

「場所を教えて貰っていいかい？……ソレはキミ等もヒトも森も不幸にしてしまう」

さっきのあんな状態の動物達が増えれば森は荒れ、人が動物や森を傷つけるだろう。

ソレを予想していながら放置することは出来なかった。

其処まで非情ではないのです、私。

何分さっきの状況から察するには、私が拒絶すると消えるっぽいのでどうにか此処から引き離すことが出来るだろうと踏んでいる。

ファルが言うには、あるのは欠片だって言ってたしね。
こっち、と案内してくれる熊達に囲まれながら欠片が存在する場所
に向かう。

其処は風は淀み、草木は弱り、土は腐っていた。

隕石の欠片である忌石……それも極々小さく小指の先程しかないソ
レが埋まっている場所は荒地と化していた。

動物達は5m以上離れた場所で心配そうに様子を見ている。

「……………このサイズでこの影響力って忌石ってえげつくね？」

「コレだけで済めばマシな方だ」

「そういや、ファルさん以前もこんな事あったんだっけ……………一種の
病気？」

「かもしれないな」

そんな会話をしながら忌石に手を伸ばす、まるで抵抗するように石
から靄が湧き出てくるが邪魔なんで叩き落とせば簡単に 消 失 し
た。

そして、私の指先が忌石に触れればまるで世界を呪うかの様な暗澹
とした色から白っぽい灰色へと変化を遂げた。

「あれ？…嫌悪感が亡くな……………った」

つんつんと忌石だった石をつつきながら危険が無いことを確認して
拾い上げる。

じつくりと穴が開きそうな程見つめても先程まで気味の悪い靄を吐
き出していた石は、ただの変哲の無い石のまま。

「流石だな……リョーコにはアレを掃う力も在ったのか」

「え、バシレースの力じゃないの？」

「我がニユスに定めたといっても、能力は魂の持つ性質に左右される」

「だから我も全ての能力を知っているわけではない」そうファルは続けた。

ふむ……力を与えるには与えたがどんな能力になるかは魂の素質次第ということらしい。

「……私も救済の旅に出た方がいい？」

「解らぬ、その旅はヒトとの関わりは外せぬ この度の様に動物達だけであればいいが、

リョーコの力は 浄化 や 被い清める ではなく 失くす 喰らう という質のモノ

ソレをヒトが認めるか忌むかは………また別だ」

「デスヨネー………って 失くす は解るけど 喰らう って何さ」

「我には先刻のアレはリョーコが喰らっているように見えた」

「………総じて 掃う に纏めておいて、哀しくなるから」
「わかった」

がつくりと落ち込んでいる私の頭をファルがよしよしと慰めてくれる。

ありがと………でも、落ち込ませたのはキミデスヨ。

忌石の気配がなくなったのを感じたのか動物達が寄ってくる。感じられる好意と感謝がこそばゆかった。

一息ついて、さて街へ戻るかと顔を上げれば視界に入るは忌石の所為で荒れてしまった土地。

忌石が埋まって居た場所を柔らかく撫でながらポツリと「ごめん」それだけ呟く。

別に私が悪いわけではない、ソレは理解している。

でも、気づくのがもう少し早ければ……ファルディカレ世界の傷は少なくて済んだのではないかと思ってしまう。

それは傲慢にも等しい考えだというのも解っているのだ、自分が居ない場所で私がどうこうできるワケも無いのに。

それでも……傷ついた土地が精霊が動物達が木々達が見えるから声が聞こえるから、彼等を愛しく思う心があるから何も出来ないことを悔しく思うのだ。

そして、瞼を閉じ無意識に行動を取っていた。

荒れた大地に傳くように口付けを贈る、ソレはヒトに贈る呪いまじないと同じ「早く良くなりますように」という気持ちを表す術。

「リョーコ、目を開ける」

ファルの言葉に伏せていた瞼を上げ、顔を上げる。

「なっ」

目の前に広がっていたのは先程までの荒地ではなく生き生きと生きる大地。

空気は清浄なものへと変わり、草木は瑞々しく生い茂るそんな風景が広がっている。

「なななななな」

「リョーコがやったんだぞ」

呆れた視線を私に投げかけながらファルは「リョーコが力を分け与えたからだ」と言う。

ごめん、私は自分が何かやった気がしない。

だって、自己満足しかやってないよっ！！ただの呪いだよ！？

「だが、事実リョーコが此处を再生させたんだ……………ありがとう」

嬉しそうに笑む彼を、擦り寄る動物達に私の心は救われる。精霊達が嬉しそうに踊るその様子に、何かできたのならしいかと思ひ私も笑みを零す。

一頻り、落ち着きを取り戻し腰を上げる。

「あ、そういえば 人食い熊騒動は治まったんだが……………依頼書どうするか」

アイオン に依頼の終了を伝えに行った頃には既に日は赤く熟れていた。

因みにプルプランクの人食い熊の依頼は熊さん達の伸びた爪を4体分を切らせて貰って、一応撃退しましたーと申告し取り下げてもらった。

だって、大人しくなった熊さん達を無闇に傷つけないしね。出来る対処はして置くべきでしょう。

そしていつの間にか報奨金はその依頼分も含まれてたり、ランクが【紫】まで引き上げられてた事実には首を捻る嵌めになったの言ってもない。

08 初めてのお仕事「後」(後書き)

何時になったら動き出すんだろう。

そして、相変わらずバシリースは色々謎のまま。

というよりはトーコさんの魂が謎？

09 逃避行のはじまり、はじまり「前」

さて、期限の日まで後一日を切ったワケですが。

夜の帳がまだ上がりきらぬ頃、コトリと羊皮紙の隣に羽ペンを置く音が一室に響く。

掛けられた監視の術はいつも通り上書きを施してあるから、朝が来て侍女の方々来るまでばれる事はない……と、思いたい。

「出るのか」

「今日、出なければもう機会はこないだろうしね」

ファルの問いかけに答え、「百合さんの………物語が終わるまで利用され続ける囚われの身なんてゴメンこうむるわ」そう続ける。羊皮紙に綴られたのは、まるで書留の様な短文が数文。そして、

「ごめんね、百合さん 友達甲斐のないヤツで」

それだけ呟いて、マントを身に付ける。

マントは部屋に置いておくといつ見つかるか解らない為、基本はフアルにしまっておいて貰っていた。

そんな手間も今日でお終い。

此方に来た時に身につけていた服は既に四次元フードの中へ、マント自体破れて使い物にならなくなると困るので術で強化させている。その強化に気配を消す術も含まれていることは言うまでもない。

また、いつか…ね。

そう口だけで紡いで転移の術を発動させる。

部屋自体にファルが魔術の発動の気配を消す術を施してあるから、遠慮なく使わせてもらう。

そして、二人が姿を消した後にはそれら術の痕跡を消す術も平行して施す。

私が力を覚醒させているということに気づかれてはいけない。

バシレーズはあくまでも世界と同等、ヒトに扱われ利用される存在になつてはならない……と、心の奥底で誰かが囁く。

意識を集中させると共に私を中心に足元から仄明るい光が複雑な陣を形成する。

外へ

陽が昇り、人々が活動し始める頃。

彼女にあてがわれた部屋からその人物は忽然と姿を消した。

友人である聖女へ置手紙だけを残して。

城にいた魔術師が部屋を検分しても魔術が使われた形跡はなく、監視の術も歪められた気配も無く正常に作動していたとのことだった。

残された置手紙にはこう書いてあったそうだ。

『百合さんへ

この手紙が手元にある頃には私は居ないと思う。

すまんね、私は別行動とらせて貰うよ。

ちゃんと生きてはいると思うから心配せんで？

アンタも頑張んなさい、無事であることを祈ってるV

亨子

P.S.

狼にはお気を付けあれ

またね

『

「……………っ、トーコさんのっ　ばかあああああっ」

その日、城の者達は初めて聖女の怒った声を聞いた。

09 逃避行のはじまり、はじまり「前」(後書き)

お城から出立、珍しく聖女様は大絶叫。

09 逃避行のはじまり、はじまり「中」

晴れた空の下、街中を歩くのは何処にでも売っている様な旅人用のマントを身に付けた者。

目深く被ったフードで顔を隠しているが見たところ年齢14〜16あたりの様に見受けられた。
通りにあるカツラ屋に目を留めたのか、彼はその店のドアを隠すことなく潜ったのだった。

「店主殿、此方は髪を買い取って頂けるのだろうか？」

その店の店主はそう静かに店に入るなり問いかけてきた人物をマジマジと見つめる。

旅人装束は良く見るが目深にフードをかぶり表情を隠している目の前の人物は明らかに怪しかった。

ただ、問いかける声音は物静かでありながら何処か逆らえぬ雰囲気醸し出していた。

「…あ、ああ 良質の髪であれば買い取るが」雰囲気気におされながらそう応えれば、目の前の人物はマントの影から一束の髪の毛を出しカウンターに無造作に置いた。

その無造作に置かれた髪に店主は目を見開いた、その髪は今までに見たことの無い色の髪をしていたからだ。この世界で、黒に近い髪を持つモノはそうそう存在しない。

これまで見てきた髪も鮮やかなモノではあったがやはり、何処かで見たことのある髪色で。

だが、目の前に置かれたこの髪は今までに見たことの無い色をしていた。
より黒に近いが実際日にすかしてみれば濃い茶に変わる不思議な色合い。

しかも、枝毛も痛みも少ない……髪としては上級なモノに当たるだろう、長さ的には肩から腰にかけて位の長さだ。

「この髪は買い取って頂けるか？」

マジマジとカウンターに置かれた髪の検分を行っていれば、目の前の人物から声かけられる。

「ええ、これほど上質であれば……2セレで如何でしょうか」

「……ああ、それでいい 結構な値がつくのだな」

静かに人物が言葉を漏らす。

その間にも慎重に金庫を開けながら言葉を紡ぐ。

「この世界では、黒に近い髪色の人間はそうそうおりませんからなあ
しかも、状態の良いものですから……」

「それ相応の対価をお支払いすべきでしょう」そう言葉を続け鈍く輝く硬貨を二枚、差し出された褐色の手の上にのせる。目の前の人物は「そうか」と呟き、一人何かを納得したのか頷いた後、「邪魔をしてすまなかった」そう言ってドアの向こうへと消えた。

姿が消えたことでふうつと息を吐く、たかだか歳のころ14、5の人物に何を此处まで緊張していたのかと首を捻る。
そう言えば、何処でこの髪を手に入れたのか聞き損ねたな…と先程

まで話していた人物を思い出そうとして固まる。
彼がどんな服装で、どんな肌の色をしていたのか思い出せないのだ、
服装に訝しんだ記憶もあれば肌の色に感心した記憶もある。だが、
まるで其処だけ喰らわれたかの様に思い出せない。
あれは、白昼夢だったのだろうかと思うが手の中に残る髪だけがそ
れは夢ではないと知らしめていた。

「いやー…以外に良い値がついたねえ」

「もっと、安いかと思ったんだが2セレにもなればめっけもんかな」
そう楽しげに言葉を紡ぐ。

人目が無いことを確認し、目深く被っていたフードを掃う。
零れるのは翡翠色の髪、日に照らされ輝くのは薔薇色と呼ばれる色
を持つ瞳…そして、その周囲を彩るのは褐色の滑らかな肌。

「リョーコ、折角の髪を売ってしまつてよかったのか？」

「こーら、外ではツールと呼ぶようにいっただろ？」

私の言葉に心配そうに言うファルにカラカラと笑いながら注意を促
す。

「む、すまぬ……以後気をつける」

「うむ、気をつけてくれたまえ　まあ、髪はいいの……母さんの
為に伸ばしてただけだし」

「手入れも面倒だったからね」と続ける。今の今まで其処にあった髪重さが無いことに寂しさも感じるが今はこの身軽さが嬉しかった。

「しかし、簡単に髪と目と肌を変えられるとは流石」

短くなった……そして、翡翠色になった髪を一房、手に取りそう呟けばファルが「相手がツールだからこそ出来るのだ」とそう言う。彼曰く、世界が力を行使できる対象は世界自身に対してではなく他者に限られるらしい。

世界に属する個体等には有効らしいのだけれども……どうやら世界自身と世界の一部は異なるらしい。

そして、こういった髪や瞳、肌を変える魔術や魔法では効きを持続出来ずあまり有効でない……のだが、この身体はファルが与えてくれたモノであり、そしてバシリースの能力でオート持続が可能だからこそ……こうもうまく体現できているらしい。

まあ、私自身の意志が突発的に絶たれた場合などは維持する為の力の供給が絶たれ、元の色に戻ってしまうらしいが。ようはそんな危ない状況にならなければ良い話しなワケで。

「ぶちやけ、危ないことをしなければいいわけだ」

「そついうことだな」

うむうむと頷くファルの頭を撫で、改めてフードを被りなおす。

「さて、そうそうにこの街から出る為の依頼ゲットしないかね」

「すぐさま、見つかるのか？」

「そこらあたりは、抜かり無し」

ニンマリと口元に笑みを受け、 アイオン のピンブローチをマン
トの胸元に取り付ける。

ブローチにつけられた石の色は【紫】、街の外へと渡る仕事を請け
られるようになるのは【橙】から、国外であれば【緋】ランクから
となる為今のランクであれば難なく依頼を受けることが出来るのだ。
熊さん達のおかげだわ！。

「受け付けのおねーさんに我侭言っ
て抑えてもらってるのがあるん
だー」

そんなコトを良いながら街の アイオン へとスキップしながら向
かうのだった。

09 逃避行のはじまり、はじまり「中」(後書き)

髪は高く買い取っていただけました。
そして、外見大変身。

翡翠色に薔薇色…とても目に痛い色ということは突っ込まないでや
って下さい(笑)

09 逃避行のはじまり、はじまり「後」

アイオン　に寄る前に武器を物色しに武器屋へと足を踏み入れる。

何分、熊達との戦闘（？）で実感したのが己が刃物の扱いに慣れていないということだ。

まあ、そこらあたりはしょうがない…元居た世界が平和な世界で自身で武力を身につける必要性がなかったのもあるのだから。

此方の世界でも大半がそうなのであるうけれども、女性が武を身に付けるということが少ない。

だが、この先旅路にでるのであればそうも言っていられない……動物達は基本的に害意を向けてくることはないが、瘴気に当てられたモノやヒトはそうは行かない。

道中何があるのかわからないのがこの世界、しかも術ばかりを扱えば何れ　バシレース　について何か気付かれる危険性も含まれている。

なら、己の使い慣れている武器も手にして置くべきだろうと。

ダガーの扱いは追々慣れていくとして、実際一番危険な時に咄嗟に扱えるものも持っておくべきだと考え店内をうろちよろしていると店主に声をかけられた。

「坊が扱える武器は此処には無いぜ」

無骨といえば聞こえは良いが、昔気質的な店主の言葉。

………どうやら、私は男の子に間違われている模様です。一応、女で19歳なんです。

「…弓を探しているのだが」

店主の言葉は聞こえないフリをして、胸元を彩るピンブローチに嵌められた石の色が彼に見えるように身体を声の方へと身体を向ける。石の色を認識したのか店主が「ほう」と感嘆の言葉を漏らす。

アイオン の認証はその依頼を確実にこなしたと言う確証が確認されて改めて与えられる。

詐称はできなくもないが詐称を行うのであれば普通にランクアップを目指した方が楽だと言われるぐらいに詐称術は複雑だそうだ。

この外見ではそんな詐称術を使うようには見えないだろうし、詐称術が使えればランク換算では【灰】に分類される。【紫】ではランクが低すぎる。

「そのナリで【紫^{フル}】か」

「…成り行きで ですが、ね」

続けて紡がれた店主の言葉に苦笑で返せば、「成り行きで上げられるほど易しくはねえだろ…ホレ、弓は其処だ」正論を言いながら弓が纏めておかれている一角を指し、彼は言う。

「ありがとうございます」

頭を一度改めて下げて、弓が集められている一角を物色し始める。

ただ、依頼取り押さえには期限が設けられている為手早く見繕わなければいけない。

さて、どれにしようか。

フム、と考えながらゴソゴソと弓を手を取っては爪弾いてまた戻すを繰り返すコト約数十回。

一番直感的に引かれた弓を手取る。その弓は奥の奥で眠っていた。形状は和弓に良く似たしかし金属で作り上げられた弓、私の身長以上ある黒銀の金属本体に美しい紋様が刻まれた弓。全長は2mはあるだろうか……弦の部分が簡単に取り外し可能になっており、中近距離用の武器にもできる要素がある。まあ、趣味の域を出ないモノだった。元居た世界では中学1年から大学3年の現在に至るまで続けてきた数少ない趣味の持てるモノだ。

動く動的…は射た事はないが、流鏑馬と遠的ならば幾度もさせてもらっているから何とかなると思いたい。それに弓を学ぶ上で、その形状の理由なども習い一応一通り薙刀の扱いも学んでいたので間合いの取り方に困らないしな。

それに……この弓に惹かれるのだ。私のこういう直感は外れない。その直感にしたがって店主に購入を申し出る。

「店主殿、コレを購入したい」

「………ソレはやめておきな」

黒弓を彼の目の前に差し出しながら値段の確認を取れば、弓に目を留めた店主は眉間に皺を寄せた。

購入をとめるような言葉に疑問を持ち、首を傾けながら問い返す。

「何故？」

「ソレは【厄】付きだ………そいつを手取るヤツがいたとはな」

色々を含みのある言い方をされた気がする。そんなに曰在りの弓なのだろうか。

しかも、何かその言い方だと見つけたのさえ凄いな意味合いに聞こえますよ？

「その言い方だと、手に取れなかった方々がいるようですね」

「まあ、な……………手に取ったとしても直ぐさま此処に戻る。」

戻ってくるというのは、呪いとかの類で戻ってくるのか……………それとも、射手が扱いこなせていないのか。
後者っぽいんだけどな。

「……………射手を傷つけて？」

「ああ……………噂位は聞いた事が在るだろう？ 【射手殺しの魔黒弓^{まこくきゆう}】
の それでも買うかい？」

感でつい尋ねてみたらドンピシャでした、うん……………ものごっつー感が冴えてる。

いや、私その噂知らんよ？……………召喚されて一週間も経ってないしねえ。噂を拾える程外に出てないって言うのもあるけど。

精霊さん達に頼んでたのは、世界の状況に対してだったからきつと省かれたんだろう。

わー…この弓^こそんな二つ名付いてたんだー…豪華ねえ。

まあ、大概のモノが私を傷つけられるとも思わないし、私は私の感を信じる……………きつと、多分。

それに一番扱いやすい形状してるんだモノ……………アーチェリー形状は苦手なんです。

「はい……………私はこの弓^こがいい お幾らで」

「……………1セレだ、アイオン の割引もあるからなその値段でいい、矢も付けて置いてやる」

「ありがとうございます」

そう深々と頭を下げ彼の手に1セレ硬貨を渡す。その時に「坊、命は大事にしるよ」と言われてしまった。

其処まで 危険 な弓^こには見えないのだけれどもなあ。

そう思いながら弓を肩にのせ、矢筒を背負う。

うん、他に邪魔な荷物が無くてよかった………手元が塞がってるのは苦手なんだよねえ、実際は矢筒も如何にかしたいのだけれども。

フードに突っ込むとしても、此処は人目につき過ぎるな。

因みに、フードに入れたモノはマントの影から取り出すことが可能になるという便利使用を昨日追加しました。そのお陰で取り出すのが随分と楽になったので、お買い物も困らない筈だったんだけどな。そんなクダナイ事を思いつつ購入後、早々にその店を後にし人気の無い場所へと向かう。

「なんだ、アイオンへは行かぬのか」

「いや、行くよ？………その前に、ちゃんと話さないとな 思っ
て」

良くわからぬという風に首を傾げるファルの頭を指で撫で、街と森の境に出る。

境に入った瞬間に、空間閉鎖的結界を展開し実際の街から自分達を切り取る。

何故、結界を展開したのかファルも悟ったようでも何とも言つことなく私の次の行動を待っている。

魔力感知等で私の存在がばれるのも面倒だし、まだ抜け出したばかりで城のお膝元の街なのだからある程度の予防策は取っておかないとね。

「さて、姿を見せてはくれないかな……麗しの黒銀の弓姫」

そう手に持つ黒銀の弓に問いかければ、その弓が一度大きく胎動した気配がして私の目の前には目も眩むほどの真白の肌に黒銀の艶やかな髪、美しい薄金の瞳を持つ少女が宙に浮いて其処に居た。

「王に喚ばれるなれば、幾らでも」

鈴を転がしたような声音で、笑みを称えながら少女は言う。ただ、浮かべる笑みは歳若い少女達の浮かべる無邪気なモノとは異なり艶を含んだモノ……弓で在るからして見た目通りの年齢とはいかない様である。

まあ…此処まで、姿を顕現できる武器が数年モノとはないだろうしねえ。

「【厄】付きには全く持つて見えないのですけれども」

姿を見て核心した、【厄】と聞いて一瞬忌石に関係しているのかとも思ったが彼女の顕現した姿からは瘴気のしの字も感じられない。その感想でボツリと一言漏らせば、少女は冷めた目で紡ぐ。

「わたくし私は王の為だけに造られた武具ですもの、王以外の者に扱われるのは

「ご遠慮致しますわ」

その言葉に続けて彼女は「それに、扱われるのを拒否して射手を傷つけただけで 殺してなんかいませんわよ……確かに遣り過ぎた感もあります」と言う。少女の外見でむすくれる姿は可愛らしいが、言っている内容は空恐ろしい。

しかし、始めに紡がれた言葉の意味がどうしても気になった。

「…王の為だけに造られた？……王はバシレースのコトでいいかな」
「はい、わたくし私を造りしは2代目バシレース・ニュースですわ その方が
あなたさま4代目 の為だけに造られたのが私ですの」

私の問いかけににこやかに返してくれる美少女はとても可愛い、ってそういうことじゃなくて。

今、4代目とか聞こえたのですけれども？ピンポイントで私って言われませんでしたか、ね。

「……………はい？」

惚けたような私の言葉を無視してファルが納得したように「そう言えばアヤツは未来視が得意だったな、鍛冶を生業としておった脳筋だったのにな」そう呟く。

…2代目は脳筋ダツタンデスカ、ファルさん。

「ファルディカーレ…ファネス様への侮辱は私^{わたくし}への侮辱と取りますわよ」

剣呑な雰囲気醸し出しながら美少女は紡ぐ、ファルもファルではっ、事実だろうに」などと言って煽る。

どうやら、2代目のお名前はファネスサマと言らしい。

なにやらバチバチつと火花が飛び散りそうな二人のやり取りに置いてけぼりな私です。

アンタ方仲いいねえー…。

そんなコトを思いながら、どうやってこの二人の言い争いに收拾つけようかと思ひ悩むのだった。

09 逃避行のはじまり、はじまり「後」(後書き)

まだ、城下街から抜け出せておりません。
次こそは、街の外へ…出れたらいいなあ。

そして、新しいコが登場しました。

美少女はイイですよ、ね。

10 何時の間にやら旅立ち「前」

壮絶な舌合戦の結末は私の言葉により中断された。

「で、その2代目の造った武具がなんでこの国に？」

素で素朴な疑問に首を傾げながらそう言葉を紡げば、黒銀の髪の少女はコホンと一度咳払いをし私の質問に答えてくれる。

何でこの子ファルには態度が悪いんだろっ……ああ、ファルが余計なコトを言ったからか。

先程の会話の流れを思い出して、納得する。

「2代目がご逝去^{せいきょ}後、私^{わたくし}を含む幾つかが市場に流出したんですわ」
「……よく今まで残っていたな」

ファルが感心したように言えば、少女は苦笑を浮かべながら言う。

「私^{わたくし}は見る方が見なければただの弓ですの　そう見える様、施されております

　正当な主の手に在って初めて本来の姿に見えるのだそうですわ」
「………なんてーか、2代目は凄いヒトだったんだあねえ」

シミジミと呟いた後、「さっきも言っていたけど、鍛冶屋さんで未来視とかも使えたんでしょ？」と言葉を続ければファルが「無意識に力を行使する其方も凄いと思うのだが」とか言ってるが、聞かなかったフリで。

だって、能力の行使なんて無意識でやってたら意味無いじゃん。

「ええ、ファネル様は特に未来を視られる事に特化しておいでで数代先の方が

どんな方かも視えてらしたんです……………それが、貴女様ですの」
「…………ええっと、こっちの未来では私が来る事は確定だった…ってこと？」

いや、でもミューケーさん達は私が死ぬ事は本来なら無かった様な事を言っ……………」

彼女の言葉に私の思考はグルグルと渦を描く。

2代目の能力の未来視で私がわかつていたとするのであれば、私はミューケーさんに謀られた事になるんだろうかと頭を悩ませていればファルが口を開く。

「未来視とは砂漠の砂の一粒を取上げる様なモノ、可能性でしかない……………ただ、

ファネルは神よりも正確にその可能性を取上げる事が出来ただけの話だ」

神様よりその能力が高いつて凄くない？……………それで、大変そうだな 色んな事が。

「我や、3代目が先を視ても其方は見えなかったのだ……………ファネルも己の力の精確さは

認識していたのだろう 事の重大さに、我にさえ言わずにこやつを用意したのだろうな」

そう言っってファルは彼女を見る。私も視線を彼女に向ける…私の為だけに先々代が造ってくれていた武器。そんな有り難い武器が居てくれたとは。

「私^{わたくし}精一杯、貴女様におつかえしますのでお傍に置いて下さいませ」

涙を目じりに溜め、うるうるとした目（ぶっちゃけ上目遣い）の美少女に見上げられれば…陥落しないヒトなんているんですかーっと問いかけたい。

ああ、もう可愛過ぎるよ…撫で繰り回したい。

自分の思考に苦笑を漏らしながら彼女に言葉を紡ぐ。

「貴方が必要だから私は貴方を手にした、私に力を貸して頂けるかな？」

「貴女様が望まれるのであれば……私^{わたくし}は全てを射ぬくモノとなり、打ち払うモノとなりましょう」

そう私が言葉を言い、手を彼女へと差し出す。その手に彼女は嬉しそうにはにかみながら答え手を乗せる。
言ってる内容凄いいけど。

「宜しくお願い致しますわ、我が主」

「宜しく…」

そう言って名を呼ぼうとして、はたと彼女の名を知らない事に気づく。

「名を伝えてもいなかったし、名を聞いてもいなかったね……ごめん

私は水江亨子、亨子が名で水江は家の名 この姿の時はツールで宜しく」

「御意に、ツール様……折角名前を聞いて頂いたのに申し訳ないのですけれども、

^{わたくし}私に名は無いのでございます」

申し訳なさそうに少女の口から語られるのは武具としては必然的な事。続けて「貴女様の為の武具なので、ファネル様からは頂戴しておりませんの…名を戴けるのであれば、貴女様に名づけて戴きたいのですが」そう懇願する仕草で言われれば断れないのがヘタレ。

あー…可愛いすぎるんだよう。

可愛い子に懇願されて、しかも内容は内容で一向に害の無いモノ………叶える事は造作も無いモノだったりする日には、負けるでしょう。

この可愛らしさは自分には真似出来ないなあ、などと思いつつ言葉を紡ぐ。

「別に名を付けるのに異議は無いんだけど、も………どっちかって言うとなりでいいの？」

とか、確認取りたいですヨ」

「王が付けて下さるのが嬉しいんですよ」

キラキラとした目で見つめられれば、考えざるを得ず。

………ネーミングセンス皆無なんです、宜しいのでしょうかねえ。

10 何時の間にやら旅立ち「前」(後書き)

ちらりほらりと先代の話を交えつつお話は進みます。

10 何時の間にやら旅立ち「後」

暫しの熟考後。

「んじゃ、黒玲こくれいさんで如何でしょう？」

あつさり捻り出した私にファルが「コクレイサン？…山の名か？」
とと言う。

目の前の少女もそう捉えたようで「山の名前で御座いますか？…ト
ール様が付けてくださった名前ですもの………う、嬉しく思います
わ」とか言っている。

お嬢さんどもってらっしゃいますヨ？……激しく勘違いされている
気がする。

「あ、いや、山の名前ではなく「黒玲こくれい」な？ ごめん、紛らわしくて
サンは敬称でサンを付けただけだから、気にしないでくれると嬉
しいな……」

慌てて訂正の言葉を入れれば、勢いよく二人から言葉が返ってきた。
お二人とも仲良くて元気ダヨネ。

「私わたくしに敬称なんて必要ありませんのよ」

「そうだぞ………それに俺には付けなかつた癖に」

「………はい、了承しましたー！ファルさんの場合はねえ、衝撃
的過ぎたノデスヨ」

ファルさんの発言に小声でボツリと呟きつつ名前で呼ぶように心が

けようと思考する。

「では、私の名はコクレイになるのですね」

噛み締める様に音を呟き少女……否、黒玲は嬉しそうに笑みを浮かべる。

ああ、笑顔っていいなあ。

そんな事を思いながら、その笑みにつられて口元に笑みを浮かべながら言葉を紡ぐ。

「ん、玉の様に美しい黒とか言う意味になります」

「ごめんなー、ベタで」などと言いながら黒玲の頭を撫でる。

因みに「玲」という漢字に「玉の様に美しい」という意味があるのだけれども、何でそんな事を知っているのかと言いますと。自分の名前の漢字の候補だったんですって……今更ながらにその漢字じゃなくて良かったとか思ったのは内緒デス。

だって、その意味はホンに可愛い子に適用されるべきモノですもの。

一頻り満足のいくまで撫で切った後、結界の展開を解除する。

「さて、残り時間も少ないですし アイオン に行きますか」

そう二人に声をかければ了承の言葉が口々に返ってきた。

……………賑やかでいいねえ。

黒玲もファルと同じくSD化してもらいファルとは反対側の肩に乗って貰っている。

矢筒と黒玲本体は四次元フードの中へと仕舞わさせて頂きました。

どうやら、本体自体とそれほど離れていなければ顕現は可能との事。

……………しかも、黒玲さん素敵仕様過ぎでした。

実は私にしか認識されていなかった様なのですが、節事に取り外し……というか、ギミックが付いており、弦を外せば 握り（弓を持つ部分の総称）の長さに全てが収まってしまう。

物質容量的に無理な話なんだろうけれども、バシレーズが造ったモノなのだから何でもありかと納得しておく。

しかも一振りすれば元の2m越えに戻るという便利さ、私の必要に応じて一振りの間に弦が張られていたりする素敵仕様。

………大好きだっ！！

そんなこんなで アイオンの受け付けにやつとの事たどり着けば、受付のおねーさんに「来ないのかと思いましたよ？次回からは気をつけて下さいね」と言われてしまった。

………ごめんなさい。

そして、受け取った依頼書を確認し即座に集合地である場所に足を向ける。

受け取った依頼書の内容は簡略すると「カ斯塔フへの護送」というもの。

「急がないと……か、な」

そんなことを言いつつせつせと足を動かす。

カ斯塔フとはこの国と隣国のアシャステーア連邦共和国との中継地セレファン点になる町である。

アシャステーア連邦共和国とは100以上の民族を抱えて国となっている国の様で様々な種族が入り混じっているらしい。

所謂、アメリカの人種の坩堝的なのかな。

歴史自体は部族それぞれに古いが国として成り立っているのは四百年程らしく国としては若い部類に入るだろう。

国土自体はこの世界の6分の2を占める大きな国で商業や戦力的にも強大なモノだそう。

その国を纏める王は歳若いながらも賢王と呼ばれ国内の支持率も高いらしい。

………日本の政府にもそれだけ支持率あればいいのにね。と、まあ向こうの世界の話は置いて置き。

隣国にいく為には今から向かうカスタフを通過せねばいけない。

他にも、ルートはあるようではあるが…一番手っ取り早く近いのがそのルートなので今回の仕事は逃せないのです。

集合地に到着し、依頼受領書を提示する。

既に、他の方々は揃っており出発出来る状態の様だった。

………重ねがさね、すみません。

「トールと言います どうぞ、宜しくお願い致します」

謝罪も兼ねて深々と頭を下げ、数拍置いた後頭をあげる。

目の前には、渋くてガタイのいいオジサマに薄青地のローブを身に着けた美人さん（男性）とやたらドギツイ眼差しを向けてくるオニサン（多分美形分類）そして…ナイスバディのオネーサマっ！！

主様…とても最後の方で喜ばれましたわね

………黒玲サン、今喋られマシタ？

ふと、脳内に響いた言葉に多少固まりつつ問いかける。
その問いかけに黒玲はすんなりと応えてくれた。

いいえ、今は思念での会話ですわ

………勝手に読まれてる？

まさか、私と主様は名という契約で繋がっていますの　だから、
雰囲気などで

感情を微かに読める程度ですわ　先程は、視線の先が彼女に移った瞬間の空気を感じただけ…

王の思考を強制的に覗き見れるのはファルディカーレぐらいですわ

………じゃ、今の状態は？

主様が私の思念にわたくし応えてくださったからですよ　主様が応えなければ

主様の声は私共にはわたくし聞こえせんもの

成る程と思考で感心しながら、目の前の彼等の自己紹介を聞き終わる。

渋いオジサマはリクローさん、美人さんはファルマさん、何でか視線の痛い彼はシグルドさん、ナイスバディーのオネーサマはシェラザードさんだそうです。

目の保養万歳！！

そうして、私達をのせた馬車はセレファンの王都を出発したのだった。

10 何時の間にやら旅立ち「後」(後書き)

さて、舞台は召喚された国から国境へと。
トリーコさんの旅は始まったばかりです。

11 道中語り「前」

ガタゴトと揺れる荷馬車の中で、のんびりとお茶を啜っていれば突き刺さるのは鋭い視線。

視線の主は言わずもがな、彼…シングルダサン。

何が気に食わないのだから、気に障るのだから、それともイラツキの素なのか……始終キツイ視線を此方へと寄越して下さっています。

あー…こういう視線、久方ぶりかも。

こつちに来てからはこんな視線を向けられる事、無かったからなあ

……私、何かやらかしたっけか？

遅刻に近い出現に怒ってらっしゃる、とか…かねえ？

つか、それしか思い当たる節が無いのですけれども……確かに仕事に遅れるとかは怠慢になります、一応ギリギリ間に合った筈なんだけどな。

まあ、下手に藪をつついて蛇や邪など出したく無いのでスルーしておくか。

そんな事を思考しながら手に持つカップのお茶を啜るが、不意にその視線の主から声をかけられる。

否、あれはそんな生易しいモノでは無く…投げ付けられたと言う方が正しいかもしれない。

………キャッチするのが面倒臭いんだけどな。

「ツールと言ったか？お前………そんなナリで使えるのかよ」

刺を巻かれた言葉にファルマさんが彼を止めようとしてくれるが、
こういう手合いにそんな抑止は意味を為さない。

気に入らないモノは気に入らない、認められないモノは認める気も
ない。そんな感じの人間に何言ったって、馬の耳に念仏、糠に釘…
暖簾に腕押しだと思うのデス、ハイ。

ソコまで私を嫌う人間に好かれようとも思わないので、必死に取り
繕うことはしない……面倒だし。

「ガキの遊びじゃねえんだよ」そう続けられた言葉と彼の視線には
嘲りと見下しが含まれていたが、そんなものは私にとってはどうで
もいい事であって、重要な事じゃない。

ただ、彼の胸に輝く【紫】の証を見て何となく彼の心境を想像して
みる、それなら…致し方ないと思ってしまうのだ。

そして、口元に笑みを浮かべ必要最低限を紡ぐ。

「足を引つ張る様な事は致しませんよ」

特に怒るでも無く、萎縮するでも無く返した言葉にシェラザードさ
んが感心したように「へえ」と言葉を漏らす但其処は聞かなかつた
フリ。

それだけを紡いで再度お茶を啜り始める私に周囲の空気が数度下が
ったような気もするが、まあいいか。

初対面からして不躰な態度をされても好意のある対応を返せる程、
人間出来ていないもので。

私^{わたくし}どちらかというと好意には好意で、無関心には無関心で、敵意に
はスルーで返す人間です。全うな対応が必要だといふのであれば己
の対応を省みて下さい、と言うしかない。

どれだけ上から目線だという話だけでも、特に害意のある見方を
されない限りは人畜無害で通っているんですよ、これでも。

リョーコは大変だな

不意に脳内に響く私を氣遣った声、言わずもがなファルなのだが。

…如何せん、唐突はやめれ

む、すまぬ…しかしアレは何故あなのだ？

不可思議そうに首を傾げながらファルが示すのは先程のシングルドさん。

ファルや黒玲の姿は他の方々には見えていないのでそのまま思念で応える。

んー…子供にしか見えない私が自分と同じランクってのが嫌なんじゃない？

狭量だな…それにリヨーコは子供では無いだろうに

身も蓋もないなー…まあ、わからなくもないよ？ 彼の思考は、想像だけと

それに私の見た目が幼く見えるのは人種的なものだから仕方無いさ
そうなのか？

ポツと出の人間に舐められるのは誰しも余り嬉しくないだろうしね
彼はソレが顕著なだけでしょ、多分

…基本向こうでも国が違えば幼く見られがちだからね、諦めた

まあ、リヨーコが気にせぬのならいいが

多少、心配そうな雰囲気を残しながらファルがそう言い、その彼の視線がチラリと別の方を見つめる。何を見つめているのか解らず内心で首を傾げつつも「ファルさんが心配してくれただけで嬉しいデスヨ？」と思えば多少青ざめた顔で思念を返された。

それは黒玲にも伝えておいた方がいいと思うぞ

そう言って ほれ というファルの言葉に逆側を気にすれば、とても恐ろしく黒い何かを出しているSD黒玲しゃんがいらっしまった。

主様にあの態度：リョーコ様にあの態度：ふふ、どうしてくれましょう

ぶつぶつと小さい思念で呟かれる内容に内心冷や汗を掻きながら思念を送る。

……こ、黒玲さん？心配してくれてありがとね だから、落착いてクダサイマセー……

私は氣にして無いから……つか、一般人に呪詛はやめて下さい、お願いします

はっ、ももも申し訳ありませんわ 主様が宜しければ私はいいんですのよ わたくし

街に着くまでは抑えてくださると助かりますです、ハイ

解りましたわ

そんなやり取りを茶を啜りながら交わしていると不意に何か引っ掛かった。

この荷馬車に乗り込む際、荷馬車周囲半径1キロぐらいに不審なモノが存在すれば感知出来るように術式を組んでおいたのですよ。

簡易的なモノだから1キロぐらいという微妙な代物だが他者には見破られ難く感知しづらい様なので重宝している。

城の中は有り難かったわ！。

まあ、馬車の走行時に襲われたら堪ったものじゃないからね。

ある程度張れる予防策は張っておく主義なのです。

御者台の方に馬車を停止させるよう言葉を紡ぎ、馬車を止めさせる。

訝しがる他の方の表情や表情が険しくなるシグルドさんを無視して馬車を降りようとする。

「おい、お前どう言うつもり…」

「どういづつも何も………出れば、解りますよ」

シグルドさんの言葉に重なるように言葉を紡ぎ、馬車を降りる。

彼も他の方も周囲の気配を感知したのか、続けざまに素早く荷馬車を降りてくる。

「ちょっと遅かったみたいですね、すいません」

「………いや、お前が気付かなければ俺達是对応すら出来なかっただろう」

武器を構えたシグルドさん達に謝罪を述べればそう返された。

馬車を囲むは卑下た笑みがお似合いのオジサマ方、その中にチラホラと術の気配が見え隠れする。

が、ソレを私が赦すワケでは無くて……危険要素は即座に潰しておくに限る。

私が感知できる範囲で術式を使用させてたまるか。

「さて、此処からは我等の舞台だ」

リクロウさんが静かにそう告げた。

渋い声で告げられたソレが合図だった様で、山賊であろうオジサマ方の中にリクロウさんとシグルドさんは躊躇せず突っ込んでいく。

何時の間にやら私は私でファルマさんやシェラザードさんの背中の方へと押しやられています。

………戦力外通告？ いや、そっちのが楽は楽だけどさあ。

それもなんか申し訳ないので、こそこそつと御者台の方へと回る。
此方は守りが手薄なので御者さんが危ないと思つのです。

因みに大事なモノは荷馬車の中なのでまあ……彼等側からはそうそう
な事では奪われないかなあと思つてます。

11 道中語り「前」(後書き)

ヒトって合う合わないありますよね。

11 道中語り「後」(前書き)

曖昧に暈しています。が色々シユールな表現が出ています。
苦手な方はサラッと読み流して頂けたら幸い。

11 道中語り「後」

足音を立てずに馬車の御者台まで回れば、案の定。

山賊のオジサマに襲われそうになってるオニーサン。

「黒玲っ！！」

御意に

小声で黒玲に声をかけ 四次元フードの出口 基、マントの中から取り出すとシツカと握りしめ一振り軽く彼女を振る。
そして、山賊に向かって距離を詰める。

「ガキに何が出来る」

山賊のオジサマが鼻で笑いながら勝ち誇った様に言ったその言葉を無視して、御者さんとの間に割り込み黒玲を持つ手を横に薙ぎ払う。

ゴリツと金属が生身に食い込む鈍い音が聞こえ、黒玲を握る手には嫌な感触が伝わる。

手に伝わる感触に黒玲を持つ手が緩み取り落としそうになるのを堪える。

ヒトを傷つけるという恐怖に萎縮する身体に言い聞かせて、渾身の力で黒玲を振り抜く。

「でえええいつ」

振り抜いた瞬間の状況は意外に呆気なかった。鈍い音がしたと思えば、その山賊は目の前から姿を消していたのだから。視界に移ったのは遙か向こう、林の方へと吹き飛ばされる山賊のオジサマの姿…。

あー…れえ……………いつの間にワタクシこんな馬鹿力になったのかしら。

遠くに飛んでいくオジサマの姿に切なくなったのは、しょうがないと思うのです。

他の精霊達も手助けをしたからな

不意に脳内に冷静なファルの声が響く。

……………解説ありがとう　だが、この前も言っただけだよな？

ヒトの思考を読むな、と　んで、精霊さん達の手助けがなんで馬鹿力に繋がるのデシヨウカ？

米神に指を当てながらナイスなタイミングで解説をしてくれた彼をねめつける様思考を紡ぐ。

その思考にファルはしよげながら　すまぬ　とだけ返してきた。

まあ、私の為を思っ言ってくれたのは解るので、しよげたファルに苦笑を浮かべながら感謝の意で頭を撫でる。

読まれること前提の思考はどうやら黒玲にも聞こえていたようで彼女がしよげたファルの後の説明を続けてくれる。

基本的にはツール様の腕力は変わっておりませんのよ？　私を持つ事で振り抜き等の威力が

かなり上がっているのですわ　それに加えて風精霊達^{フリール}がかなり頑張っておりますからね

ああ、そういうこと　吹き飛ばし効果にありえない程の追い風って事か

なので、日常生活でお困りになる事は無いですよ
うん、そだね……………あんな馬鹿力になってたら力加減難しいだろうなあ

其方ら、のんびりしてる場合ではないだろうに

黒玲の解説にのほほんと心中で応えていたら、復活したファルさんが呆れた様に声をかけてくる。

そっぴや、そっぴや

一応、此処は戦闘の真っ只中。

対峙しているお人一人を吹き飛ばしただけでは事は治まらない場所である。

まあ、御者のオニ―サン助ける為に動いたので戦闘が激しかったわけではないのですけれども。

「大丈夫ですか？」

「あ、はいっ！！　ありがとうございます」

今の状況を呆然と見ていたオニ―サンは、私がかけた声に深々と頭を下げる。

いやいや、遅れて申し訳ありませんーなどと心中で返し、荷馬車の中へと避難を促す。

荷馬車の中に完全にオニ―サンが消えるのを確認した後、振り返り言葉を投げかける。

「さて、其処の方々　何用かね？」

虚勢を張って、恐怖を見ないフリをして僅かに震える身体を叱咤し、余裕をかまして彼等を見据える。

彼等から見えているのは見据える瞳では無く、クツと弧を描く口角……作った口元の笑みで彼らはどう、己の存在を捕らえるだろう？

↓ ただのガキの虚勢

↓ 余裕の笑み

↓ 恐怖に引き攣っている

多分、最初か最後の自信はあるが……まあ、挑発ぐらいにはなってくれるといいな。

「ガキ一人でこの人数の相手か？」

「一応、アンタ達一人ずつ吹き飛ばす事は出来るけど？」

先程の情景を見ていたのかそうでなかったのかは知らないが、目の前に対峙するオジサマ方は鼻で笑いながらそんな事を言う。

その言葉に冷静に聞こえる様に声を平坦にして首を傾げながら返す。

口元には笑みも忘れずに。

余裕に見せかけた態度が気に食わなかったのか、すぐさま彼等の纏う空気は気色ばむ。

「そんな口も利けねえようにしてやるよ」

私へと駆け出しながら、その中の誰かがそう言った。

誰とまでは覚えてもないし、覚える気も無かった。

此方に向かって斧を振りかざすその姿を微かに視界に入れてそのまま立ち尽くす。

恐怖に怯えることも無く、迫り来る武器から身を護る為に武器を構える様子も見せずに。

「アンタ達の不幸は此処にいるのが彼女でなかった事だな」

静かに目の前の彼等だけに聞こえる様に呟く、ただその言葉を彼らが聞いていたかどうかは私には知る吉もないが。

そして、目の前の事実から目を逸らす事の無い様にしっかりと見据える。

「アウル・ソート
焰の軌跡」

一人の男の斧が私の首を刎ねようと皮膚に触れそうになったその時、艶を含んだ静かなアルトの声音が響く。

男達の喚く声の中、その麗しい声音は不思議な程にしっかりと言葉として私の耳に届いた。

次の瞬間、目の前の情景は高温の青き炎に巻かれる。タンパク蛋白質の焼ける臭いと生きながらにして炎に巻かれ死に逝く断末魔が鼻と耳を攻撃する。

突然の炎に巻かれた目の前の男から数歩下がって距離を取り、斧の刃から逃れる。アーヴ

火精霊との契約により生じた炎それ故に、私に危害を加える事は無い。燃え上がり飛び散る火の粉すら私に触れる前にその姿を消す。

私はただ静かに見つめていた、目の前の男達がのた打ち回り、こと切れるその時まで。

燃え盛る、元ヒトであった肉塊を前に立ち尽くす私に穏やかな声が掛かる。

「あぶなかつたわねえ」

「シェラザードさん………ありがとうございました」

肉塊から視線を外しお礼を述べる為に、彼女の方へと身体を向け頭

を下げる。

そんな私の様子にシエラザードさんは苦笑を浮かべ「道中一緒の子に死なれても困るからねえ」と言葉を紡ぐ。

「なあ、聞いてもいいかい　あの時、何故動かなかったんだい？」
「あの時………ですか？」

問いかけられた内容の「時」を何処か取りかねて聞き返す。
彼女曰く、斧を振り込まれた時に動く事をしなかったのが疑問だったらしい。

「んー…シエラザードさんがいつらっしゃるのが解っていましたし、呪文詠唱されてるようだったので」

そしてついにて「入り乱れると的って狙い難いかなーとか思いました」とか返しておく。

その返答に一瞬、シエラザードさんがキョトンとした様子になったが次の瞬間には大笑いされてしまった。

私、何か大笑いなネタやりましたっけかー？

11 道中語り「後」(後書き)

目の前で起こる事実から目を背ける事をトーコさんは自分に許さない、かもしれない。

人肉が焼かれて出る臭いはかなりキツイらしいです、ヨ？

12 コトの終わり

道中何度か山賊に襲われつつ、カスタフに無事到着。

まるで誘蛾灯が蛾を惹き付けるかの如く、山賊のオジサマ方に遭遇する事に色々と考えはしたものの他の方々の様子を見る分に何かを急いている様子も訝しんでいる様子も無い。

特に「何か」の秘密を含んでいる様な空気も感じられないので、この山賊に襲われる回数は旅をするモノにとっては当たり前のことなのだろう。

それは、それでウザ過ぎるが。

どちらかというと彼等が訝しんでいるのは獣達との遭遇数だと思う。

本来の道中であればこの山賊に襲われつつという構図にプラス α

獣に襲われるという図式が当たり前であるのだが、今回の道中獣達に襲われるという事は一度たりとも無かったのだ。

その事については話し合っている彼等の話を聞き流すだけにしておいた。

「私の所為で遭遇しません」などと誰が言えよう。

そんな事を言えば、シグルドさんに鼻で笑われて嘲笑された上で流されて終わりだと思われる。

それに、この世界で無くともヒトが動物達を動かす事が出来る事實は「異端」の一言に尽きるだろう。

その事実が知られても然程害の無いモノなのかどうなのか、判断が付かない間は公言する気は無い。

まあ、そもそも害が全く無かるうが誰かに話す事はしないのだけでも。

他者に知られて重宝されるならまだいいが、それが嫌悪されるのであれば……運が悪い状況、最低最悪で2度目の死を迎える事も視野に入れて行動するべきなんだろうなあ。

……ヒトは異なるコトには敏感だしね。

そんな事を思いながら、依頼受領書に無事依頼達成のサインを依頼者であるお貴族様の従者さんに頂き懷に受領書を収める様に見せかけてマントの中へ、ポイ。

「トール」

マントをゴソゴソと整えている私に柔らかな声で呼びが掛かる。後方からの呼びかけに頭を上げ、振り返りながら言葉を紡ぐ。振り向けば、ソコには穏やかな笑みを浮かべた声と同様に柔らかな雰囲気気を醸し出す男性。

「……ファルマさん」

「今回の旅ではお疲れ様」

「いいえ、ファルマさん達こそお疲れ様です…そして、大したお役にも立てず申し訳ありません」

そう述べて頭を下げる。

事実、山賊のオジサマ方の感知に関してはまだいいのだが、あまり戦闘では役に立つ事がなかったのだ。

それで、何か言われても致し方ないと思う。

使用法は間違っている気もするが、この世界でも…というか何処に行っても基本的に働かざるモノ食うべからずである。

例え、それが何も解らず放り込まれた異世界人だったとしてもとも動けないような怪我や病気を患っていない限りは然り、だと思っ
のである。

まあ、私の考えなのだが。

「いや、そんなことないよ?」

頭を下げている私にファルマさんは「頭を上げて?」と続けながら
言う。

その言葉に言われるまま、素直に頭を上げれば目の前の彼はフード
の上から私の頭を柔らかく2、3度撫でる。

「君のおかげで俺達は被害を出す事無く、ここまで来れたんだから」

「感謝こそすれ、君を役に立っていないとは誰も言わないよ」そう
続けて言われた言葉に恐縮してしまう。

もともと其処まで大きくない身体をちぢこませながら「いえ、そん
な事は全く持って…」そう言う呟きは語尾に向かえば向かう程小さ
くなっていく。

何分褒め(?)られる事には慣れておりませんので。
どう反応すべきか悩みマス。

「後…」

そう言っ
てファルマさんは身を屈めコソツと私に耳打ちする。
何となくその様子は悪戯をする様な愉しげな様子が見え隠れしてい
た。

「シグ、大人しかったでしょ?」

紡がれた言葉の意味を取りかねて首を傾げながらも、頷く。

そうなのだ、最初の襲撃を終えた後からシグルドサンは無言を貫いていたのである。

てつきり、襲撃前の様なのが続くと思っていたのだが……特に何かを言われるでも無く、きつい視線を向けられるでも無く。

役に立たなさ過ぎて呆れられたかねえ…と、自分の使えなさにしよ
げていた所なのである。

「あれで君の事、認めてるんだよ」

続けられた言葉にあんぐりと口を開けて反応を返しかねていと、くすくすと愉しげに笑いながらファルマさんは「まあ、最初に不躰な事しちやってるからバツが悪くなってるだけだから」そう言う。

「はあ」

突如として判明した事実には思考は回らずに気の抜けた言葉しか返せない私に、彼はその綺麗なお顔に笑みを浮かべて「ねえ、俺達のトコに来ない？」そう囁いた。

「ドイウコトデスカ、ネ？」

紡がれた内容の突飛さに、そして目の前の彼の麗しさに、思考回路は半分以上機能していない状態で言葉を紡ぐ。

私が返した言葉に彼は首を少しだけ傾げて「チームへのスカウト、かな？」と茶目っ気たっぷりに楽しげに応えてくれる。

……………真面目な人かと思えば、そんなこたあなかった。

とてつもなく喰えない人だ、この人。

心中でそんな事を思いながら口元に笑みを作り、断りの言葉を紡ぐ。

「申し訳ないのですけれども、一人旅の方が何分気楽ですので」

「そっか、残念だな……色々聞きたかったんだけどな」

そんな私の言葉に、至極残念そうに呟いた後爽やかな笑顔を浮かべて彼はそう言った。

何処で、そんな爽やかな笑顔する必要性があるんですか。

というか、爽やかさの中に微妙な黒さも混じってません……力？

背を冷たい汗が伝う感覚に襲われながら、それでも心中を悟られる事の無い様に口の端を上げて言葉を紡ぐ。

「こちらこそ、折角お誘い頂いたのにお応え出来ずすみません……？、何を……ですかね？」

特に何も考えていないかの様に、首を傾げながら問い返す。

その様子にファルマさんは苦笑を零しながら「まあ、詮索するのは無粋だしね」そう呟いた後「まあ、気が向いたらアイコンに俺かシエラに繋ぎ取ってくれると嬉しいな」そんな事を言う。

「機会があれば取らせていただきます、ネ？」

「依頼も待ってるよ」

……… 商売人魂（ではないのだろうけど）強いなあ。

そんな事を思いながら「はい」と会釈し彼らから離れる。

どうやら、彼らは既に別の依頼も受けているらしく即座に次の行動へと移っていた。

こうして、私にとっての初めての旅（？）の移動は終わりを告げたワケだが。

「ドツと疲れたのは何でだろうねえ」
そんな事をポツリと呟きながら宿を取る為に街中へと踏み出した。

12 コトの終わり（後書き）

ここで一端移動は終了となります。

13 穏やかな時間

無事に宿も確保し、街の中を探索する。

カスタフという街は中継地点と言うだけあり、大きな街である。

人に限らずに色々な物資等も数多く流通しており、時折店頭には珍しい物品も並んでいる事があるという。

王都に比べて華やかさは無いものの、賑いについては同じぐらいなんじゃないだろうかと思うぐらいには人が多い。華美ではなく実的な印象を受けるのは其処に生きている人達がこの土地に根付いて、色々な人々が出入りをしているからだろう。

出入りする人達がお貴族様がメインではなく旅人や《アイオン》の人間が多い為、嗜好品の類よりは実用的な用品の露天が軒を連ねている。

時々、おいしそうな屋台がちりほらりと見えるのは御愛嬌だろう。

しかし、この人の多さ……どうにかならんのかしら。

……うぶ、人酔いしそう。

必要品の買出しの為、外へと出たものの人ごみに流され揉みくちやにされながら露天や店を見て回る。

ぎゅうぎゅうの鮎詰め状態を以前もどこかで味わった事があるなと思いつながら、何処だったかと思考すれば思いついたのは元の世界での移動手段でもあった交通機関。

「この現状、何かで………ああ 満員電車」

この状態が苦手でそうそう乗り合わせた事は無かったが、運悪く乗り合わせてしまった時の状態と良く似ている、そう思った。

「トール様、大丈夫ですか？」

「うん、大丈夫………きつと、多分」

人ごみに揉まれる感覚と人其々の個々の匂いが混在しているこの状況で顔を青くしていると、黒玲が心配そうにフードの中から声を掛けてくれる。

その言葉に匂いを吸い込まないように手で鼻と口を覆いながら小声で返す。後半部分に続いた言葉に「きつと、多分………」と心配の色を濃くした彼女の頭を撫でて流す。

「匂いに敏感過ぎるのはどうにもならないのかねえ………もう心は折れそうデス」

「まあ、以前のトールをそのまま再現している様なモノだからな」

コチラに来る以前から匂いの類には敏感で、人との密着時にはその匂いでダメージを受けていた事もあるのである。

ここでもその嗅覚に悩まされるなんて……と心中嘆きながら呟けば、さらりと真実という名の剣を突き刺してくれるファルさん。

「念じたら緩和されるかね」

「わからぬ」

「デスヨネー………念じては見たものの特に変化がナイデス」

そんな言葉を流して半分ベソベソと心中で泣きながら彼と会話をする。

人のざわめきでこの会話は人に聞かれていないようである。

まあ、防音系の処置も精霊に頼んであるから余計なんだろうけれど。微かに溜息を零し、人に聞こえていない事を良い事にぐっと拳を握って呟く。

何分、人に聞かれていれば虚しい意気込みなのは分かり切っているので。

「さて、さくつと買い出し終らせようか」

王都よりも旅をする人間に役に立つ物が山とあるのである、まあ…それらを使用するかと言われれば些か疑問は残るが。

何分、人と気性と世界である…規格外にも程があろう。

一応、一人に見えて三人の道中である………食料も減るのが早い、半分以上は私の所為だが。

もともと私の胃も同年代の女性陣に比べて大きめなのだ、如何せん一度に減る量が半端ない。

ムコウでお弁当と菓子パン3つをペロリと平らげた記憶はまだ記憶に新しい部類である。

色々女子として間違っていると言われたがそこはスルーだ、腹が減っては戦（「戦」と書いて「講義」と読む）には挑めないのである。まあ、逸れた思考は戻しファルと黒玲は食わずでも良いらしいが、一人で食べるのも虚しいので二人にも分けてたらいつの間にやら、という話なのである。

「買うならアレ欲しいな……ジ、ジー…なんだっけ」
「ジーファですか？」

人ごみを掻き分けながら店頭に並ぶ品物を見つめ呟けば、黒玲が助け舟を出してくれる。

品物を手に取り吟味しながら話を進める。

「そうそう、ソレ…アレ、モツツアレラチーズみたいで美味しいんだよね」

「モ？、チ？……なんだソレは」

「いや、ファルサン モチじゃないからね？確かに、餅っぽいけど同じく旨いけど」

「………トール、涎が垂れておるぞ」

呆れた様な視線で私を見つめるファルの言葉に口元を指で拭いつつモツツアレラチーズの説明をする。
大好物なんだ、仕方なかるう。

「おつと、いけね………モツツアレラチーズって言うのは私の居たトコの水牛という動物の乳から作ったモノを指すワケ」

「ほーう…ジーフアと似ておるのか」

「うん、ムコウのは色は真っ白だけどネ…モチャットとした感じが良く似てて、味も割りと似てるんじゃないかな？」

そうファルに返しながら、お店のおっちゃんに灰色の塊を5個渡して袋に詰めてもらう。

此方のモツツアレラに良く似たジーフアは灰色をしていて、最初見た時は食べられるとは思えなかったが食べてみれば意外と気にならなくなり、今ではコチラでの私の好物になりつつある。

おっちゃんにお代を渡してまた人ごみの流れへと戻り、流されながら呟く。

「コサの実をスライスして挟んだら、カプレーゼっぽいのが出来る

んじゃないかなあ」

コサの実はトマトに似た、酸味と甘さを持つコチラの世界の食用の実の一つである。

形はドリアンの様で色は真つ青という色彩的に食欲をそそらない色合いなのだが、口に入れてみれば水気といい味といいトマトそっくりの為私の中ではトマトで確定しつつある。

案外、胃に入ってしまったえば変わんない……と割り切ってしまったえば支障は無い、ハズ。

見た目は何とも言えぬ青と灰のコラボだが、味としては美味しいんじゃないかななどと思い「今度作ってみよう」と企ていれば気になる会話が耳に飛び込んできた。

ディーヴァ

「巫女様が御忍びで各地を巡礼なさってるんだと」

「へえ……やっぱ、数年前のアレの所為かねえ」

「だろうよ……他の国も段々とキナ臭くなってー噂だしな」

「近頃、獣が出やすくなったのも関係あんのかね」

「さあてね 俺らには用心するしか出来ねえさ」

人混みの中から聞こえてくる言葉に耳を欹てながら足を動かす。それでも、性能の良くなった耳は彼らの声だけを汲み取り脳へと伝える。

「ディーヴァ……ね」

聞き慣れない音にポツリとその単語を呟き、何故その単語がそれ程までに気になるのか。

己でも解らず首を傾げた。

13 穏やかな時間（後書き）

出てこなかった…orz

人物像は決まっているのですが、どう出そうか思案中です。

穏やかな一幕。

・ 閑話 ・ デイーヴァ講座

「ほう、デイーヴァがいるのか」

ファルも彼らの会話も聞いていたのか、そう呟く。

その呟きの内容が会話の内容を指しているのは確かで、言い回しが少し気に掛かり問いかける。

「デイーヴァって、珍しい？」

「まあ……珍しいは珍しい、な 100万人に1人の割合だと言われている」

問いかけに彼は少し思案した後、解りやすいようにかかる程度明確な数値を上げてくれた。その言葉に視線を右斜め上に向け、ムコウの世界での人口換算を試してみる。

およそ、日本の人口が12700万ちよいだから……大体127人。

世界人口規模だともっと多くなるだろう。けれど、私はこの世界の総人口がどれ程の数なのか知る由もない。まあ、適当な概算にしても日本の総人口の中で127人は確かに珍しいと思える領域だと思い「確かに……珍しいね」そう言葉を言葉を紡ぐ。

あんまり珍しくない気がしたのは……たぶん複数の唯一が周りにあった所為だと思うが、そこは置いておこう。

「で、デイーヴァって何？」

改めて聞きたかった本題を振ってみる。

音は詠み解けるがその言葉が持つ意味を私は知らないから、知っておく必要性があると思ったのだ。

ムコウでは《ディーヴァ》はオペラの歌姫を指していたが、その意味合いと同じとは限らない。と言うか、同じである筈が無い。

何処にオペラ歌手が巡礼なぞする必要性があるのか……そもそもオペラ自体あるかも怪しい、つか無いだろ。

「ディーヴァとはもともと精霊や気性を視覚的に捕らえる事の出来る者を指して

呼ばれるのですわ」

「んじゃ、私もディーヴァ？」

そう黒玲が私の問いに答えてくれる。

返ってきた言葉にふと思った問いかけをして見れば、ファルが眉間に皺を寄せムツと不機嫌そうに表情を作り「トールはディーヴァでは無い ニュスだ」とぼつさり言い切る。

……どうやら、一緒に考えてはいけなかったらしい。

その言い様に口元に手を添えながら「ふむ、ディーヴァとニュスはノットイコールなのか」と、そう呟けば黒玲が「ディーヴァは《視る者》、ニュスは《司る者》になりますから」と明確な違いを簡単に告げてくれる。

それでもしっかりと自分の中で違いを理解できたかと言えば、不安は残る。

なんとなく原理の違いを認識したぐらいでしっかりと自身がそうであると認識できて無いのだ。

頭では解つていても、感情はついていかない……そんな感じなのである。

例えば微妙に用途が違っている気がしなくも無いが、今の私の中に
ある語彙ごいで当て嵌まるものがこれしか無いのだから致し方なかるう。
そう自分に言い聞かせ、もう一つの質問を問いかける。

「んじゃ、ディーヴァが巡礼する事に何か意味があんの？」

「そうですね、《視る者》であるディーヴァが巡礼する事に左程意味はございませんの」

さらりと答える黒玲の言葉の意味を取りかね首を傾げれば、先程の
会話の意味するディーヴァは《視る者》という意味では無く《視る
者》達の中で取分け突出した力を持つ者を指す称号なのだと彼女は
詳しい説明をくれる。

「力の有る者が巡礼する事に意味があるんですよ」

そう続けて彼女は言い、今度はファルが引き継ぐ様に説明を続ける。

「力有る者が国の中に在る精霊の加護の篤い場所を巡り、精霊達に
助力を求める事で

瘴気の蔓延、流出を防ぐ結界をはる事が可能となる」

そうファルは言い頭を掻きながら、精霊についての説明も付け加えてくれた。

「精霊は人に知られる事を好むから……《視る》事が出来る者には基本的には好意的だ

まあ、たまに偏屈も居るが……な」

そこらは今はいいだろう等と呟きながら、ファルは補足としてなのか「精霊は力有る者に存在を認められる事で存在を確固たるモノにする事出来る、事象に関与しやすくなるんだ」そう言った。

そして、私を見つめ目で他に何か聞きたい事は無いかと問いかける。その視線に軽く左右に首を振り、それ以外の質問が無いことを彼に示す。

「力有る者^{ディーヴァ}は精霊の存在を固定し、固定された精霊は事象に関与する事が出来る

んで、固定される対価に結界に関与し強化・補強が可能って感じでオケ？」

「まあ…そんな所だな」

説明の内容を自分の頭で細かく噛み砕き自己解釈として紡げば彼は苦笑を浮かべつつ頷いた。

「此方の国では皇女が一番お力の強い方の様ですので、その方を指して使われている様ですわ」

「ふーん……皇女様が巡礼ねえ、大変だ」

黒玲の呼び方に対しての現状にそんな事を洩らしながら、個人に対しての役称になってるんだなと納得しながら宿屋へと足を踏み入れる。

カウンターに居る気さくなおばちゃんから部屋の鍵を預かり、部屋へと向かう為に両の手に抱えた荷物のバランスを崩さない様に階段を上る。

「つーことは、ディーヴァって言うのはムコウで言う神和^{かな}ぎみたいなものかね」

「カンナギ……ですか？」

一人、ディーヴァについての見解を頭で捏ね繰り回していたらどうやら口から洩れていたらしく黒玲から問いかけられる。ファルも気になってはいるのか視線を此方に向けてくるので説明してみた。

「そ、ムコウ…特に日本と言う国限定だけだね 神霊に奉仕する人達を総称してそう呼ぶ

古い言い方では女性が巫めかんなぎ、男性が覲おかんなぎという名称になる…筈」

「割と女性が多いから、女性は通称の巫女の方が親しまれてるかな」と等と付け加えつつ、部屋のドアを開けて崩れそうになる荷物を留めながらするりと部屋へと入る。

神和ぎについては趣味で調べていたからある程度知識はあるが、あやふやな部分が在る事が切ない。

とすると、皇女様は巫女であり姫でもあるから…巫女姫ってどこか……よし、私の中でディーヴァ」《巫女姫》に決定。

そんな事を思いながら、荷物をベッドの上に置きフードを払えばファルも黒玲も身軽にシーツの上に着地する。

「そういえば、この街の近くにその加護の篤い場所ってあんの？」

彼らが着地した場所とは、ずれた場所に買ってきた品物を広げながら何となしに聞いてみる。

その間に手は品物を必要頻度毎に仕分けして行く。

「確か、火精所縁アーヴの地が北の山にあったな」

「そうですね、あそこは今だ火気アシフを帯びた場だった筈ですわ」

私の問いかけに、二人はそんな事を言いながら買ってきた品物の中からお菓子を取り出し食べ始めていた。

こうして、平穏な時間は駆け足で過ぎ去っていったのだった。

・閑話・ ディーヴァ講座（後書き）

話の流れに係有る様で、無い様な話なので閑話扱いです。
そして段々話数の意味が無くなってくるといふ…。

次回で出せればいいなあ（遠い目）

14 ちょっとした観光

一晩明けて、相も変わらずこの世界で私は目を覚ます。

カーテンもどきの隙間から差し込む朝日に目を顰めながら上半身をベッドから起こす。

腕を天井に向け大きく伸びをし、背筋を伸ばす。

「んー…眠い」

呟いた言葉は行っている行動とは多少ずれているが、気にしない。もそもそと枕の脇から衣擦れの音が聞こえ、二つの小さくて愛らしいお顔が布の間から出てくる。

「おはようございます、主様」

「おはよう、リョーコ」

「うはよ、二人とも」

まだ、眠気が覚めやらないのかファルは瞼を擦りながら、そして黒玲は黒銀の髪を纏めながら起床の挨拶を紡ぐ。その様子に笑みを浮かべながら挨拶を返す。

そして、思うのだからべき場所で取った睡眠は格別である…と。

「ベットがあるって素敵」

そうボソリと洩らして手早く着替えを始める。ファルは心得たか様にくるりと背を向けてくれる。

「精霊達にそうおっしやればいくらでも用意してくれるでしょうに」と言いながら、黒玲は人間で言う年頃8歳ぐらいの姿で本日の着る服などを用意してくれたりと身支度の手伝いをしてくれる。

先日までは馬車生活、しかも他人と過ごしていて彼女がSDサイズから大きくなることはなかったのだが、昨日の夜から私の世話をやく事に張り切ってくれているのだった。

ええ、服を脱がせる事からしようとしてくれましたよ（遠い目）

一般人感覚しか持たない私は世話される事に慣れておらず、昨日の夜に盛大なる《お話し合い》というバトルをする羽目になったのは言うまでもない。

話し合いの結果、お互い譲歩しあい服を着る作業や風呂に入って体を洗う等は手出しをしない、但し着替えを用意するなどの事はさせるということに相なりました。

「本日は如何がなさいますか？」

「王都からは結構離れたし、今日はちょっと息抜きに観光しようかなあって思ってるんだけど」

私が脱いだ衣服を積みながら、黒玲は本日の予定を問いかけてくる。彼女の言葉に暫し考えた後、昨日から思っていた事を話してみる。

王都から離れたといってもまだ、国境も跨いでいないので油断は出来ないのだが。

セレファンのお偉方はまだ誰も私がニユスだという事に気づいていないだろうし、そうそう大技の魔法や術が使えるとは見込んでいないだろう。

何分、魔法や術を行使するには師が必要不可欠。行使の方法が安

定しなければ、災害にしなければならないらしい。

私に教授したのが 世界 だとは、誰も思うまい。

今の時点では、私が勝手に家出したという状態になっているだろうし。

まあ、オマケだからという認識で放って置かれている可能性も無きにしも非ず。

でも異世界から来た私の未知の力を利用しようと企んだりする人達は、躍起に探していたりするかもしれない。

という、思考の結果【ボロが出なけりゃオツケーでしょ】という心境に至ったわけである。

「カン、コウとは何だ？」

聞きなれない言葉だったのか、ファルが私に背を向けながら言う。その背に「もう、こっち向いても平気だよ」と声をかけつつ、此方を向いたファルと同じ疑問を持つて黒玲に説明をする。

「観光っていうのは、他の国や地方の風景・史跡・風物などを見物することを指すのね」

「一応、風景を見物しにいくつもりだから 観光」と続けて言えば、二人とも納得したのか頷いている。史跡については、聞かれなくてよかったかと思ったのは内緒の話である。簡易的には説明出来るが、正確性には欠けるのである。

「では、何処に行かれるおつもりなのですか？」

「んー…昨日言ってた北の山に行ってみようと思うんだけど」

私にとっては見知らぬ土地なので二人に「其処って危ない？」そう続けて問いかけてみる。

二人は暫く考え、顔を見合わせてまず黒玲が口を開いた。

「私が知^{わたくし}っている其処は精霊達が多く集う場所でしたので、その頃であれば「危険は無い」と判じる事は出来ます……しかし、今は」

「忌石の影響が在る事も否めん 在るならその土地にどのような影響が起きているかは我にも解らぬ」

申し訳なさそうに言葉を告げ臉を伏せる黒玲に続き、ファルが真剣な瞳で言葉を紡ぐ。

「ぶつちやけ、危険度が高いってことか」

「そうなるな」

二人の言葉にぼそつと洩らした言葉に、ファルが至極当然のように言葉を返してくる。

「まあ」と続けてファルが愉しげにニンマリと口角を上げ、チェシャ猫の様な笑みを浮かべる。

「何かあってもリョーコの腕でどうにかならんワケではないが、な」
「……つまりは、私次第だと」

私の言葉に頷き、ファルは視線で「どうする？」とそれはとても愉しげに問いかけた。

それが、約3時間程前の事。

私は今現在、北の山《クオルレ山》の中腹付近を黙々と登っている所だったりする。

「ふ、ふふふふ………何この急斜面、何この獣道　パツと行つてパツと帰れたらいいのに」

「別に精霊達に運ばせるのはいいが、着地は保障しないぞ」

道無き道をザクザクと進みながら急斜面にゼーハーは大きく息を乱しつつ呟けば、ファルさんが冷静に返してくれる。

その言葉に「ですよー」と返しながら、足を動かす。

実際、長距離移動の方法や術やは存在するのだが、如何せん使い勝手が悪いのである。

方法としては話にも合ったように精霊達に運んで貰う方法がある、但し精霊達仕様の移動方法である為、着地が何処になるか解らないのである。

一度、挑戦してみたがとても切ない事になったので、上手い方法を考え付くまでは使用しない事にしたのである。

例えとしては「カスタフに行きたい」と言えば、カスタフの《何処か》には届けてくれるワケではあるが、街の構造や立地、配置を知らない人間にはあまり易しくない仕様なわけである。

カスタフの入り口としても、精霊達の《入り口》になる為あまり有効ではなかったりする。

術もあるにはあるのだが、行使する人間が行きたい場所を明確にイメージできないと使いモノにならないとか言うオチである。所謂、ド○クエのルー○みたいなモノなのですよ。

「トール様、もうそろそろ目的の場所ですので頑張つて下さいませ」

黒玲の可愛らしい声音に励まされ、必死に足を動かし辿り着いたのは鬱蒼うつそうと生い茂る木々の中、其処だけぽっかりと口を開けたかのように拓けた空間。

膝丈までの草が茂ってはいいるが、野原や広場といっても通じそうな場所である、とある一箇所を除いては。

「……………何か、幻影みたいに赤や銅の色合いがキラキラしてるのですけれども」

「それらが火気アジフだ」

目の前に広がる幻想的な風景に呆然としながら、言葉を洩らせばファルが説明をくれる。

見た目だけでなくその場にはある程度の力が息づいているのか、一種の力場を作り出している。

知識として認識したワケではないが、直感で感じる事が今の私ならば出来るようである。

目の前に広がる光景に見惚れる事暫し、不意に違和感を感じた。

14 ちょっとした観光（後書き）

ちよつとした観光に行ったつもりが何故か山登り。

パツと行ってパツと帰る事が出来るご都合主義は適用されませんでした。

タイトルが気に入らないので後日修正が入る可能性大デス。

修正履歴

H22・8・23・脱字修正、読点追加、改行追加＋文頭空白追加

15 不幸な遭遇

不意に違和感を感じると同時に、何か風を切る音を聞いた。

《《ツール（様）ツ》》

フードの中から危険を悟ったのであろう二人の声が聞こえるが、反応出来ない。

二人に思考で沈黙する事を促す、少しでも反応を返せばすぐさま2度目の死とご対面という状況になるだろう。

本能的に咄嗟に横に転がらなければ私は無事でいられなかった、そんな目の前の人物に2度目が通じるとも思えず、起き上がる途中の体勢で固まる。

鋭い音を立てて空を薙いだのは鈍く陽に輝く白銀の刃、私の羽織るマントの一部はその刃に切り裂かれ宙へと舞っていた。

確実に私の首を狙ったその軌跡にゾツとする。

「ほう………避けたか」

叢に転がり立ち上がる途中の姿勢の私に至極愉しげな声音が降ってくる。

だが、愉しげなのは声音のみでその場を支配する目の前の人物の雰囲気も、空を薙いだ剣の切っ先も、向けられる視線も冷え切ったモノを湛えている。

瞳など特にその色が顕著で見たモノを射殺すかの様に鋭い、必要とあらばその手で生命を刈り取る事にも躊躇しないのだろう。

容赦なく喉元に白銀を突きつける目の前の人物から私はあたかも美しくも獰猛な獣を視ているかの様に視線が外せない。

真紅よりも深く濃い……血の色をした紅に見据えられ、背筋に冷た

いモノが伝う。

少しでも動けば喉に当たる白銀は私を切り裂き赤を身に纏うのだろう、その状況が容易に想像できた。

確実に次の一閃で殺される

白銀が喉に食い込み皮膚を裁つ感触、そして首を伝う液体の感覚にそんな予感が脳を掠める。

それと同時に、周囲の空気が一瞬にして変化を遂げる。

平穩を顕すかの様に赤や銅に煌めいていた、火氣が青を纏い揺らめく。

―― 青、それは約1400 以上の温度を示す凶器の色

ニユスと定められた私に剣を突きつけた事で目の前の人物に精霊達が敵意を抱いている事に気づく。

死の鎌を擡げる使者の如く、揺らめく透き通った青が目の前の人物を狙って何かを形作ろうとする。

待てっ

咄嗟に心中で叫んでいた。

本能的に精霊達が目の前の人物に向ける敵意を、行動を、その力を縛りつけ縫いとめる。

火氣が纏っていた青は失せ、先程までの赤や銅という色合いに落ちて着く。

その影響力に「ニユス」という存在の一端を見た気がしたが、ここは放置。

それよりも私が精霊達を制限出来ている間に、この状態から逃れる手立てを考える必要性がある。

それも《迅速に》でないと下手すりゃ、目の前の人はこんがりローストを通り越して

即、炭化の域デスヨ……多分

シェラさんの術の時も影でこっそりゲーゲーしてたのに、再度リバースなんて事になったら泣けてきそうだなあ、などと思考を巡らす
が相も変わらず私と目の前の人物の間には緊迫した様なそうでない
様な空気が流れている。

その空気を霧散させたのは視界の端から駆け寄ってきた少女だった。

「お止め下さい、兄様にいさま」

天に昇る陽の如く輝く金系の髪に、黄昏時に空を柔らかく染める朱あけ
色の瞳を持った美少女が私の窮地を救ってくれた。

余りに眩し過ぎて目がチカチカしたのは、秘密である。

彼女は私を護る為にか刃を突きつけられて動けない私よりも前に、
刃を持つ人物と真っ向から対峙した。

周囲のから複数の人間の制止の声が聞こえるが、私達の渦中に突っ
込んでくる様子はない。

「この方は《ディーヴァ》でらっしゃいます……私の管轄わたくしです」

両手を一杯に広げて、毅然と前を向き、鈍く輝く白銀と深い紅に恐
れる事無く少女は言い放つ。

その様子に目の前の刃を突きつける、闇に煌々と在る月の様な白橡しろくろく
色の髪に深い紅の瞳の美少女に良く似た配色の青年が片方の口角を
吊り上げた。

「この視るだけの者に悪しき意志があり、危害があつた場合如何す
ディーヴァ

る？」

そう低い艶の在る声で諭すように言葉を紡ぐ青年。

続けて「確かに…ディーヴァは《稀少》保護の対象だが、我らにとって優先すべきモノでは無い」そう言い切る。

要約すれば、高々視えるだけの者を失ったとしても危害を加える可能性のある不穏分子は早々に芽を摘んで置くべきだ、という事を言いたいのだろう。

別にその考えを否定はせんが、むしろ正しいとも思っけどね……けれども、だ

何も確認せんまま切り捨てられるのはごめん被りたい
しかも、こんな山の中で胴と首の切断なんて切ないにも程がある

二人のやり取りに心中にゆとりが出てきたのか周囲の状況を把握することも、話の内容も推測も出来た。

少し落ち着いて見れば簡単なことで、周囲にいるのはセレファンとは着ているモノの雰囲気は異なるが上質な布を用いて作られた装束を身に纏う者達。遣り合ってる二人が纏う物はそれに和をかけて上質なのが見て取れる。

二人以外はローブで隠してはいるものの鎧の類もしっかりと着込んでおり腰に帯剣している者が大半、多分この少女の…もしくは、二人の護衛とみた。

そして、少女が私を《ディーヴァ》と言った事。

まあ、助ける為の方便とも取れなくも無いけれど……こんな山ん中を良いトコのお嬢様がお供付でこんな危ない時期に登るわきゃない。

なら、導かれる答えは必然的に一つだ。

答を導き出した瞬間に、私は念じる事でその場にいる精霊達に緘口令をひいた。

この場にいない精霊達にも即座に伝達する様に指示を出す。

人は気づかないが精霊、気性、動物達は《私》が何であるかを知っている。其処からばれてしまえば元もこもないのだ。

《私》はどの国にも属すつもりは無いのだから。

私が一人であれやこれやと精霊達に指示いる間に、不穏な風が力場を吹き抜けて行く。

以前、感じた事のある胸騒ぎを連れて。

精霊達も異常を感じたのかざわめきさざめく、その声を姿を知った少女がやり取りをやめる。

その様子に青年も何かを感じたのか、突きつけた刃はそのままに（できれば、放して欲しい）周囲の気配を探る。

他の従者基、護衛の方々も周囲を警戒する。

《瘴気だな》

脳内にファルの声が響く。

その声に「近くにありそう？」と問いかけを返せば返答の内容は「否」。

《どういうこと？》

《巨大な根源が触手を伸ばしていると考えればいい》

ファルの簡易的説明になんとなく想像がつき了承の意を返す。

《オケ……力場が狙い、ってことかねえ》

《わからぬ、だがこのまま放っておけばこの力場は穢されるだろうな》

《……結構大事でナイデスカ？》

《さあて、な》

脳内で気の無い返答が返されたと同時に手を着いている大地が微かに振動している事に気づく。

それが段々と忍び寄る様に近寄って来るのを感知した瞬間、私は動き出した。

15 不幸な遭遇（後書き）

さて、ここでやっと出てきました。
というか、出せました。

この兄妹、初期構想の時点からいたんですよー
そして、妹ちゃんはおてんばじゃじゃ馬から落ち着いた感じの子になりました。
可愛い女の子は至福です。

16 儀式という名の言語

咄嗟に、白銀の刃を掴み引き離す。

刃が手を傷つけ血に染まるのも気にせず少女と青年の隙間をすり抜ける。

その瞬間に二人に緊張が走ったのを感じたが、そこで躊躇している余裕は私には無かった。

「オルレギンドゥベイ 其の起源は我、シタルフエイベイロ 源たる我が赤き血潮により ムディラ 顕現せよ」

その間に一息で詠唱を終わらせ、流れた己の血すら好機と判断し媒介として今の私が使用出来る最上級の障壁を展開する。

障壁が出現した瞬間、地中から出現した巨大な無数の影が激しい音を立てて弾かれる。

「……おっし、間に合ったっ」

そう呟きながら障壁の向こうで弾き飛ばされ、その衝撃で引き千切れた「根っこ」らしきモノがビタンビタンとたた打ち回っているのを見る。

微妙にシュールな光景にちよつとばかり遠い眼になる。

「うーわぁ……こらまたエグイ」

根を取り巻くのは黒味がかった靄……《瘴気》のお陰で見事なまでに変質してしまつて原型を留めていない。大まかな形を残してはい

るが、もう既に別のモノだ。

千切れ引き裂かれた部位からは腐臭と共に粘着質の緑黒い液体が流れ出ている。

香る腐臭に眉間に皺を寄せ、そんな風に呟く私の横から可憐な声音がしつかりとした音で術を紡ぐ。

何分、障壁は接触や攻撃、魔法、術等は弾いてくれるが音、匂い等は弾いてくれない為匂いの影響を遮るには鼻を摘むしかないのだから切ない。

「我れ属すは被い清める者也、個々に在りて燻ぶるは禍つ者 我が力にて絶たれるべきは其

この場に留まる事許さじ 《被》」

少女が呪文をいい終えると同時に、《瘴気》はまるで蜘蛛の子を散らすかの様に微かな残滓を残して霧散した。

その様子を感じて傍観している間に少女とは反対脇から静かな声が「焰アウル」とだけ紡ぎ、容赦なく高位の炎を喚び変質した複数の根を焼き尽くし炭と化す。

青年の実力の一端にヒューとか口笛を吹いてみたかったが、どうも私は口笛が苦手なので吹けなかった為心中で棒読みで言ってみる。

「今、この場で儀式を執り行います」

少女が凜とした様子で言葉を紡ぐ、その言葉に未だ私の障壁で守られている護衛の方々が「何処の馬の骨ともしれぬ前で……」とか何とか言っているが少女は彼らの言葉を見事にスルーし、私の向こう……彼女が兄様と呼んだ青年を見やる。

その少女の視線に青年はフツと鼻で笑いその後は何も言わなかった。少女は彼のその様子を了承と受け取ったのか満足した様に目を緩める、そして私の方へと視線を向けふんわりと陽だまりの様に微笑

んだ。

「申し訳ございません、御辛いかと思いますがもう少しだけこの境界を

維持していただいて宜しいですか？」

そう言いながら、私の未だ血を流している手を両の手で包み端的に
「癒ウォレル」と呟く。

詠唱のない治癒系の高位術に感心しながら、私も彼女の問いに答えるように言葉を紡ぐ。

「わかった……もう少し広く展開した方がいいのかな？」

特に何かを意図したわけでは無いのだが、儀式を行うと聞いて広い場所があつた方がいいのかなと思ひ素で返した言葉に少女も青年も驚いた様に目を見開く。

え……何かいらん事言つた？等と内心焦っていると少女が先程までの様子に戻る。

「出来るのであれば、もう少しだけ…あちらの火アシフ気が密集しているあたりまで

お願い出来ますか」

おずおずと言つた調子で問いかけられ、彼女の指した方へと視線を向け、別に答えられない注文でも無かつたので軽く頷きパチンと指を弾く。

まあ、指を弾く行為に左程意味があつたワケでは無いのだけでも、私の意識と認識の切り替えに今回は役立ってくれたワケである。ぶっちゃけ、ただ単にやってみただけである。

「こんな感じで、いいかな？」

指示された範囲まで広がった障壁に満足気に頷き、少女に問いかければ呆然という言葉が当て嵌まりそうな表情を浮かべていた。

青年は丹精な顔に何やら愉しげな笑みを浮かべており、背筋に悪寒が走ったのは余談である。

そんな状態で、美少女ってどんな顔してても目の保養だねえ等と下らない事を思いながら首を傾げてみる。

「え、ええ　ありがとうございます」

私の仕草に固まっていた表情が動き出し穏やかに笑みながらお礼を言われる。

そして、少女は広げた障壁ギリギリまでゆったりとした所作で近寄り深く息を吸い込むと明らかに今まで話していた言語とは別の言葉を用いて高らかに謡い始めた。

周囲の者達はその歌を阻むモノが無いが警戒しているのか、ピリリと空気に緊張の色がのる。

だが、私はそれ所ではなかったのである。

少女の紡ぐ音は今まで聞いた事も無い音だと確信できる、そして次々と頭の中に音の意味が、祈りが、泡沫のように浮かび上がり鮮明に刻まれ消えていくのだ。

今の今まで、敢えて触れる事は無かったのだがこの世界の言語は確実に日本語では無い。

ソレはなんとなく解っていたのだ、だからこそ余計に疑問に思うのである。

今までは召喚特典なのか全て私の耳には日本語に変換されて聞こえていたのに、何故これだけ……そのままの音として「聞こえる」のか。

《これは…古ジティリア語》

ポツリと洩らされた黒玲の思念に微かに首を傾げれば、ファルが《精霊と交わった一族が使った言葉だ…精霊と会話をする際に用いられたモノだな》説明をつけてくれる。ふーんと思わずで感心したように二人に返せば黒玲が余談を付け足してくれる。

《精霊は人の言葉を理解はしますが、力を貸すか否かは気分次第と言ったところですね》

ですが、この言語は精霊達の意志の波長とよく似ていて彼らの理解を得易いのです》

《既にジティリアの民もこの言語も絶えて久しいと思ったが、まだ失われていなかったんだな》

ファルの言葉にこの歌にも聞こえる言葉は希少なものだとは理解する。

が、やはり私自身に妙な聞こえ方をしている為に浮かんだ疑問を問にかけてみる。

精霊用の言語ってのは解ったんだけど、私には音は聞き慣れないのに意味は浮かんできてくる

そんな状態なのは何故デシヨウカ？

《……ニユスは人だからだ、リョーコの言う通り精霊との為の言語だからな》

人の「身」には意味の在る音として認識されぬ、だがニユスは精霊達を司る者

存在の在り方は人より寧ろ精霊や気性等に近い、それ故に意味が浮かぶのだろう》

私の意味の解らない説明にファルは暫し考えるように沈黙した後、思念を紡ぐ。

普通にファルや黒玲みたいに思念で会話すりゃ済むんじゃないかなるかそんな事を思えばすかさず黒玲が返答をくれる。

《この様に思念で会話できるのは人では「王」バシレスだけですわ

王の役割の一つは彼らを司り安定へと導く事 それ故に王の意思は精霊の総意、

精霊達は王の意思を受け取れますし、王は思念で彼らと会話出来るのですわ》

黒玲の思念を噛み砕いて脳が理解するまで暫し。

妙な沈黙が落ちた後、私は呻く様に思念を垂れ流した。

……今更、気付いたんですが それってものごっつー大役ジャナイデスカネ？

私が悪用でもしたらどうすんのさ

《悪用するような魂の者であれば既にその役に喰らわれて自滅している》

さらりとファルさんが恐ろしい事を言い切ったすぐ後、少女の歌は途切れた。

16 儀式という名の言語（後書き）

この話は言語の話が出てきました、いつ触れようかとても悩んだんですけどね。

無事に出せてよかったです。

今後の話でまたかるーく触れることもあるかもしれません。

ニユスの役割も少しだけ出てきました……アレ？入れる予定は無かったんだけどなあ。

読んで下さる皆様ありがとうございました。

今後も地道に、書き進めていきたいと思っています。

17 無言は肯定か否か

謡が止み、風が草木を揺らす音だけが響く。

火^{アジフ}気が密集していた場所には紅蓮の炎を纏ったモノが宙に姿を現していた。

容姿は美麗とでも言ったらいいだろうか、性別は男性の様に見えるが何分精霊なので確定できる自信は無い。だが、数メートル先に確かな実体を得て其処に在るといふ確信は本能で感じている。

炎を纏った火^{アーヴ}精霊は私に微かに目礼をした後、目の前の美しい少女の額に口付けを贈る。

聖なる儀、それは祝福でありそして契約……どちらかが消滅するまで続く永遠の枷。

ただの草木の生い茂る山の中で見るには、あまりにも厳かな雰囲気^{アウ}が周囲に漂う。

火精霊は唇を離れた後、何かを少女にコソリと囁き、少女は囁かれた言葉に少しだけ首を捻る。その後、精霊が姿を消すのを感じたのか少女はとても美しい仕草で頭を垂れ、精霊が姿を完全に消し去るまでその姿勢をとり続けた。

その様子を私を含めた他の者達も固唾を呑んで静かに見守り続け、精霊の姿が消えた後各方面より詰めていた息の吐かれる音が耳に届く。

まあ……約一名省くが

事が収束するまで私は静かに見守っている他なかったたので、そのま

ま結界の隅を陣取り見物客気分で見ていたワケである
うん、なかなか素敵だったよ…映画のワンシーンって感じで

とそんな感想を思いながら、相も変わらず障壁は先程のまま維持を
続けている。

何分、地中から狙ってきた瘴気で変質した根っこがさっきからひつ
きりなしに色んな所で障壁にタックルしてくれている為、不用意に
解く事が出来ない。

一応、ファルにご教授頂いた術の中で最高位の障壁なので私が意図
的に解除するか、私の魔力が尽きるか、それとも私を殺すか、この
障壁以上の高位魔術をぶつけて相殺させるかの4択になるので不用
意に掻き消される心配はない。

所謂、物理的には最強の名を掲げていい代物であると言っているの
は誇るべき所だろう。(多分)

衝撃自体は私には届かないが、障壁自体がセンサーと同じような役
割を担ってくれているのでどの場所にどれだけの数というのは、把
握できている。

下手な事をされると儀式中に力場事体を崩される可能性もあったの
で、気づいた瞬間に感知できる力場全体に障壁を広げた。因みに障
壁はドーム状の様に視界には捉えられるが、実際は卵状である。そ
の為、地中もとい足元からの襲撃も防げるワケだ。

火精霊が実体を伴った時点で、根っこによる力場への干渉は不可能
……簡単に言えば火精霊の力が契約によりパワーアップした為、た
だの変質した根っこでは役不足になったのだ。

それを確認して障壁の範囲を縮める様に意識する。

出来れば、事が済めばすぐさまにでもトンスラをこころと考えてい
たんだがそうも行かない現状に軽いため息が零れた。

「申し訳ございません、此方の事情に巻き込んでしまって」

先程のため息が耳に入ったのか少女は私の方へと駆け足で寄り、申し訳なさそうに言葉を紡ぐ。

いや、別に謝ってくれなくてもいいからここから脱出させてっ
なんつーか、貴女のお隣にいらっしやるオニーサンの視線がとつても痛いのですヨ

そういう心境になりながらも、下手に洩らして死にかけるのはごめんなので「いいえーオキナサラズー」とか言ったのは正しいと思う。

「契約の儀式は滞りなく済みました…貴方様のご協力に深く感謝いたします
マイリアウスアデプトウス
《古代魔術師》殿」

そんな少女の言葉に次の瞬間には、一瞬思考が停止したワケであるが。

何をもつて、彼女が私を古代魔術師と判断したのかはなんとなく思い当たる節があるが……あんな緊急事態の状況でよくぞ判断したものだ、とも思う。

目の前で詠唱を聞かれていたのもあるのだろう。そして、私は認識を改めなおす必要性があるらしい……どうやら、目の前のたおやかで純粋な美少女は割りとは抜け目のない方なのかも知れない。

まあ、明らか希少価値、利用価値とも聖女よりも上を行く王だと思われるよりは、向こうが勝手に決めてくれた役職に乗っかって置くべきだと思い、あくまで古代魔術師だと肯定も否定もせずに言葉を返す。

「いえ、お役に立てた様であれば何より しがない魔術師にそのお言葉ありがとうございます」

人とは自分がある程度確信を得て問いかけた事に否定も肯定もせず
に返されると、肯定したと思い込む節がある。まあ、所謂「無言は
肯定」というヤツである。

該当しない疑り深い人間もたまに存在するが、私は先程に間違った
確信を植えつけるには最高の術を行使したワケだから…そうそう、
王だと暴かれる事は無いだろう。

というか、誤解してくれている事を祈ってる。

それに、向こう側も身分をひけらかしたい訳ではないのだな、と感
じ取る。

「貴方様のお陰で無事に終えられたのですから」

首を横に振って私の言葉に否定の意を示した後、少女はふんわりと
笑みながら言葉を紡ぐ。

その笑顔に此方も薄く口元に笑みを浮かべる。そんな穏やかな空気
をぶち壊すかのように低くよく通る声が言葉を紡ぐ。

「事は済んだ、帰るぞ」

「兄様っ」

青年の言葉を咎める様に少女は彼を呼ぶ。

が、彼は大きくした様子もなく鼻でせせら笑った後、流れる様
な動作で礼をとる。

「マイリアウスアデプトゥス
《古代魔術師》殿 お力添え感謝します」

その言葉だけ呟き彼は頭を上げると「これでいいのだろう?」とい
う意志を乗せてチラリと少女を見やり後ろで控えている側近達の方
へと歩を進めて歩いていく。

その後姿を「ほわぁ……慇懃無礼ってこんな感じ？」等と場違いな事を思っていると少女が再度「申し訳ございませんっ」と言葉を紡ぐ。

その様子に苦笑を浮かべながら気にしていない意を伝える為に、首を横に振る。

そして、彼女に静かに問いかける。

「話は変わりますが、障壁の外は先程の根が待ち構えております………如何されるおつもりですか？」

先程から聞きたかった事を。

17 無言は肯定か否か（後書き）

また、新たな単語が……

少しは自重しよう自分 or z

ここでひと段落付けられなかったのもそのまま18に繰り越します
（ライ）

18 不穩の欠片「前」(前書き)

お久しぶりです、花井です。

2ヶ月放置申し訳御座いましてしたorz

また、地味にこつこつと更新していきますのでどうぞ宜しくお願い致します。

18 不穩の欠片「前」

「……あ奴等さえおらねば、妾が、息子が、こんな思い等する筈なかつたのにのう」

豪華な部屋に響く麗しい声音はまるで歌うかの様に静かに、しかし苛烈な意志をのせて言葉を……呪詛を吐く。その言葉を聞くのはその部屋に、女性の傍に影の様にひっそり佇む壮年の男性のみ。

「ふふつ、今の内に精々偽りの王座を堪能するがよい」

艶やかな赤の紅に彩^{べに}られた唇から零れる言葉は惨忍性をのせ室内へ霧散する。

そして、女性はにんまりと口の端を上げ此処に居ない相手に問いかける様に言葉を紡いだ。

「妾を追いやつた罪、お前達で贖^{あがな}つて貰^{もら}おうではないか………のう、アーシエヌ」

女性の胸元に飾られた巨大な虹色の宝石が陽の光も無しに妖しく揺らめいた。

視界を緩やかに閉じて、感覚を鋭くする様に意識を障壁に向ける。そうする事で何故かある程度の対象の動きがわかるのだから、つくづく私は便利な体質になったものだと感慨深くなる。

因みに深く考える事とツツコム事はしない、果てしなく自分が疲れるからである。気を取り直して、思考と意識を現状へと引き戻す。

障壁の外で待ち構えている根は何かを追う様に薄い壁の外を蠢く。先程までは障壁を破ろうと必死の体当たりなどを試みていた様だが、それを無駄だと悟ったのか……それとも、学習能力を持ち得ていたのか、無闇にぶつかって来る感覚は無くなった。

閉じていた瞼をゆったりと上げ、茜色に染まる空が視界に入る。

どちらにせよ、意思を持っているか学習能力を持っているモノが厄介でないワケがない。

根は障壁を破れはせずとも、人は永遠に障壁を張り続ける事は不可能だからだ……障壁が消えた瞬間にどのような行動を根が取るかなど私にはわからない。

相も変わらず障壁近くに待機している根が「何もせず」という事は有得ないだろうけども。

一見、其々の根は意志の無い様に見えるがその動きは確実な意図を含んでいる。

根の動きを感じ取りながら、持ち上がる二つの可能性。

实际的に有力だと思えそうなのが「力が強い者達を捕食する習性」の可能性……簡易的に言ってしまうと力を糧に成長する植物という事。

この場にいる者の「力」は人の中ではかなりの上位、その中でも彼らが特別飛び抜けている事も。

まあ、私の力は彼ら以上に桁外れなのだろうけれども、フードにかけた術で抑えてあるので心配はない……筈。

ただ、目の前の彼らを鑑みるに微妙に外せないのが「彼ら自身を狙っている」という可能性……これは、個人的な人の意思が絡んで根を行使していると捉えた場合。

要職についている人間が誰にも反感を買わずにいられる筈がないと私は思っている。

人の数分かずぶんそれぞれ真実と正義と事象は存在するのだ、反発を生まずにやっていけるのは極稀だろう。まあ、ソレを成してしまう人間を一人だけ知ってはいるけれども、言わずもがな彼女である。

今、目の前にいる彼らの動向を良しとしない人物がいるのかもしれない……と、其処まで考えて思考をとめる。

此処から先を関係の無い己が邪推したとて物事は変わらない、ならこれ以上思考し疲れる必要性も無いと断ずる。

結局ドチラにしても、私がカスタフへ戻るには問題は無い……私は、ね

そんな思考を頭の片隅で考えながら、私は視線を目の前の少女へと向ける。

先に述べた習性うんぬんについては可能性として、そういった植物が存在しないとは言い切れないのだが。なんたって異世界だし。

ただ、それにしては疑問が残るワケで。

力の突出した二人だけを根が追っているというこの現状、生き残る為の糧というのであれば周囲の従者達も私も少なからず対象になる筈……だが、根が追うのは彼らだけ。

明らかな作為に笑うしか無かった。

問いかけた直後に笑った私に彼女は首を傾げながらも言葉を返してくれる。

「そうですね、私達^{わたくし}は火急でもありますし転移の術で離れるつもりなのですけど」

その言葉を聞いて、まずいなあなど思考を回す。目の前の少女は何故先程の根が襲撃したかに気づいていない…と思う、此処を離れば逃げられるとも思っているのだろう。

気付いていてこのセリフであれば、楽家極まりない思考なのかそれとも……。

あながち彼女の内容は間違っていない……ターゲットにされていないのであれば、の話だが。
ターゲットにされていなければ撒いて逃げおおせる事も苦ではない。

では、ターゲットはどうやって逃れられるのか？

答は至極簡単
——
追って来れぬ程徹底的に痛めつけばいい

降って沸いた思考に、私も随分野蛮になったなあ等と無意識に溜息を吐き出せば、少女はソレを見てさらに首を傾げる。

「何か不都合がございますか？」

「おい」

少女が紡いだ言葉といつの間にやら私達の傍に来ていた青年の言葉が重なる。

先程の慇懃さは何処に消え去ったのかと聞きたくなる程に青年の態度は不遜だ。

別にソレに関してはどうでもいい事ではあるのだが、少女が根の狙いに気付いていない時点で話を振れる相手は制限される事に、そしてこれから青年へと言葉を紡がなければならない事に再度深々と溜息をついたのだった。

「先程の根の狙いは貴方方お二人、転移を行っても追ってくると思うのですが……」

数分後、私は不機嫌に眉を顰め鋭い視線を向ける青年に面と向かってこんな事を言う羽目になっていた。

……………誰か、タスケテ

心中で泣きながらそんな事を思い、未だ威圧感たっぷりの空気を垂れ流す青年にチラリとフードの下から視線を向ける。目の前の青年は私の進言にも表情一つ変える様子が無い。

「で？ ソレが事実だという証拠は？」

「……………障壁を解いてみましょうか？」

彼の言葉にピリリと張られた緊張の糸が振れる。というよりは、疲れて面倒になってきたというのが正直なトコロである。

別に、自分への評価が彼らの中でどうなるかと私には関係ないのだからと思い直して、確かに笑っていると見せる為に口角を持ち上げた。

18 不穩の欠片「前」(後書き)

次話でセレファン脱出(?)編は終了予定です。

舞台はお隣のアシヤステア連邦共和国に移っていく……筈です、
多分。(なんてアバウト)

そして、今更気付きました…予約掲載なんてモノがアツタンデスネ
(啞然) or z

18 不穩の欠片「後」

「そうですね、貴方と向こう側にいらっしゃる方々の周囲の障壁を解きます」

続けて「ああ、回避する為に障壁が貴方を拒む事はないので、内に戻って頂いても結構ですから、怪我なんてしないでください」と付け足す。言外に「証明する様アンタが言ったんだから、怪我しても文句は言っなよ」ぐらいの意味合いを含めて見せれば、目の前の青年の少し厚めの唇が緩やかに吊り上がる。

少女はその表情に何かを思ったのか口を開こうとするが、青年と視線が絡めば大きく溜息を吐いて口を閉ざした。

青年は話を通す為にか、離れた場所にいる従者達へと向かい一言二言言葉を交わしている。

その姿を視界に入れながら軽く、息をつく。

《リョーコ》

不意に脳内に響くテノールに、内心苦笑を溢しながら《大丈夫》とだけ手早く返し、ついでに次に声を掛けるまでは実体化しないようにお願いをしておく。勿論、黒玲にもである。

二人とも不服そうではあったが聞き届けてくれたので、心中で安堵の溜息をついた。今から行う事で不測の事態が起った際に、二人の姿を確認してしまわない自信はない。誤魔化したとしても彼は、その誤魔化しすら見透かしてくるだろう。

視界の青年が此方へと歩を進めて、戻ってくるのをただ見据えな

がら言葉を紡ぐ。

「では」

彼の視線が此方へ注がれている事を確認して、指を弾く。ピシンと小気味いい音を立てると同時に、障壁の一部が意味を無くす。まるでドーナツの様に穴の開いた障壁部分に、否……青年のみが立つ穴に、我こそはと言わんばかりに根が密集し大地を貫く。

根に押し上げられる土は勢い良く宙を舞い、私の視界から根の壁により青年の姿は隠される。

そして次に目に飛び込んできたのは、目を焼く様な 白。

青よりも高温を顕し、全てを無に還す様な焰。

続いて、響くは断末魔の様な地鳴り……それは、根の絶叫の様に思えた。

「成程、確かに俺達を狙っているようだな」

土塊の降る視界の中、揺ぎ無く立つ青年の言葉が静かにだがはつきりと耳に届く。もしかしなくても、あの白き焰はその彼が造り出したモノなのだろう、とそんな考えが脳内で丸まって霧散する。

其処に然りと在る彼は、特に何事も無かったかの様に「面倒な事だ」等と服に付いた土塊を軽く掃い、呟く。

その様子にあまりの事に固まっていたであろう、もう一方の障壁解除対象者の方々は素早い動作で、彼の元へと駆け寄る。そんな彼らに青年は特に表情を変える事無く、淡々と「そう慌てずとも心配するな」とだけ言葉を投げる。

その言葉に食って掛かる者、呆れる者、苦笑する者様々だが全員、彼が無事でホッとした様な表情をしている。意外に、上下関係無く

フレンドリー（？）な関係である様子が見受けられる。

そんな彼らの様子を見ながら、私は詰めていた息をゆっくりと吐き出した。

自分以外の血を見るかもしれないという恐怖は存外、私を強く縛っていたようである。

「兄様が使ったのは《無への饋還》全てを無に還し浄化する、ノヴエリア一族のみが使用出来る術です」

不意に、時を見計らったように脇にいる少女から彼の造った白き焰の名を知る。

視線を彼女に向ける事無く、その言葉に内心では眉根をきつく寄せ、次に紡がれる言葉を待つ。

「……………」

「何故、そんな話を？ とは、聞かれないのですね」

静かに紡がれる言葉を聞きながら、心中では「ああ……面倒事こんにちは」と嘆く。その嘆きを表に出さない様、細心の注意を払いながら言葉を紡ぐ。

「聞いたら後へは戻れないのでしょうか？」

注意を払いながら紡いだ言葉は、思った以上に硬質的に空気を振るわせた。

先手必勝とばかりに紡がれた少女の言葉に、彼女の目に己自身が必要要素に見えている事を認識する。

別に彼らに連れられて他国へと向かうのに異論は無いが、彼女や彼がどのような位置で見ているか、それが解らなければ身の振り様がないなあと思考する。

そんな事を思っている最中に、要らない事に気づいてしまった。
正しく言えば、気付きたくない事に気付いてしまったのだけれども。

一も二も無く、駆け出す。

いきなり走り出した私に少女の驚いた様子が伝わってくるが、それに気をとめている暇は無かった。

あぁっ、もうっ 自分で自分の首絞めんのかよっ！！

心中で自分自身に罵倒を浴びせつつも、障壁を穴開き広範囲から少女周辺と青年周辺に切り替える。私の足音に気付いた彼らが視線を向けると同時に、目的地に辿り着き手を伸ばした。

「オイタにはオシオキだよね」

私は、目的のモノを驚掴みにしながら静かに呟いた。
手の中で、かなり大きい仕草で逃れ様とものがくのは先程と同じ様な、根。

「先程ので逃げ帰った、と思っていたのだけど 案外粘着だねえ」

障壁と焔で十分な程にダメージを負っている癖に、起死回生でも狙っていたのか。

彼らがこの障壁から出るのを待ち受けていたであろう、根を目を細めて見据える。

「目の前で、ヒトが傷付くのは頂けないんでな」

そんな事をのたまいながら、私は躊躇せずに根の動きを奪う。

掴んでいるその手に纏うは青白き閃光、最初は僅かな反発音を伴っているが次第に音は激しくなる。

くつり、と自分の唇が歪む音が聞こえた気がした。

「^ゆ行け」

言葉と共に、まるで地中に住む大蛇が暴れるかの様に地が揺れる。掴んでいた根は一瞬の間に黒々と炭化し、指の間からパラパラと地に落ち、風に攫われて行く。掌中に残った残骸は、軽く手を叩くことで払い落とす。

その間に根が残っていないことを確認し、障壁を解除、と手早く行っていく。

一通りの作業を終えて思うのは、段々と人外になりつつあるなあという切なさ。

深々と溜息を吐き出し、転移の魔方陣を展開する。

後ろの方々が何から息を詰めていたり、騒がしかったりするのはスルーして、心中はもう既に大いに音を上げている。全ては私の為に完全無視である。

私はご飯食べて、寝るのです

そして、ファルと黒玲に癒して貰うんだっ

そう心に決めて、残りの全てを放置した。

18 不穩の欠片「後」(後書き)

さて、見事なトonzラをかましたトーコさんですが……。思った以上に人外になりつつある自分に結構なショックらしいです。

暑い日が続きますが、皆様お身体お大事にお過ごし下さい。

私は、暑さにヒーヒー言いつつ頑張りたいと思います。

修正履歴

H22・7・27 誤字修正

19 対話

視界が術により遮られる寸前、腕に「何か」が触れた。

触れた「何か」によって加えられた負荷に、耐え切れずに身体はバランスを崩す。

ドザサツという音と共に重い何かに押し潰される感触と、その「何か」が温もりを持つ事に気付くと同時に視界が開けた。

視界に入るのは、山に向かうまでいた宿の部屋の天上、そしてソレよりも手前に……というよりか、眼前ド真ん前に陣取るのは麗しくも精悍なお顔。

うーわぁ、びっじーん 睫毛、長っ！ お肌、白っ！
しかも、すべすべしてそうっ！！！！………ねた妬ましやっ

まともに回転しない頭で、そんな事を思う。

私も大概に目玉が零れ落ちそうな位に目を見開いているのだろうが、それに負けず劣らず目の前の彼は私を押し倒した状態で息を呑んだ。

「……お前、女か」

一瞬で冷静さを取り戻したのか、彼は静かにそう呟く。
その言葉にはたと気付く、今この体勢のありえなさに。
私は彼に縫い止めるかの様な状態で押し倒されて居るわけで、上半身は彼が肘を立てて庇ってくれたのか密着は免れてはいるものの、明らかに普通の対人距離とは比較にならない程、近い。

下半身は言わずもがな、というよりは彼も膝を着き損ねたのか、密着度はかなり高い。

性別の判断は多分其処から成されたんだろう、とかグルグルしている思考に、彼の付けている香いがはつきりと匂り余計に思考はマール状へ。

落ち着く様な香りの中に少し、何かをそそる様なスパイスが入っている……そんな匂いを美味しそうだと感じてしまった自分は大概、壊れかけだという事にハタと気付く。

うぎゃあああああつ　ち、ちかつ近いっすよっ!?

そりゃ、百合さんが押し倒されてるトコに乱入して、助け出した事は何度か御座いますがつ!!

自分が押し倒されるなんて、想定外の外だつてのーっ
にーぎゃあああああああ、眩しいよおおおおっ

心から大絶叫して泣き喚きたいのに出来ない。そんな状態で顔は真っ青、背中にはダリダリと冷や汗を掻きながら、カチコチに固まっていること、幾許か。

此方の出方を伺っているのか、体勢を動かそうとしなかった彼が動いた。人がこれ程、俊敏に動けるのかと言う速さで、彼は私の上から飛びのく。

その瞬間、彼の上半身があつた高さの壁に小気味いい音を立てて、漆黒の矢が突き刺さる。

「我が主に、何たる無礼　身の程を弁えよ、小僧」

静かに、それでも怒りを纏わせた、鈴の音の様な声音が部屋に響く。

ふわりと私の横に黒玲が降り立ち、彼を威嚇しながら手を差し出し起き上がる手伝いをしてくれる。

黒玲しゃん、何かお言葉遣い違いませんか？

未だ、沸々と湯気を出している脳内で彼女の言葉遣いにツツコムしかし、黒玲さんは私の思考に応える事無く、警戒は解かないままジッと彼を見つめる。

「世界が女で、《気性》持ちか……面白い」

黒玲の威嚇に動じる事無く、私が立ち上がりベッドに腰を下ろす様子を見ながら彼はそんな事を呟く。

「は？」

彼の言葉を理解し損ねて呆けた言葉を返せば、彼はゆったりとした所作で私に近づく顎に手を沿え上を向かせた。

敵意、害意、殺意等が感じられず、されるがままに呆然と上を向き、彼を見つめている私に言う。黒玲も彼の意図を測り兼ねた様で、多少困惑の気配が伝わってくる。

「ファルディカール世界は翡翠の髪に赤紅の瞳、褐色肌の青年だと言う伝承だが、これでは《青年》には見えんな」

そら、生粋日本人標準仕様の私が青年に見えりゃー、眼科の検診オススメするわぁ

……………つか、目医者自体いるんだろか？

何とも間の抜けたツツコミを、心中で返す私を気にする事無く「精々、少年止まりだろうに」そう彼は続けて言う。その言葉と共に私の、今は翡翠色の髪を一房するりと流れる様な手つきで梳くと、

素早く一歩後退した。

その動作に、顔や髪を隠す為のフードが意味を成していない事に今更、気付く。

「主に触れるでない、この青二才」

彼の今まで立っていた場所に又も、見事な音を立て漆黒の矢が突き立つ。

あー……また、部屋に穴が 後で修復せななあ……修復呪文系つてあるのかしらー？

矢が突き立ち、霧散した後に残る穴を私は嘆くが、誰も取り合っ
てはくれない。

いきり立つ黒玲の様子に、それはとてもとても愉しげな笑みを浮かべた後、彼は私を見る。

嘆きの次に脳内に巡るは「ファルさんの姿は、ニュースにしか見えないのちゃうのっ!？」などと言う、あたっている様なそうでない様な感想と「それよりも勘違い解けよ」と言う以外に冷静な思考。

「私は貴方の思う様なモノでは無いよ、ヒトでしか無い」

感想は隅に置いておき、その彼を静かに見つめ返しながら言葉を紡ぐ。私の紡いだ言葉に、彼は器用に片眉だけ上げて見せる。

そんな所作も様になるのだから美しいって凄いね、等と阿呆な事を思いながら続ける。

「外見で決めないで頂きたいなあ」

「そりゃ、結構珍しいとは思っけどね」と付け加えて、至って悠

長……基、のんびりとした調子に聞こえる様に喉から音を出す。

肯定はすれば、目の前の彼のペースに乗せられてどうなる事が考えたくはないし、そうかといって全力の否定は肯定と見なされるだろう。無言で通せば、彼に確信を与えてしまふ。多少、ズレた確信だけでも。

なら、私の取れる行動の中で一番、無難なモノで応戦するしかない。その際に焦りや深い思考は禁物、何処で暴かれるか解らないし、そんな事を思いながら彼の出方を待つ。

「人で 翡翠の髪も褐色の肌も多くは無いが、確かに居るだろうだが、その瞳は誰も持ちえぬ」

「赤に属する瞳はノヴェリアのみの固有色 だが、紅に連なる色は持たぬ」そう静かに続ける彼の言葉に、「で？」と抑揚無く返す。

「確かに、紅は居ないかも知れないが 他が居ないからと言われて決められても困る」

彼の言葉をぶった切って、話し始めた私を咎めるでもなく、静かに彼は見つめる。

「生物は進化するのだから、突然変異が「有り得ない」と言えないだろうに」

そう付け足して、パチンと指を弾く。

即座に彼の足元に展開される魔方陣、薄れる彼自身の輪郭を見送りながら呟く。

「面倒事は嫌いな」

術式に慌てる事も無く、彼はそのお綺麗な顔に笑みを浮かべる。
私はその笑みを訝しみながら肩眉を上げるが、彼は至極、愉しげな笑みのまま穏やかに言葉を紡ぐ。

「お前も、既に渦中だというのにな」

その言葉を残して、彼の姿は掻き消えた。

19 対話（後書き）

……今回は体勢的に如何わしい（？）部分もありましたが、全く持って艶とか色気とか甘さとかその他諸々はありませぬね。
この話で明らかですが、トーコさんは、異性とのスキンシップ（？）は苦手です。

感想やブログへの拍手ありがとうございます！
創作の活力になってます！ 多謝！！
日々、精進してやっていきたいと思えます。

・閑話・ ジチヨウ

「……言われんでも、わかつとるわ」

投げつけられた言葉に、いつもは出難い筈の方言で悪態に見えないアクタイを呟く。彼が居ただろう場所に視線を流した後、盛大な音を立ててベットに突っ伏した。

そんな私を慌てた様子で心配する黒玲に、片手を上げて大丈夫だ
という意思を伝える。

うん、コツチに来てまで面倒事なんて 無くていいと思う

ムコウより内容が格段グレードアップしてるなんて知りたくなく
ても 解る

解りたくねえつつに

等と脳内で悪態をつき、顔を埋めている枕に一頻り沈み込んだ後、
勢い良く身体を起こす。

「神様の阿保んだらあーっ こんな忙^{せわ}しない生活はいらんーっ」

「まあ、リヨーコだから、と言う気もしなくはないがな」

不意に脇から聞こえてきた穏やかなファルの声に、喚いている自
分が馬鹿みたいで、なんとも微妙な表情を浮かべる。

その表情に些か不憫に思ったのか、ファルはSDのまま私の頭へ
昇りよしよしと撫でてくれる。

「はぁ…… 強制的にあの人、転移させたけど……爆弾残された感

じ」

「障壁はいいとして、最後のはなあ」

「ムコウサンに敵認識、されマシタカネ？」

「だろうな」「でしようね」

「デスヨネー」

起き上がった上半身をまた枕に埋めて言葉を紡げば、ファルさんが顎に手を当てながら言う。イタイと解っていても続けて問いかけてしまうのは、どうしてなのだろうと思いつながら問いかければ、ダブルサウンドで返された。

半べそかきながら、自分でもその問いかけは愚問だと思う。

「だって、だって……他人^{ヒト}の血を見るのは嫌いなんだよう」

ぐずぐずと駄々を捏ねながら、ジタバタと足を忙しく動かす。そんな様子の私に、呆れた様な視線を向けて肩を竦めるのはファルサン、黒玲はいつの間にやら取り出したポットで紅茶もどき（コチラではアルレと言っらしい）を入れ、カップに注ぎ差し出してくれる。

「ありがとう」と礼を述べてカップを受け取り、行儀は悪いがベツトに寝転んだまま、肘を付き上半身だけまた起こしてアルレを啜る。

別にさー……自分が流血するのはいいのよ 自分がね

痛いのは確かに嫌だけど、半一過性だし 自分が我慢さえすればいい話だし、ね

……… 多分、他人が傷付いてもどうしようも出来ない自分が嫌なのよね

今は治癒させる事が出来るだろうけど、簡単には切り替えられない

なんて、子供じみて歪んだちやちな自尊心^{プライド}

彼女なら同じ行動をしたとして、思う感情や思考は違っただろうなあ

うん、素で「あの人怪我しちゃうじゃない」とか、そんな単純な理由でやりそう

つか、やるだろ

そして、それで巻き込まれても涙を流しても、最後には笑顔で乗り切るのよねえ

彼女と自分の思考の違いに鉛を飲み込んだ様に気分は下降する。

彼女になりたいワケじゃないと思いつながら、彼女の様になれない自分に不満を持つ、そんな自分に晒うしかない。

うつすらと浮かんだ笑みに、訝しげに二人は首を傾げるがその笑みを別の笑みで塗り潰して、何でもないフリを押し通す。訝しく思われても、彼らは私の心など知りえないと解っているから、何事も無かったようにカップに口を付ける。

自分は彼女の様に「キレイ」にはなれない

容姿も確かにそうだが、心という観点に置いて

そして、自分は変わろうとせずにただ羨み、妬む だけ

..... ああ、いけない 一つのまにか、思考がそれてしまった

薄暗く形の無い靄の様な悪感情を、秘密の小箱にギュツと押し込んでしっかりと鍵をかける。「私は私にしかねない」という言葉で。そして、鍵が壊れしまわぬ様に鎖を何重にも巻いていく「私は私と言う性格を気に入っている」という言葉を持って。

最後に、思考する事を放棄するのだ。それは、面倒臭がりという自分のスタンスで隠した自己防衛。

「まあ、コトが起こつてもどうにかなるでしょ 全力で逃げるだけだし」

そう呟き、「黒玲さん、もう一杯オカワリちょーだい」と続けてベットの脇にいる彼女に差し出す。黒玲はにこりと笑顔でポツトからカップに中身を注ぎ足す。

「リョーコがいいないいが、な」

私の様子に軽く溜息を付いたファルはそれだけを呟いて、「我にも」と黒玲に言うが「自分で淹れなさいませ」等と返され、いつもの口喧嘩へと身を投じていく。

そんな二人のやり取りを、穏やかにアルレを囁りながら眺めて癒される。

ゾクリ、と背を這い上がる悪寒に首を傾げるのはその数分後の事。

- 閑話 - ジチヨウ（後書き）

うだぐだトーコさんが抱えてるモノが出てくるだけで主線に関わりがないので、閑話扱いです（笑）。

一応、能力的にはチートな彼女ですが、精神的な部分は一般人（？）とほぼ変わりません。というよりは、白か黒かと言われれば斑の灰に分類される様な人間で書いていきたいと思っています。

まあ、善人にも悪人にもなれないドヘたれにどうぞお付き合います。

タイトルは色んな じちよう を含めて ジチヨウ となっております。

- 閑話 - 巫女姫のケネン（前書き）

やっとこ、団体さん達の名前が出てきました！
愛称なので、正式名称では御座いませんが（笑）

- 閑話 - 巫女姫のケネン

ザワリ、と空間が揺らぐ気配に周囲に緊張が走る。

少し離れた場所に浮かび上がるのは、緻密な術式が刻まれた《転移》の為の魔方阵。

本来なら、魔術師が複数掛りで無ければ展開する事が出来ない筈の術式。単体で扱える者が極、限られているモノ。そして、単体で扱えるのであればその術者は各国から引く手数多の人材となる。

それに加え、古代魔術である障壁とあれ程の術式を扱える方……惜しいですねえ

しかも、ディーヴァの方でしたし……

属していないとは考え憎いですが、出来ればご助力いただきたかったのですけれども

それも、無理なお話かもしれませんねえ等と、兄の彼への言動を思いながら軽く溜息をつく。その兄も魔術師殿の転移に巻き込まれに……いてしまい、私達は此処に留まらざるを得なかった。

己や兄と一応、単独で扱える術者に該当はするもののそう、やすやすと展開出来ない事は扱えるからこそ理解できる。それ故に、兄も彼に興味を持ったのだろうと思いを巡らせる。それ以外にも興味を引かれた点はあったのだろうが、兄ではないのでなんとも言えない。

兄様にも困ったもの

幾度目かの溜息を吐きおえれば、魔方阵に重なる様にハッキリした輪郭を描き兄が姿を現す。魔方阵は兄がしっかりと地に足を付けた瞬間、役目は終わったとばかりに霧散した。

「殿下、ご無事でっ」

護衛について下さっていたデイタ殿が安堵の表情ともに兄に駆け寄る。彼はこの密礼の中では一番の年長者であるから、何かあった時の気苦労は計り知れないのだろうなと思いつつながら彼と兄のやり取りを見守る。

「別に心配することもなからう デイタ」

「殿下の御身に何かあつてからでは遅いのですぞっ」

「大概の事はどうとでもなる」

「だから、それでは遅いとっ」

デイタ殿のお小言に、横柄に言葉を返している兄を見やりながら。デイタ殿には深く頭を下げたくなってしまう。

相変わらず我が道を行く兄に、後から軽く後頭部に拳が入る。良い音が鳴ったのは思い切りがよかったのだでしょうと思っておく。

デイタ殿は溜息を軽くついた後、後は任せたとでも言う様に口を閉じてしまわれた。

「サーリ、てめえの所為でジェド爺からお小言貰うのは俺らなんだ少しは考えろ」

「なら、お前も来ればよかっただろう？ ザジ」

「得体の知れない奴の、展開途中の術に突っ込んでいけるのはサーリぐらいだと思っけど？」

「僕もそう思います」

兄の後頭部に拳を入れたのは、兄の乳兄弟であり、兄の近衛を司るザジ。ザジに返す兄の言葉に、サラリと言うのは兄とザジの幼馴染であるルイエ。兄の補佐文官であるルイエは、穏やかな笑みで「術者が安定してなきや、何処に飛ばされるか解ったもんじやないのにねえ」と言葉を続ける。内容は危険なのに、その口調はのんびりとしていて、心配していたのかどうか些か怪しい所はある。そのルイエの言葉に追従する様に言葉を口にのせ、うんうんと横で盛大に首を縦に振っているのはザジの補佐を担当するクイフト。

「しかし、まあ……転移の術に障壁そして、あの術式なかなかの大作物ようですね 彼は」

兄達のいつも通り過ぎる様子に呆れた視線を向けていれば、すぐ傍でそんな言葉が降ってくる。そう言ったのは私の側近であり、副神官長の名を掲げるナーザ。副神官長という役職の通り、彼もまた私と同じく《デイーヴァ視る者》であり、術にも長けた魔術師でもある。

その彼が大物と称するのだから、先程の古代魔術師であろう彼は並々ならぬ《力》か《技量》の持ち主なのだろう。マイリアウスアデプトゥス

それに……

「それに、やけに精霊達に好かれて……いえ、それとは少し違うよ
うな」

そう、確かに彼は至極、精霊に好かれていた
デイーヴァ

視る者は基本的に精霊に好かれやすい、それは相互扶助という関係があるからなのだが、デイーヴァ視る者が瀕死でもそれを助ける、という事まではしない筈

精霊は基本的には気まぐれで、人とは相互扶助の關係の為に関与しているだけだ

まあ、たまに個人を深く気に入れば守護精霊として《誓約》ちげいを行い、《護る》けれどそれは個精霊の意思であり、精霊全体の意思ではない

あの時、あの場にいた精霊達は兄に剣を向けられた彼の身を心配していた……そして、剣を向けた兄を排除しようとした

ただ、排除しようとした意思是途中で霧散したようだけど

多くの火精霊アークウルが兄に牙を剥こうとしたのは事実、普通の精霊と人の関係では其処まで密ではない筈なのに

まるで、精霊達は彼と共にある事に嬉々としているようにも見えた………まさか、ね

言葉を途中で止め、思考に耽ってしまった私にナーザが問いかける。

「ナフィ様、何か気になる事でも？」

「いえ、多分 私の気のせいだと」

ゆるりと首を横に振り、否定の意を告げ兄に視線を向ける。

視線を感じたのか兄はザジ達との遣り取りを置いて、私の方へと向き直る。

「例え、兄様と言えど勝手はご遠慮いただけませんか？」

「ふむ、守備よく終わらせただけではないか」

「無関係な方を巻き込んだというのに、それですか」

「アレは、自分で突っ込んでいったように思うがな」

最後の言葉とその表情に浮かぶ愉しげな笑みに、ゾクリと肌が泡立つ。

兄が大概、至極愉しげに笑うその理由は、兄にとって「面白いモノ」が見つかったからである。

ザジやクイフト、ディタ殿も兄の久々の愉しげな笑みに動きを止めている。ルイエやナーガはどちらかというと、微笑ましげ（楽しそう）に兄を見ている。

この兄を穏やかに見ていられるのは、陛下も含めて3人だけだと思っ

妹としては、毎日何かに飽いている様な餓えている様な兄の楽しげな様子は、嬉しい事この上ないのだけれども、その面白い「モノ」と兄に認識された方への心配の方が先に立つ。

何故なら、兄は認識した対象を弄り倒す癖があるのだ……本人は気づいているのか、いないのかは定かではないけれども。多分、氣付いてはいる筈だが、改める氣は本人には一切ないだろう。

兄が見つけてきた優秀な護衛官は、数日間でげっそりと別人に見紛ぐらいまで、囊れてしまった事があるくらいである。幼い頃の私も対象だったのだから、よく覚えている……あの恐怖を。兄にとっては自分の好きな「モノ」への愛情表現なのでしょうけれども、愛情表現としてはかなり屈折しているのは困ったモノである。

私には、兄の対象となってしまうた彼の無事を祈るしか出来ないが、こんな時にふと思ってしまうのである。

兄様が恋する方は、どうなってしまうのでしょうか？

降って湧いた、疑問にふると勢い良く首を振り、考えなかった事にしておく。

このまま、この場に長居をするわけにもいかず、皆に城へと帰る胸を告げ、転移の術を展開した。

- 閑話 - 巫女姫のケネン（後書き）

団体さんの中での良心である、巫女姫視点でした。

タイトルからしてネタばれ（？）ですが、まあ周知の事実ですのでタイトルは赦してやって下さい。

巫女姫や皇子の周囲はこのメンバーがスタンダードです。

ディタさんは……入ったり入らなかったりですが、ザジとルイエとナーザはセットです。クイフトは弄られっ子です（多分）。

いつか、彼らの外見とかどこかで出せたら……いいなあ。

人物紹介 - 第一章まで - (前書き)

3ヶ月以上の放置すみません。
また少しずつ、進めて行きたいと思います。

人物紹介 - 第一章まで -

以下、簡易的な主要紹介デス。

他の人物達はまた後日紹介させていただきたいと思います。

現在は話上、主人公が理解している所 + α で書いてますので、追記が増えましたら

後々まとめなおして、後日掲載させていただく予定デス。

では、数人(?)分ですが読んで頂けたら幸いです > (| |)
< ペコリ

【自称、巻き込まれ型人間 苦労性主人公】

水江 亨子(みずえ りょうこ) 死亡年齢19歳 通称：トー

コさん、リョーコ

アイオン登録名：トール ランク：紫(現在)

友人(御巫 百合)を助けようとして死亡。

その後、元いた世界での自分の痕跡全て消し、友人と共に滅びに向かう世界・ファルディカーレ・

にて、仮初めの生を得る。

世界を渡った際、その世界に バシレース・ニユス と定められる。

本人の性格としては面倒臭がり、面倒なモノからは全力で逃げる。
(しかし、結局は渦中)

興味を持たないモノには本当に無関心(人も含む)、ただ関心を

持てば嫌がりながらも関わる。

【他称、巻き込み型人間 ヒロイン】

御巫 百合（みかなぎ ゆり） 現年齢19歳 通称：百合さん
神の采配により、異世界の聖女となる為に事故にあつた女性。

とてつもない美人で漆黒の髪と漆黒の瞳が印象的、身長は女性にしては高め。

亨子曰く、お人好し天然ドジッコトラブルメーカー属性。

困っている人は放って置けない、人の為なら無茶だつてするお方。

【危機感皆無（？）ワンコ属性 サポーター】

世界（ファルディカーレ） 呼称：ファル、ファルディカーレ
亨子をバシレースと定めた世界の意志。

ド派手な外見をしており、翡翠の髪に薔薇色の瞳そして褐色の肌の人型をとる。

バシレース大好き。リョーコに構ってもらえると嬉しいらしい。

イヌ科属性（大型犬）

知識的にはオトナ以上だが、

性格は今まで3人のバシレースとしか深く関わったことが無い為、
結構子供っぽい。

【主絶対主義口リっこ属性 守護者】

黒玲（こくれい） 現年齢：不明 呼称：黒玲

和弓に似た黒弓の気性。 2代目バシレースに創造された、主人
公専用武器。

主人公以外に扱われるのを良しとせず、不名誉ながら【厄】付きの名を付けられるが

無事、主人公の手に渡り、名も付けられ現在は満足気。

主と2代目を盲目的に親愛しており、それ故に世界と壮絶な口喧^{バト}嘩を繰り広げる。

顕現すれば、真白の肌に黒銀の艶やかな髪、美しい薄金の瞳を持つ少女の姿をとる。

創造されてから長い年月を経ているので、顕現の姿と実際の年齢は一緒にしてはいけない。

護衛から簡易的なメイドの仕事もこなす、万能幼女。

嫌いなモノは、2代目を貶す者と主に無礼を働くモノ。

【腹黒策士二面属性 王太子】

カリスフェイド・アルク・セレファン 現年齢24歳 呼称：カリス、王太子

セレファン神聖国の王位第一継承者であり、国を支える機関の一つである教会の

神官長を勤める。

銀髪に深い蒼の瞳を持つ、顔立ちの整った美青年で一見穏やかそうに見えるが見えるだけ。

王族だがその事実を隠し、身一つで教会内の上層部に食い込んだ猛者でもあるのは、余談。

聖女であるユリに惹かれている。

頭脳労働者（術師）であるが、剣の腕前はなかなかのモノ。

人物紹介 - 第一章まで - (後書き)

以上、人物紹介でした。

まだまだその他人物ゾロゾロと出てくる予定ですが、本文どうぞお付き合います。

修正履歴

H 2 2	・ 1 2	・ 0 6	・	主人公項目一部追加
H 2 2	・ 1 2	・ 1 6	・	画像追加
H 2 3	・ 0 3	・ 2 2	・	画像撤去

20 次に目指すモノ（前書き）

本文は久しぶりの更新 大変申し訳ございません。
ここから、舞台は別国へと移り変わります。

読んで下さる方々本当にありがとうございます。

20 次を目指すモノ

「今更なんだけど、忌石ってどういうモノなわけ？」

つい、数日前にお偉いさん方に巻き込まれた時とは打って変わったような、まったりした日を現在進行形で私は満喫している。

ああ、ベットでゴロゴロって至福

あの日、あのままカ斯塔フに長居するワケにもいかず、夜の間に荷造りをすませて朝一番で町を後にした。

カ斯塔フからアシャステア連邦共和国への関所までは、馬車で最低でも2日かかるらしい道のりだったのだが。森に住む鹿さん（もどき）をチャーターさせて頂き、夕刻あたりにはアイオンの証を見せて通過。

鹿さん（もどき）・・・面倒なので、鹿さんで話を進めるとする
健脚具合にはかなり驚いたんだけど、どうやら脚の速さと持久力に優れている種なんだそう

あまり、人とは関わらないのだそうですが、いやはやバシレースは別格だそうです

夜に移動しても良かったんだけど、悪目立ちを避けて関所内で夜を明かし、また早朝に次の村まで移動。その間にも他の動物さんにお世話に成りつつ、村に着けばまた次の村へを何度か繰り返し、どうにかアイオンの支店のある、今の滞在町 ライール に到着したワケです。

現在はアイオンのライール支店で紹介して貰った、ウィークリーパックを適用した宿屋の一室を借り受けている。

ちなみに、ウィークリーパックとは一週間宿の一室を借りる契約の事をただ私がそう呼んでいるだけでそう言ったパック名はない。アイオンの割引プラス契約で、結構なお値段勉強して頂いているのでパックと称しても、あながち間違っていないだろう。

まあ、その分宿屋の緊急時お手伝いが契約内容に入っているんだけども

比較として上げるのであれば、一泊二食付きで大体今までの宿は1ファンズ+3〜5ファン位だったわけですよ。一週間で最低でも9ファンズ+αファン必要になる計算である。でも、このパック適用+アイオンの割引を適用できるとファンズコイン7枚で収まる格安っぷり！

まあ、日本円に換算すると大した差ではない様な気もするけど・
・そこは、置いておこう
何分節約するには越したことは無い

国境を越えたので通貨も使えないかなと危惧したものの、アイオンと提携しているだけあって宿の支払いは今までの通貨でも行えた。ただ、他の店ではそうも行かないだろうし、もうそろそろ手持ちも心もなくなってきたのもあり、明日あたりアイオンで依頼を探そうと脳内で予定を組む。

その際に、あまり魔力を使うモノは避ける必要性があるなあ

なんて、事を思いながら少し遠い目をしたくなる。どうもあの山

での一件以来、あの変質した触手に探されてるようなのである。

マントで魔力自体持ち合わせていない様に見せかけているし、探されてると分かった時点で自身にもそう言った術式を施したので、見つかる筈は無いと思うのだが面倒である事に変わりはない。マントだけでもさっくりとスルーされたんで、大丈夫だと確信はしている。

しかし、忌石で変質しているとはいえ、しつこい

等と思考し、ふと思ったことが口から零れた。

そして、冒頭へと戻るのである。

「どういうモノ、とはどういうことだ？」

暢気にお茶をすすりながら、ファルはコテリと首を傾げてみせる。私も身体を起こし、黒玲の淹れてくれたお茶の入っているカップに口をつけながら、聞きたい内容を示す語彙を纏めていく。

「んー 瘴気によって害を与えるモノなのは理解してる けど、忌石ってどういった形態でこの世界に散ってるのかなあって思ってたさ」

熊さん事件と先日 の件、同じ忌石によって引き起こされたモノの筈・・・なのに、様相はかなり異なってたじゃない？なんて、続けながら黒玲がサイドテーブルに置いてくれたクッキー（もどき）に手を伸ばす。

同じ様にクッキー（もどき・・・面倒なので略、クッキーを食べようとサイドテーブルに飛び降りると、いそいそとクッキーに手を伸ばすファルを黒玲が麗しい笑顔で「ファルディカーレ、主の質問に

お答えなさい」と言いながら、容赦なく叩き潰す。

フギユツとか、ぶちつとか、聞こえた見事な音は聞かなかったフリをしておこう

所々、ぺしゃんこになりながらファルは黒玲に噛み付きそうになるのを我慢しつつ、「そういうことか」と言葉を紡ぐ。半分涙目になっている彼の口に割ったクッキーの欠片をいれてやれば、うまうまと顔を綻ばせ咀嚼する。

「忌石というのはその本体は石だ」

それは知っているよな、と確認を取られたので然りと頷く。動作の確認をし、彼も頷けば続けて口を開く。

「だが、その大きさ周囲の環境において、様々な変質を引き起こし被害を拡大させる」

真剣な光をその薔薇色の瞳に浮かべながら、目の前の彼は彼自身を蝕む【忌石】について語った。

ざっくりと脳内で、忌石について纏めてみる事にする

【忌石】とは、石の大きさよって汚染範囲、変質状況は変わる
ただし、欠片でも強い瘴気を持ち変質力が半端ないモノも極少数
だが存在すること

基本的には小指の先程のサイズであれば、基本的には動植物の造

りを変質させるまでには至らない

浄化の能力を持った、この世界の人間でも対処は出来る範疇

大体は熊さん事件の様な惨状（瘴気で植物が枯れ、大地が汚染され、動物が狂わされる）に至る

動植物が何らかの理由で取り込んだ場合（体内に忌石があるとする）は、

また状況がかわるらしいが減多にないので割愛

（本能的に事故でない限りは、動植物も忌石を取り込んだりはしないそうだ）

ただ、大きな塊などになると状況が変わってくる

まずは、周囲の環境をベースに変質のバージョンが増える

例とするならば森であれば、傍にある植物や動物を変質させ作り変えてしまう

こちらに関連するのが先日根っこにあたる

変質した動植物に関しては攻撃系魔法や巫女姫が使っていた浄化系で対処は出来るが、

忌石自体に影響を与える事は出来ない

それ故に、変質したモノをどれだけ切り伏せても、浄化しても意味がない

本体を浄化しなければ、瘴気は無尽蔵に垂れ流され傍にあるモノ全てを変質させていくという悪循環

森に住む動植物ならばまだ、場所さえ特定出来れば防衛策を練る事が出来る

だが、塊がヒトの手に渡ればどうなるのか分からないのが現状だそう

ヒトを変質させる場合もあれば、ヒトの負の感情を増徴させる場合など様々な事が起こりうる

鉱石の類と間違われて、ヒトの手に渡ってしまう場合があるそう

忌石個々で影響が明らかになる速度が異なるのも、渡ってしまう要因の一つだそう

なんて、厄介な！

影響の出始めを【萌芽（ほうが）】と呼ぶらしい、へえ×2

大きな塊を浄化し、忌石から希石に転化させることが出来るのは
エルビス聖女のみと言われている

ちなみに此处で言う【希石^{きせき}】は身体能力や魔力等を向上させたり、
精霊の加護を所持者に守護として与えられる石を指す

以上、今現在私が把握できた内容である

「と、いうことは あの根っこはヒトの手元にある【忌石】が起こした変質？」

「だろうな、あそこまで襲う人間を特定している場合はそう考えて間違いないだろう」

「じゃあ、何で私は狙われているのだろうねえ」

先日の根っこはどうも手強い（？）相手と認識し、溜息溢しながらそんな事を呟けば、ファルは「うむ」なんて一頷きしてから言葉を紡ぐ。

「リョーコが最後に行った攻撃が、持ち主に認識されてしまったからだろうな」

「・・・何で私だけ認識されてんの ザクザク攻撃してたじゃない、あのオニーサンが」

「ヤツは元から対象だ 憶測だが、リョーコの最後の攻撃は持ち主または忌石に少なからず、余波を与えたんだろう」

まあ、邪魔をした上で本体へ攻撃を加えたのだから仕方なからう、なんてのんびりと言ってくれちゃうファルに恨みがましい視線を向ける。しかし、彼は気にも留めずお茶を啜る。

「私が狙われてても良いと」

「今の状況では、アレはリョーコを見つけられん」

剥れた調子で問いかければ、さらりと言葉が帰ってくる。断定される嬉しいんだか、そうでないんだかとても微妙な心中である。

「延々と追い回されるのは趣味じゃないんだけど」

「なら、本体を叩けばいい」

「簡単に言ってくれるよねえ」

胡乱な目をしながら溜息と共に言葉を溢せば、「それがリョーコに出来ぬなら、言わぬ」何て言われる。棒読みで「ソウデスネ」と返す。

不本意ながら次の目的は決まった、ならば動かない道理はない

そして、私は平穩って何処にあるのかしらねー？等と呟きを溢すのだった。

20 次に目指すモノ（後書き）

狙われながらの生活なんて耐えられない主人公でした。
そして、自分から足を突っ込んでしまうという。

主人公は本人認めませんが、厄介事招来体質の氣があります。（き
つと）

それでは、今回もお付き合いありがとうございました！

修正履歴

H22・12・09・文章一部修正

21 先立つモノ

似ている所などなければ、この胸が締め付けられる事もないのに

そんな栓ない事を思いながら、青く晴れ渡った空を見上げる。何処までも続く蒼天は、ムコウと変わらず頭上に在る。流れる雲も見慣れた白い色。空だけ見上げていれば、見慣れたものである。

まあ、たまに視界に入る巨大な影は横に置いておくとする

視点を空から、目の前へと降ろせば視界一杯に広がるのは、鬱蒼と緑生い茂る密林。^{アマゾン}

うん、巨大蛇とか出てきそうだ

そんな事を思いながら、止めていた足を動かし草木を掻き分ける。次の目標が決まったのに何故、密林なのか。答えは至極簡単、先立つものがなければ動けない。と、いう現実問題に直面したからである。ならば、稼げばいいじゃないを合言葉に現在、私は依頼遂行の真つ最中である。

そんな事でもない限り、こんな奥深そうな密林には入る気はない。好奇心に駆られて、自分をいじめる趣味も私には無い。

と、いつても既に依頼はこなし終わった後で現在は帰途の途中となる。そう、急ぐこともない為、ファルと黒玲の植物講座を聞きながらまったりと歩いている。何分、私に襲い掛かってくるのはヒトか忌石に狂わされた動物だけなので、野生の動物を警戒しなくて良い分楽をさせて貰っているなあとシミジミ思うのである。

前者の場合は、身体強化した上での全速力で逃げる予定であるし、後者であれば、チャクツと掃ってササツと忌石を回収する予定であるのは言うまでもない。

戦闘はご遠慮願いたく思いマスデスヨ、私は善良な一般人ーっ！
！！

《一般人？》

心中の大絶叫にファルが首を右に傾ける、黒玲も聞こえていたのか彼と同じ様な仕草を行う。

特に聞かれても問題はない、というよりは気を張っていないと大絶叫の類はこの二人には駄々漏れらしい。無意識に気を張っていたり警戒していたりすると漏れないもとい、聞こえないとの事。

気を抜いている時に聞こえないようにする場合、常に意識する事を心がけなければならないのは実証済みである。

意識し続けるって大変

まあ、二人が言うには駄々漏れと言っても、常々の思考が聞こえるワケではないし、絶叫している内容が聞こえるのはファルと黒玲だけとの事。精霊達には、大まかな喜怒哀楽の分類ぐらいしか認識出来ないから、気にするなどは言われた。

気をつけるに越した事はないので、日々精進したいと思います。
そんな事を思いながら、ファル達への【一般人】の単語の解説に入る。

「一般人って言うのは、ムコウの世界で人の中でも特別な身分ないし地位を持たない人間の事を指すのデス」

ここで説明すべきは、人の中だと添えておく事である。ここで、添えておかねば確實自分は一般人ではないという言葉を受けそうなので。

実は、説明で省いた部分もある事を此処にコソツと記しておく。本来なら地位の後に「或る事に特別に関係していない」という言葉が入る筈だったのだが、コレを入れると自分を自分で一般人と言えなくなるので、記憶の闇に粉々に砕いて埋めて置く事にする。

自覚はしているが、他に言われたくないので自己防衛である。

自己防衛大事！

周囲にヒトがいないという事もあって、声に出して説明を行えば二人から「ふうん」や「そうなのですね」なんて言葉が返ってくる。

その間にも黙々と足を進めて、この密林から出ようと努力はしている。例え、ソレが途中で忌石の影響で狂った猪もどきに突っ込んでこられたり、貴重な医療用の植物の採集や甘味ゲットの為に横道にそれたとしても。

敢えて、努力はしていると私は言おう

なんだかんだと、密林を抜けライールに戻ってきた時には、受けた採集依頼3件プラス討伐2件と採集1件の計6件をこなしていた。

疲れたと思ったら、そら疲れるわな

討伐対象の動物さん達は勿の論、忌石に因る被害者なので殺す事無く瘴気を掃って密林の奥にお帰り頂きました。アイオンに依頼取

り下げ交渉用に、牙や爪等を回収させて頂いた事を追記しておく。
交渉が終ればアイオンが武具や防具、道具に使えるのであれば、
買い取ってくれるので有り難く買い取って貰う予定である。

当然、彼らに案内してもらって、忌石は瘴気を一掃して懐にイン。
ちっこい忌石がジャラジャラと溜まっていくのが今後、予想される。

別に量が多くなる事は気にしないが、何かに再利用出来ないかな
ー？とか、思いながらアイオンのカウンターにて依頼の完遂を告げ
る。そして、マントの中から依頼内容の採集植物を提出し、確認処
理が終れば受けてはいないが処理を済ませてしまった依頼の処理を
お願いする。

確認の手続きに多少の時間を要するが、待つのは苦手ではないの
でそこそこの時間をかけて処理を受領され、部位を買い取って頂き
アイオンを後にする。

《トール》

脳内にファルの声が響く。その声に心中で「うん」と頷く。素早
く手渡された稼ぎをマントのうちへ、ポイツと入れてしまう。

なんせ、後ろからなんとも微妙な気配の方々がくっついてきてい
るのを認識したからである。どうやら、アイオンで処理を待ってい
る間に目を付けられたようだ。

人の努力を横から掠め取ろうとする人間は、世界が変わってもい
るらしい。

働かざる者、食うべからずっていうのにねー

心中で思いながら、軽く溜息を吐く。真面目に相手をしては疲れ
るだけなので此処はサクッと術で逃げてしまうに限る。自分がかけ
る手間は最小限に、そして効果は最大限に。

暴力はんたーい

無詠唱にて魔術仕様を隠す為の術と平行し、後をつけてくる害意ある者には幻術をかけ、細い裏路地へと誘導する。その間に、裏路地とは反対側の人気の無い場所へと歩を進め、近くに人や何らかの術関係の気配が無いかを探り、転移魔術を展開する。

向かいの路地から、だみ声の悲鳴が響いたがそこは聞こえなかったフリを決め込む。

まあ、二度とこんな事をしない程度にはトラウマになればいいと思う

うん、善良な一般人に手をだしちゃいけないよ 不幸になりたくないならね

なんて事を思いながら、宿屋の裏手に到着したのだった。

悲鳴を聞きつけて駆けつけた警邏がみたのは、誰もいない虚空に土下座しながら謝り続ける男達の姿だった事は余談である。

21 先立つモノ（後書き）

いつの間にやら、お気に入りの件数が凄いことに（あわあわ）
読んで下さってありがとうございます（平伏）

ブログを引越しまして、web拍手追加してみました。
いつか、web拍手に主人公達の絵を上げるんだ。（死亡フラグ的
な何か）

22 ふりかえるモノ

あれ、そういえば城からトンスラこいてわりと経つけど百合さんはどうしてんだろ？

そんな事を思いながら、本日は泊めて頂いている宿屋のお手伝いをしております。

と、言っても裏方でザクザクと野菜を切ったり皿を洗ったり、ヒトが出た後の部屋の洗濯モノの回収にベッドメイキングや掃除したりとかですが。

特にベットメイキングは中学の時の職業体験が役立ってびっくりだし、しかも、おかみさんに褒められた やっほい

後は、薪割りだったり小枝を集めたり、結構古典的な事をしてたり水場の掃除をしたりしていたワケなのですよ。基本的にはやらなければいけない事は山積なので、冒頭の思考は記憶の彼方に流されていってしまったのは内緒の話である。

コチラの世界はムコウと比べて、一部生活水準が高かったり（魔法魔術に因る）以外に低い所もあったり（コレは薪割りとか）と比べる基準が違いすぎるので、一概にどうこうは言えない。

それに、専門の知識があるわけではないので、詳しくどうこうなんてムリムリ

ただ、一般水準は印象的にわりと低めに感じるのは、私の主観である。ただ、水周りの設備はしっかりしてるので、そこは安心。さ

すがに、お風呂のない生活はちょっと遠慮願いたいと思うのは日本人なら分かってくれると信じてる！多分。

そして、いつの間にやら宿を手伝っている間に陽は沈み、深い闇が全てを覆い隠す。

深い色をした空の波間に見える、恒星達を見上げてしみじみとこ
ういう所も似てるんだなあなんてシミジミと呟けば、郷愁にかられ
る。

ムコウから離れて、一ヶ月経つか経たないかぐらいよねえ
一人暮らしとかは、嬉々として過ごしてたんだけどなあ

恋しく思うのは致し方ないとも思う、もう戻れないのも理解はし
ている・・・自覚しているのかは、微妙なラインだけれども。ムコ
ウとコチラは大きく異なるのに、ふと視界に入るモノが良く似てい
てそれでも、やはり違って。記憶の中にしか、もうない世界に還り
たくなる。

ああ、こっちの月は二つもあるんだ

頬を伝いそうになる涙を溢すまいと顔をあげれば、見慣れた夜空
に浮かぶ見慣れない二つの月が目に入る。アレらを月と言ってもい
いのか多少迷うが、気にしない方向性で「月」なのだと思っておく
事にする。

今までは、生きるのに・・・行動する事に必死だったから、月な
んでじっくりと見なかったのでよくよく観察してみる。遠近法的に
手前に存在する月は、濃い茶色にミルクを垂らしたかの様なマーブ
ル色。なんとというか、木星とか土星とか言われても納得出来そうな
色である。その月の奥、手前の月よりは二回りか三回り程小さく見
える月は碧白い。漢字からも推測して頂けると思うが、空の青では

なく海の碧、青に緑を混ぜた色合いである。

どっちにしろ、月らしくない色ねえ

あまりのムコウとの違いに涙も流せないし、郷愁もどこぞへ吹っ飛んでしまうその色合いに、ちよつと遠い目をしながら溜息を吐く。結局はシリアスになりきれない自分を心中で嘲笑いながら、窓辺から離れる。

「リョーコ」

心配気な色を湛えた声音が背後から聞こえ、その声の方へと身体を向ける。

「んー？」

「寂しいのか」

間延びした声で呼びかけに応えれば、真剣な瞳をしたファルが静かに言葉を紡ぐ。黒玲もその後で心配気に、アルレをのせた盆を持ちながらコチラを見ている。その二人の様子に、苦笑を浮かべながら「かもね」とだけ言葉を返す。

慰めようとファルがいつの間にか肩の上に移動しており、小さく柔らかな手が私の頬に触れる。その温もりに、いつの間にか詰めていた息を静かに吐き出す。

「リョーコが居なくなるその時まで、我らは其方を独りにはさせぬ」

静かに紡がれた言葉に、空を彷徨っていた視線を彼へと向ける。

「ファルも黒玲も、私が期限付きなの知ってたのね」

「コレでも 世界 だからな、死神から話は聞いておる」

「私もファネス様の視た事を聞いております故、ある程度の事は存じております」

二人の言葉を聞いて、それもそうかとも思う。ミユケーさんが二代目様が私の今後のケアをファル達に頼んでくれたのかな？何て、脳裏にちらりと過ぎれば、ソレに気づいたのか。ファルは真摯な光をその目に宿して言葉を紡ぐ。

「我らを見くびるな、たかだか死神言われたぐらいで動くと思うな」

「我らにも意思があり、選り取る権利がある リョーコ、其方の傍にいた事を我らは選んだ・・・その意味を間違つて捉えてくれるな」そう深々と降り積もる雪の様に静かにそれでも確実に彼の声は彼らの思いを紡ぐ。

「我らはリョーコを好きだからこそ、この場にいるのだ」

そう、続けられた言葉に、緩く静かに息を吐き出し言葉を返す。

「ありがとう、そしてゴメン」

「最後の一言は余計だ」なんて言うファルと、いつの間にか盆をサイドテーブルに置いて傍で片手を握ってくれている黒玲を強く抱きしめる。零れる透明な雫を見られないように、強く 強く。

「んで、改めて その時まで宜しく、二人とも」

その声が、微かに震えていた事は三人の秘密となった。

22 ふりかえるモノ（後書き）

ちよいとしんみり。

でも、次の日には復活するそれがトーコさんくおりにいー

23 滞るモノ

はてさて、七日あつた筈がいつのまにやら後一日。

この数日のあいまにちよつぱりしんみりしつつ、ある程度の先立つモノは貯めたので、動けるには動けるのだが、

あの根っこをどうしたものかで現在、頭を捻っている つもりである。

頭脳労働は担当じゃないのよねえ

私は、ペーパーの下っ端でいたいになあ

等と、思いながら思考を巡らせつつ、折り畳んだマントから財布代わりの袱紗^{ふくさ}らしきモノと黒に染められた、手触りの良い布の巾着を取り出す。巾着を取り出す際に、中に入っているモノ同士が擦れて金属音のような鈍い音を立てる。

どれだけ貯めたのか確認していなかったので、考えるついでに勘定でもしようかなとか、頭の片隅で思っていたりするワケである。

考えるお題は”どうやってあの根っこの変質原因もとい、忌石の塊の元へ行くか？”なのだけれども、お題がやたら長いのは気にしないで頂ければ幸いです。

まずは、根っここと遭遇するコトが第一になるのだが、遭遇したからと言って忌石の場所が分かるわけでもない。あの根が「捕縛」を目的としているのであればいざ知らず、あれは「抹殺」を目的としている。

「忌石が何処にあるか、指し示すモノだ」
「・・・そんなのが在ったのね　くそう、複製コピーしてくりゃよかった
っ」

悔しげにペッドを力一杯叩くフリをしながら、　自分のド阿呆お
おおおおっ　なんて心中で絶叫しつつ、シクシクという泣きに移
行する。その様子に、再度フアルは呆れた視線を私へと向ける。

因みに、複製はその名の通り”モノ”を複製する魔法である。

勿論、この世界にもその意図の術は存在して　は　いる。正し、
半端なく術者の技量を問われる術の一つであるが。複製の術自体、
取り扱える術者も少ない上に本物と全く同じモノオリジナルを複製しようとす
るのであれば、本人の力の量、想像力、構成力、精神力その他諸々
を必要とする。

複製したいモノにも因るが、特殊な効果や効力、能力等を秘めた
モノを複製するとなれば、その複製にかかる負担は格段に跳ね上が
る。しかも、下手をすれば廃人一直線を辿れるとの噂までくつつい
ている。

それが、この世界での複製術の認識である。

本来ならば軽々しく言える術ではないのだが、現在の立場、己の
能力を鑑みれば以外に容易かったりする。しかし、この世界の術で
は無駄な部分・・・というか、術の過程が面倒な為に独自呪文オリジナルスぺルとい
う形で複製という術を扱っている。

ぶっちゃけてしまえば、呪文すら唱えない為スぺルともいえない
のだけでも、そこは置いておこう。

「まあ、一番近くに存在するモノの場所を指すのだから」
「あ、やっぱいらんです」

彼のあっさりとした一言に、掌を返すかのように言葉を返せば「
そうだろうな」という同意が返ってきた。一番近いモノからって・
・手当たり次第浄化しなきゃいけない聖女だから使えるモノであっ
て、私はいらんわあ等と思う。

私としては、今現在叩きたいのはあの根っこの忌石であって、一
番近い忌石ではないのだから。

「つか、ホントどうしようかなあ・・・この件に関わるって事は、
あの人達に遭遇する可能性があるって事だしなあ」

かーなーりっ（結構前の何処ぞのライダーなノリでどぞ）、面倒
だとかそんな事を思いながら一番安価な通貨である、灰色のシン硬
貨を積み重ねる。気分はちょっと、賽の河原である。

「だが、邪魔なのだろう？」

「邪魔というよりは、うざい」

素で言い放った言葉に、「リョーコ様、口が悪いですよ」なんて
黒玲に窘められる。その言葉に「はい」と素直に返しながらも、
特に直す事はしない。ソレをわかっているのか黒玲はただただ、苦
笑を浮かべる。

「無意識の術展開があるとは言え、いつ何時不測の事態があるか分
からないしねえ」

術が使用できなければ、私はあの根に串刺しにされて殺されるの
が予測出来るし、逃げ延びたとしても何処までもあの根は追って来
るだろう。

二度も殺される・・・と、言うてはなんだけれども、死というモ

ノを軽々経験したくもないワケで。その事態を誘発しそんなモノは排除しておくに限る。

まあ、うん 正当ばーえー セーとーばーえー

等と自身を納得させるように思考し、頷く。その様子にファルも黒玲も首を傾げるが、「なんでもない」と返しておけば深くつつく気もないのかあっさりと引き下がってくれる。やはり、持つべきは理解力のある友人である、等と思ったのは追記にしておく。

「では、やはり 対処なされるので？」

静かに問いかけてくる黒玲に「そう、なるかな？」なんて返しなから、選り分けた紙幣を袱紗の中へとしまっていく。出来れば、紙幣の種類事に分けたいんだけどなあ・・・今度布でも買って作ってみようかな、なんて事を考えながら言葉を紡ぐ。

「彼らに対処するまで待つてるなんて程、気長じゃないしねえ」

他人事ならいつまでも待つてる自信はあれど、他人事じゃないし。そんな事を思いながら、心中で溜息を深々とつく。黒玲はそんな私に、お茶と茶菓子を出しながら「どうなされるおつもりですか？」と問いかけてくる。

上記の話でいけば、今は手詰まりの状態なワケだが。差し出された茶菓子を口に運びつつ、一応思考してみる。そして、気付くのだ。

「無いなら、作ればいいじゃない」

パンが無いなら、お菓子を食えばいいじゃない的なノリでポソツと呟く。この世界の一般人ならぎよっとする事だろうが、周り

にいるのは世界と気性。何にせよ、規格外ばかりである。

「ああ、その手があつたな」
「ですわね」

何分人との付き合いが薄い二人は、その手があつたか・・・なんて納得している。普通にツツコミなだったので、さっくり話が進む分至極楽である。

そつすね、二人とも私と関わつてなければ放置ですもんね。

なんて事を思いながら、いそいそと袱紗と小袋をマントへとしまい、羅針盤モドキを作る為の準備を始めるのだった。

ちなみに、余談ですが。

現在の所持金は

セレファン硬貨、残金5セレと12フアンズと86フアン

アシャステーア紙貨幣が3ツエア、85ツエド、102ツエン、
179シンズ、473シンとなります。

ツエア、ツエド、ツエンは紙幣 シンズ、シンは硬貨に分けられます。

因みに、金額的比較は ツエア>>>ツエド>>ツエン>シンズ>シン な感じです。

生活を行う上では硬貨2種と紙幣1種で事足り、たまに大きな買い物をする時に必要な感じらしい。日本円との対比は面倒なので割愛いたします。

一応、今回は5日間ほどみっちり働いたので荒稼ぎの意気です。採取に行ったら、希少有用植物や鉱石などがゴロゴロ発見できたのでアイオンに売ったり、武具屋さんに買取してもらったりして貯め

ましたとも。

まあ、武具屋さんが涙目だったりとかしたのはなんででせうねえ？

23 滞るモノ（後書き）

今年ももうそろそろ、終わりですね。
皆様、良いお年を。

24 ソウサクするモノ

息を吸い込み、静かに吐き出す。ソレを、繰り返す音だけが耳に届く。

目を閉じて、神経を集中させる。今から行う作業を他の誰かに悟られぬように、二重三重と複数種の結界を展開していく。視覚として認識できない力の膜が部屋を覆い、空間を仕切る。部屋が隔離されるというムコウでの非日常な事象を体感し、口元は満足気に笑みを模る。

これぐらい、しておけば平気かな？

今から行うのは無から有を生み出す事象、万が一にも他に影響を与えるワケにはいかないと考えた末での、防衛措置。ファルには「用心しすぎだ」などと言われたが、用心するに越したことはない。

物事は何処で繋がり連鎖するのか、人の身では把握しにくいのだから
把握したくも無いけれど

心を決めて、意識を何も持たない手の内へ向ける。両の手で、上から何かを受けるかのようにお椀を模る。

その内は、空ろ（うつろ）。

その空ろに『在る』というイメージを付加する。補正のお陰か、

細部の指示はなくとも脳裏に思い描く形と備え付けたい機能を思い書けば創り上げてくれるので、かなりお手軽である。実質、必要なのは器となる形態のイメージと必要な機能内容の設定だけなのだから。

「ホント、ありえない」

あまりの容易さ加減に、ボソリと言葉を漏らすと同時に、手の内の空ろには鈍く光を放つ物体。

真円を模り、銀に似た貴金属の蓋と胴を持ち、同じ色の鎖を持つソレは、見た目はまさに「懐中時計」。蓋には唐草の細かい紋様が透かして彫られ、その隙間から文字盤らしき部分が何となく見える裏を向ければ、逆し字を描く蔦が一部に彫られており、ささやかながらも己の好みが反映されている。

胴の側部からは一部だけ螺子の様に飛び出しており、それには60センチ程の細やかな鎖が同色のリングで繋がられている。

手の内の虚空から出現した懐中時計もどきをしげしげと見つめ、出っ張った螺子を押し蓋を開ける。カチリと金属が擦れる音が微かに聞こえ、掌中のソレは蓋を上げた。

懐中時計であれば、文字盤である筈の場所は明らかに作りが変わっていた。

中央には、何かを乗せる為の窪み、その窪みの前にはボタンらしきモノが二つ。そして、淵に沿って『甲乙丙丁』などと刻まれている。

．．
まあ、懐中時計として使用するワケじゃないから納得できるけど．

私の中二病加減も露呈した気がする

等と、遠い目をして時既に遅し。

物体として成り立ってしまったているモノをまた、壊すのも勿体無いと思い、いそいそと懐へと仕舞ったのだった。

「こんな感じで作れるなら、装備品買う必要性なかったかも」

ちよつと一人ごちて、出た出費分を考えると涙が流れたのは致し方ない、と思う。

ただ、思いなおせば今作った懐中時計モドキのようなモノをわざわざ持っていて、怪しまれるだろうなという思考に行き着いたので、先立つた出費は必要経費と思っておくことにする。

そう思わないと、勿体無い病に煩わされるので苦肉の策である。

「無事、創れたようだな」

「まあ、ね　ただキチンと機能するかは、使ってみないとわかんないけどね」

「そうだな」と言うファルの同意の言葉に、苦笑を浮かべながらベッドの上に広げた荷物を鞆に入れる。ウィークリーパックも最終日となってしまうた為、次の町へと向かう為に荷造りも並行して行っていたのである。

もう少しゆっくりしたかったのが正直な所ではあるが、懐中時計もどきの試行も行いたいという思いもある為、さくさくと準備を整えて行く。

先程創った道具を正確に扱う為には、対象の一部が必要なのだが、如何な事、この町で瘴気を振りまくアレと対峙するワケにも行かず、移動の道中にて採取を行う事にしたのだった。

まあ、長く留まるつもりはなかったし、ね

なんて事を思いながら、荷物を詰め終わった鞆をマントの術式に投げ入れ、すっぽりと頭から被る。どこぞのお偉いさんの所為でロボロになってしまった裾は修復魔法で元通りになっている。

姿見の前で、己の姿を確認した後、部屋を一通り見回し忘れ物が無いか確認する。

忘れても取りにはこれるけど、立つ鳥跡を濁さずって言うしね

部屋のドアを開け、潜る。静かにドアを閉め、カウンターへ向かう。

お世話になった女将さんや旦那さんに声をかけ、挨拶をし私は宿を後にした。

日も真上に昇った正午、賑わう通りをヒトを避けながら歩く。町を出るまでは、のんびりと散策をしその後、密林内の開けた場所にてアレを誘き出す心算では、ある。

うまく運ぶ事を祈りながらも、それに対しての不安が心中を掠めるが、そうになったらそうだった時だと思いを宥める。

まあ、陽が落ち始めるまではブラブラしよっかな

そう考えを落ち着かせ、露天のドライフルーツを幾つか買い込みながら町を後にしたのだった。

「・・・しかし、ド紫蛍光色のドライフルーツがマンゴー味かあしかも、甘・・・」

珍しさで購入した食べ物により撃沈する、彼女の姿が見られたと

かなんとか。

涙目で、ドライフルーツを完食する彼女に疑問符を飛ばす世界と
気性が精霊達に目撃されたいらしい。

「まだ、見つからぬのかえ？」

箱庭の様に切り取られた空間に響く、苛立ちを含んだ声音。この
空間に存在するのは、声の主と中央に聳える蔦の蔓延った巨木。
まるで、女の言葉に応える様に巨木の根が這う大地はうねる。

「妾に傷をつけた者を許すでない・・・妾の邪魔をする者は駆逐せ
よ」

女の口元に浮かぶは、笑み。堪えきれずに零れた晒いが空間に反
響した。

24 ソウサクするモノ（後書き）

震災津波風評被害に遭われた皆様に心よりお見舞い申し上げます。
亡くなられた方々とそのご遺族の方々にお悔やみを申し上げます。

今、命を削って修復作業をしていての方々、撤去作業を進めて
くれている方々、被災地で救命にあたってくれている方々、そして
必死に生活されている被災者の方々に感謝と応援^{エール}を。
少しでも、多くの方が救出される事を願っています。

25 検索するモノ

「さて、陽も落ち始めたし 場所もオツケーっとも、ちょっとしたら始めますか」

ライルから確實10キロは離れているであろう密林の奥地にある、ある程度開けた場所にて空が小金から茜色に移り変わるのを見上げながら呟く。

町を出たのは、どうにかドライフルーツもファルと黒玲の手助けを借りて消化しきったおやつ時。そして、今の時刻は夕刻にかかるぐらい、おおよそ町を出た時間から2時間弱経過したぐらいという所である。

明からに10キロ地点にいるにはおかしい時間換算であるのが、ご理解頂けると思う。

種明かしとしては、少し考え方を見直してみただけの話なのだが、自分の中で整理するのに少しお付き合い頂けると嬉しい

「トール、誰にむけて話している？」

「あー・・・気にしないでくれると嬉しい、よ？」

不意に向けられたファルからの問い掛けに、てへっと可愛く小首を傾げながら誤魔化す。ファルと同じように、クエスチョンマークを頭上に浮かべている黒玲にも「気にしないで」とだけ、声をかける。

納得したわけでもなさそうだが、そこまで追及する気もないのか二人は再びのんびりとお茶に口をつけている。

ふいー・・・一人芝居を心中でしてみた、なんて誰が素面で言えようかつ

心中で遠い目をしながら、そんな事を思いつつ思考を先ほどのネタへと戻す。

考え方を見直す切欠となったのは、午前中に行使した創造という作業。無から有を作り出す、ならばこの世界の法則に法らない術も使える筈、とそんな風に考えたわけである。

複製は、もともとある手順を私的不要部分を省き作り変えた言わば「二次創作」だが、今度は術自体を一次創作してしまえばいい、と。

そもそも、ファルから享受された魔術は一代目バシレースの方が使用していた術である。その頃から既に誰かが体系化していなければ、術は存在していない筈と捉える。一代目が「魔術」を作ったというなれば、講義中にファルが小ネタにでも出すだろうが、それもなかった。

総合するに、「バシレース」ではない誰かが魔術を作ったと言う事に気付いたワケである。

無いなら、作ればいいじゃない

どこかの黒いお狐様の宿の女将さんが飛び出た気もしたが、そして作るモノも明らかに違うのだが其処は置いておくとして、とその時は思考したのである。

行った事の無い土地に行くその前提があるから今までの術は成り立たなかった、ならば行きたい土地に行く為の条件をつければいい。

簡単に言えば、本とネットの違いだろうか。

とある冊子に載っている有名な格言があるでしょう、読んだ事のある人はその格言がどのようなものかは理解できるだろう。この行為が、今この世界で体系化されている術に相当する。

では、読んだ事がない人がその格言がどのようなものか知りたい場合、どういう行動にでるか？

それは、今や向こうの日常になりつつあるインターネットにおいて検索をかけるのではないだろうか。本のタイトル、著者そこまで分ければ粗方絞れるだろうし、その項目に目的の「格言」という単語を組み込めば大体はヒットできるのではないだろうか？

その検索するという行為を、新たに術として作り出そうと考えたのである。

無理矢理な力技的感觉も受けなくは無いが、その術が成功して此処にいるワケである。

ライールから10キロ離れた、密林の奥地の開けた土地に。

現状としては、早々についてしまった為にレジャーシートもどきを敷いて人型をとっている黒玲に淹れて貰ったお茶を啜りつつお菓子を食べているという、一件ピクニックに來たような状態である。

まあ、場所がなんだかんだと危険事が多い密林という前提を省いた状態ではあるが。

「周囲には、動物達の気配も御座いません」

テキパキと不必要物を片付けながら、黒玲が応える。改めて、周囲に気を配れば植物以外の気配は感じないので、そうなんだろうなあ等と思考する。

「で、トール アレをどう捕らえるつもりだ？」

「どーしようねえ・・・一部を拝借できれば、上々なんだけど」

のほほんとカップに残ったお茶を啜りながら、ファルの問い掛けに答える。

返した言葉が気に食わなかったのか、呆れの籠った視線をファルから受けるがそれは気付かないフリで言葉を続ける。

「まあ、単純作業 か、なあ とは思ってる」

そう、結局あの根から一部を採取するには対峙は避けられないだろうし、誘き出すには私自身の”魔力”を匂わせるしかないだろう。何を基準にあの根が私を探しているのか、あの出来事の直後は断定が出来なかったのだが、その後の状況を整理すると、どうも魔力の質というか、匂いというか波長というかそういった個体特有のモノを感知してるようだというのが解った。

何分、街の地下を巨大ミミズのように這い回る根を感知できしまった為に、割り出せた事ではある。マント装着時や”魔力”さえ阻む障壁行使時はさっくりとスルーされたので。

しかし、魔力で探知出来る機能とか素晴らしいね

「トールの魔力が、わかりやすいだけかもしれないがな」

等としみじみ思えば、隣からファルさんが思いつき考えなくなった項目を持ち出してくる。いつの間にこの世界は、こんなに意地が悪くなっただ等と内心ブチブチ言いながら、「いや、ほら根っこの性能が良いんだ、きつと」なんて口にしてみた。

「まあ、それも事実だろうな あの二人を追う為に、その能力が底上げされている可能性もあるだろう」

適当にでつち上げた内容に、ふむつと呟きながら顎に手を当てるその姿は手元に携帯があれば写メりたいぐらいに可愛い。待ち受けに出来たらいいのにな、なんて本体の携帯も無いのに心中で呟く。

ちまくて可愛いのは 正義 だ、と言い切ろう！

と、脱線しかけた思考を元に戻しながら「へえ」なんて相槌を返しつつ、茜色に染まった空を見上げ、腰を上げる。ゆっくりとだが、身体を動かしやすい様にほぐす私を二人は視線で追う。

「始めるのか」

静かに紡がれた言葉に「ちょうど良い頃合だしね」等と気軽に応えて、腰元に下げられている二振りのダガーを手取る。

戦闘になるのであれば、黒玲の方が私にとっては易しいのだが、今回は採取が目的の為此の二振りに頼る事になったのだ。黒玲には、私のサポートと攪乱作業を担当して貰う予定である。

凄いな、自動連続射出出来るって

そんな事を思いながらシートモードキを片付けた黒玲と視線を交えた後、私はマントと自身にかけていた術を解いたのだった。

25 検索するモノ（後書き）

読んで下さる方々、拍手を下さる方々に感謝です。

退治／対峙するモノ

先触れは、かすかな振動。それは、直ぐに足元を揺るがすモノとなる。

地面を突き上げてその姿を現したのは、強大な根。何度見たとしても、その造形に慣れる事は出来なさそうだなあ等と思いながら、後続であろう地中から突き上げてくる他の根を避ける。

気配が分かるって便利デスネ

なんて、自身の補正に感謝――（？）しながら鋭い突きを放つてくる根っこを避けたり、避けたり、偶にダガーで分断したりしつつ、司令塔だろう巨大な根の傍へと近づく。

別に採取するなら分断した先つちよだったり、ダガーに付着した粘液でもいいのだけれども。さすがに、採取だけして後は放置なんていう心算はないので、一応。

あのでっかい根っこはさくつと、土に還っていただきたいと思います

その後は、穴だらけの地面をならすんですね、わかります
・・・めんど（げふん

そんな思考をしながら、ステップを踏むかの様に根っここの攻撃を掻い潜る。後方では黒玲が援護射撃で細い根っこ（雑魚）を大地や木々に縫いとめ、私が動きやすいようにしてくれている。

黒玲を狙う根は、私の張った火属性結界に焼かれて炭と化してい

く。一応、地盤強化的な術も同時にかけているので二人の足元は鉄板10m並みの強度である。

それを根が突き破れたら、私は拍手したいと思う うん、マジで

まあ、破れたとしても 実体ではない彼ら二人・・・世界と気性にはかすり傷負わせられはしないのだろうけど、と続けて思考しながら連撃を繰り返す。

飛び散る飛沫と何ともいえない臭いに、そしてドロリと手を伝うソレに眉間にしっかりと皺が刻まれるのがわかる。そして、ダガーの切れ味も格段に落ちる。

「くっさつ、最悪」

それだけを呟き、力付くで根の先端部サイドに刃を突き立て、思い切り横へ滑らせる。途中で、咆哮を上げる様に根がのた打ち回るが、そんなもの知った事か とより力を込めて刃を進め切る。

それと同時に、思い切り根を蹴り、即座に距離をとるそんな私の手には、まだびちびちと蠢いている根っこの先端部。ポイ捨てのようにファル達の方へと投げて、ついでにダガーも丁寧に彼に投げ両手を空ける。

「極力、術は使いたくなかったんだけど、なつと スーガ 縛」

使用したのは、束縛の術。不可視の鎖が対象の身体を絡め取り、動きを留める為のモノ。故に、根はその鎖から逃れようとその身を蠢かせているが、僅かにその身を身じろがせている様にしか見えない。

周囲の細い根達も同じく、術に縛られている為大きく動けない事を確認し、身体を対象へと向ける。静かに、口から空気を吸い込み

集中する。思い切り異臭を吸い込んでしまい、噎せかけるが気力で嚥下する。

喚ぶは、浄化の雷^{いかづち}そして、還すは大地 繰^くるは、純然たる力

そう心中で精神統一の様に繰り返し思い描く。そして、そのイメージに呼応するように空気が動き始める。風は雲を呼び、雷雲と為る。雷雲は、激しい雷を生み出し頭上を明るく照らす。

そして、それは一言で終わる事となった。

「クラえ」

激しい雷鳴と同時に、空気を震わせた眩きは対象を貫く雷に付与され瘴気を喰らい尽くす。雷は、この場に在る根を一つ残らず貫き炭化させた。

頭上の雷雲が生み出した、多量の雨が大地を叩き黒く炭と化した根を其々の穴へと押し流す。瘴気を纏う事のない炭は、やがて穴の中で大地へと還るだろう。

身体に付着した粘液も、モノを焼く臭いも、激しく降り注ぐ雨と共に流されていく。

「・・・一応、本日の目的は達成 かな？」

マントや衣服が雨を含んで重くなるのも気にせず、そうほっと息を吐き出すと共に眩く。

地精霊^{リイーデ}に呼びかけ、地中に開いたであろう穴を出来る所まで塞ぐように指示を出す。

先の喚びかけに応えてくれた雷精霊^{デア}と水精霊^{ウィーフ}には、「ありがとう」と礼を述べる。

濡れた衣服の感触に、乾かさないとなとだけ思考を巡らせ雨を避けようと一歩踏み出す。その瞬間に感じた気配に、背を向けていた方向を振り返った。

しっかりと交わったソレは、海の碧でありこちらの月の一つに良く似た色。雨の中でも分かる、褐色の滑らかな肌とヒトのものよりは長く尖った耳に白い髪。

だが、それ以前にこの場に生物が・・・それも小学生中学年程の子がいることにとても驚いていた。

視線を交わす相手も、微動だにしない。この場にヒトがいる事を驚いているのか、それとも息を殺して私をやりすごすつもりだったか振り返るとは思わなかったのかは知らない。

やっとのことで、紡いだ言葉はブツ切れでとても不恰好な音だった。

「こ、ども？」

降りしきる雨の中、不思議なほどにその言葉は通った。

通ったという事は、相手にも聞こえた可能性があるという事である。が、それを考えに上らせるだけの思考能力は無かった。

まあ、上らせてどうにか出来たかはわからないけれども

そこは個人の手腕であり、技量であるワケですね！ わかります！

後にそう思った事を、追記しておく。

そして、数刻後。

一番近くの町の宿屋にて、ベットに身体を横たえる目の前の人物と椅子に座って対峙していた。

睨み付けられるが合う視線に心中で斜め上に視線を向けながら、どうしたものかとフードの上から頭を搔く。

嫌がるのを無理やり連れた来たワケでは無いものの、ソレに近い状態で此処に連れて来てしまっている為に下手な内容は喋れない。

「ええと、身体に痛みなどはない デス力？」

だがしかし、喋らねばこの空気は払拭されない。ので、一応頑張ってみるが 目の前の人物から誘拐犯とか言われてしまえばもう苦笑いするしかないなあ等と思う。

それでも、あの雨の中、気絶した目の前の人物をそのまま放置して姿を消す事は自分には出来なかった。

出来る訳がないのだ 私を育てた倫理が道德が逃してはくれない

そんな事を思いながら、ベッドの上からこちらを見る人物を伺う。

「・・・ああ」

出来るだけ、刺激しないよう問いかけた言葉に暫しの沈黙の後、落ち着いた声音で肯定を返される。そして、また暫しの沈黙。

沈黙が居た堪れず、お茶でも淹れてこようかと椅子から腰を上げる動作に移行しようとする。

その時、声はかかった。

「腹のは、アンタが治してくれたのか？」

どうやら、その沈黙は問い掛けを言葉にする為の余白だったようである。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5802j/>

世界は無常に満ちている

2011年5月24日21時04分発行